

---

# 新訳・仮面ライダードラゴンナイト

断空我

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

新訳・仮面ライダードラゴンナイト

### 【Nコード】

N5042W

### 【作者名】

断空我

### 【あらすじ】

鏡の中から現れる不気味な怪物達、それらから人を守ろうとする二人の仮面ライダー、しかし、これは始まりに過ぎなかった。(ようやく投稿できました) 仮面ライダードラゴンナイトの二次創作です。

色々なものとクロスオーバーしているので、不快を感じたり、面白くないと思ったら即座に引き返してください。中傷などは一切受け付けません。

## EPISODE 1 (前書き)

ようやく投稿しました。楽しんでください。

## EPISODE 1

吉井明久は姫路瑞希と島田美波に連行される形で映画館の前に来ていた。

どうして映画館なのかというと彼らが通っている文月学園試験召喚獣戦争、略して試召戦争の終わった後に映画を見に行こうという話になった。

ちなみに明久はそんな約束をした覚えはない。

「吉井君、どの映画を見ますか？」

「え・・・僕は・・・いいよ、二人で楽しんできなよ」

「アキ、映画嫌いなの？」

島田美波がポニーテールの髪を揺らして明久に尋ねる。

明久は映画が嫌いではない、むしろ大好きな方だ。ただ、一つ問題がある。

「（映画一つ見るのに高校生1500円・・・ポップコーンとジュースに使用する代金およそ1200円、合計で2700円・・・その後のクレープ代の消費を考えると、ああ、次の仕送りまで残りの生活は水と塩確定だよなあ）」

彼は両親と別居していて一人で生活をしている。勿論両親から生活費の支給はあるんだが、それをゲームや漫画といったものに消費しているので手持ちが少ない。

「諦める、明久……」

「雄二？（そうだ！雄二に金を借りて）」

聞き覚えのある声に後ろを振り返る明久だが、顔が固まる。

「男は……無力だ」

そこにはAクラス代表霧島翔子に手錠で両手の自由を奪われた坂本雄二を見て彼は呆然とする。

一応、彼の名誉のためにいっておくが変な趣味は無い。

「雄二、どれを見る？」

「帰るといふ選択肢はないのか？」

「……じゃあ、これを見る」

霧島翔子が指差したのはソレ タル ーイン と書かれた実際の出  
来事を映画にした作品で、映像のクオリティや出演者の演技力など  
とても評価されていて人気が高いのだが、人気が余りよくない。  
その理由が。

「おい！それ12時間する映画だぞ！？」

「……2回見る」

「一日映画館にいることになるじゃねえか！？」

「……学校じゃいつも一緒にいられないからその分一緒にいる」

「ふざけんな！俺は帰る！」

あまりに実話を追求しすぎたために膨大な時間となっているため人氣が少ない映画を選んだ翔子を睨みながら。

雄二（手錠つき）はぶんすか怒りながら翔子から離れようとするが。

「・・・逃がさない」

一瞬で雄二の背後に回りこみカバンの中から黒光りするものを背中に押し付けた。

その途端、眩い光りが辺りに飛び散ること数秒後、

「あが・・・がが・・・ぐげ・・・」

地面で意識を失っている雄二を引きずりながら翔子はカバンの中にスタンガン（安全装置解除ver）をしまつて受付まで歩いていく。

「霧島さん一途ですねー」

「羨ましいわぁ」

「・・・帰りたい」

少しずれた発言をする二人を見ながら明久はぼつりと呟いた。

桜ヶ丘高等学校にある音楽準備室、そこは放課後軽音部部室となっている。



「あずにゃーん」

「ひゃっ!」

いきなり背後から抱きしめられて梓は小さな悲鳴を上げる。

抱きついてきたのは軽音部の部員でなにかと彼女に抱きついてくる平沢唯だ。

「唯先輩!はなれてくださーい!」

「ええ〜、あずにゃんのいけずう、あれ漣ちゃん、どうして隅にいるの?」

「聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない」

幽霊や怖い話が苦手な漣は耳をふさいでガタガタと震えていた。

「でも、とんでんせつって色々あるのね、“鏡の中の怪物”や“死者が蘇る”“仮面ライダー”のもあれば、バイオリンを奏でて歩く少年なんてあるのね」

「あいつ・・・どうしてるかな」

「あいつ・・・あ、春風の事か?」

漣の呟きに律が尋ねる。二人はどこか懐かしいものを思い出したかのような表情をしている。

「春風？誰ですか？」

「聞いた事ないね」

「二人の友達？」

「友達っていうか、知り合いだな、バイオリンがすんげえ上手いんだけど、愛想悪くてさあ、付き合いくかつたね」

「そんなことはないぞ、春風は色々と優しくかつたぞ、誰も面倒を見ていなかった飼育小屋のウサギのジミー君ににんじんを毎日あげたり、捨てられた子猫を家までつれて帰って貰い手を捜したり・・・って、そんな目でみるなあー！」

全員の視線を受けて澁は叫んだ。

どこにでもある駐車場、一人のサラリーマンが止めてある車に乗り込もうとしたとき、窓から赤い怪物が現れてサラリーマンは悲鳴を上げる暇なく引きずり込まれた。

サラリーマンが引きずり込まれた場所は先ほどと全く変わっていないかった、違いを言うなら人の気配がないくらいだろう。

赤い怪物 レッド・ミニオン はサラリーマンを引きずりながらどこかへ連れて行くところとしていた。

レッド・ミニオンの後ろからバイクのエンジン音が響いた。

「ググッ！」

振り返ろうとしたレッド・ミニオンの眼前にバイクの後輪がぶつかり後ろに大きく仰け反り、さらに拳で殴られて後ろに大の字で倒れ込む。

バイクから下りたのは中世の甲冑のような鎧を纏った存在。

左腰の部分には細長い剣を持ち、顔の部分はコウモリを模したような仮面で隠されている。

この存在を簡単な言葉で表すなら騎士が妥当だろう。

レッド・ミニオンは起き上がって背中の手裏剣を構える。

騎士は腰の剣を抜いて手裏剣を受け止めた。

「ギギー！」

レッド・ミニオンが何かをする前に騎士が足を蹴り飛ばして地面に倒れ込んだ隙について剣を体につきたてる。

小さな悲鳴をあげてレッド・ミニオンは粒子となって消滅した。

騎士は倒れているサラリーマンを担いで近くの車の窓を潜り抜ける。すると、先ほどと同じ景色に戻る。

「よっこいっしょ」

騎士は青い光りに包まれて鎧が消えた時、そこには少年がたっていた。

癖のありそうなボサボサの髪で、どこかの制服を身に纏っている。

少年はサラリーマンを車の横に寝かせて歩いていく。

## EPISODE 2

「~~~~」

あるマンションの一室で春風蓮司はフライパンを動かして朝食の準備をしていた。フライパンの上にはベーコンが香ばしい臭いを漂わせている。

蓮司は華麗な手さばきでフライパンの上からベーコンを二つの皿に移して焼けたトーストもその皿に載せた。

「よしっ、できたっど……」

微笑み、蓮司は窓際に置かれている置時計を見る。時計の針は7時10分を指している。

「そろそろあいつを起こすか」

蓮司はすたすたと歩いて部屋のドアを開けた。

部屋はそれなりに広くいくつかの棚があつてそこには勉強の参考書・  
・などはなく、ゲームや漫画といった娯楽系のモノばかり置いてある。

そして部屋の隅にベッドがありそこには毛布に包まった一人の男の子がいた。

「おい、明久、起きろ、朝だぞ」

蓮司は明久の体をゆさゆさと揺らす。

「・・・あと・・・五分」

「遅刻していいのか？」

「・・・」

返事は毛布に包まる事だった。

ため息を吐いて蓮司は一旦明久の部屋を出てフライパンとおたまを取り出して構える。

「では、俺の演奏をとくと楽しみたまえ」

数秒後、明久の悲鳴が聞こえてきた。

「ねえ、蓮司僕が悪かったけどさ・・・お願いだから料理のための道具であんな音かなでないですよ」

「だったらちゃんと起きてくれ、生活態度を少しばかり改善すべきだ」

「まあ、確かにそうだよね、家に帰っても一人しかいないから僕の家泊まってもらってくれているんだから生活態度くらい治さないとね」

「まあ、危機を感じれば、お前の家にお世話になっているから偉そうな事は言えないんだがやはり生活態度は治すべきだと思う」

通学路を歩きながら明久と蓮司は会話をしている。

吉井明久は一人暮らしをしていた。

明久は両親と姉が海外に暮らしていて海外に行くのがイヤで（色々な理由があるが、一人暮らしをしたかったというのが主な理由であるが）蓮司の場合は家族の方たちに殺されそうになるため（本当の話）家を時々抜け出していて、明久の家に時々泊まりこんでいる。今回、蓮司は家族の人達と少し喧嘩してしまったために明久の家に転がり込んでいた。

「そつだね」

「やれやれ・・・」

明久が笑っているのを見て蓮司は苦笑して彼の隣を歩く。

今このどうでもよい時間も二人にとっては幸せの一部分だった。

文月学園、オカルトと科学を混ぜ合わせた召喚獣システムを導入している学校でクラスはA～Fまであり、そのクラスは試験の結果によつて振り分けられる事となつていて成績が良い者ほど最高の設備で勉強する事ができて結果が悪い者ほど最悪の設備で勉強をしなければならず、さらに成績が良い者が悪い者を見下すということがあつたりする。

そして、蓮司と明久の所属するFクラスの設備は最下層＋アルファという状態で畳にみかん箱という状態であつた。

これは文月学園で行なわれる試召戦争にFクラスが敗北してしまつたからである。文月学園は前に述べたようにオカルトと科学を混ぜ合わせた技術、召喚獣システムを導入している。召喚獣は生徒のデフォルト状態の姿をしていて、生徒は召喚獣を操つて戦う試召戦争を行なつており、試召戦争に敗北すると施設のランクを一ランク下げられてしまうのだ。

「おお、春風に明久、おはようなのじゃ」

「おはよう ひよぐはあ!？」

「木下、朝からなんて格好をしているんだ？」

Fクラスの仲間で明久の友人である木下秀吉はこういうわけかメイド服を着ていて、ソレを見た明久は鼻血を流して倒れ込む。

「む、ああ、演劇の衣装を試着していてそのまま来てしまったようじゃ、すぐに着替えてくるの」

秀吉は演劇部に所属しているのだが、どういうわけか女の子扱いされていて明久に至っては完全に女の子だと思いつつある。

「・・・良い写真ゲット」

「カメラのレンズが血まみれだがそれで撮影できたのか？ 土屋？」

畳に顔を押し付けてカメラを秀吉に向けている人物は土屋康太、Fクラスに所属していてムツツリー二という呼び名を持っている。ちなみにムツツリー二というのはムツソリー二とムツツリスケベの組み合わせであった。

「よお、明久・・・春風」

「少しやつれている様だな・・・何かあったのか？」

「翔子・・・に映画につれていかれてな、逃げようとしたらスタン

ガン、目を覚ましたらスタンガンでずうっと意識を奪われていた」

「それは・・・不幸だったな」

蓮司はやれやれという表情で自分の席へ歩いていく。

野性味溢れる男性、坂本雄二はAクラスとの試召戦争に敗北した時にAクラス代表の霧島翔子と付き合うこととなってしまい。彼女の愛から逃れるために色々とひどい目にあっていた。

「はあ、疲れたね」

「そうだな、全く、お前と坂本が西村先生に迷惑をかけたからな」

「いや、僕は関係ないよ、そもそも雄二が霧島さんから逃げる事がいけないんだよ」

「あいつは自由に生きたいんだろうよ・・・まあ、試召戦争の敗因に問題があるんだが」

少し前、FクラスはAクラスに試召戦争を申し込んだ。長く厳しくも辛い戦いを乗り越えてAクラスに勝利してシステムデスクを手に入れるはずだった。

しかし、最後の最後で代表である坂本雄二の爪が甘かったためにAクラスに負けてしまいFクラスの設備は卓袱台からみかん箱へとラックダウンし、担任も鉄人となってしまい明久と雄二は最悪な結果を迎えてしまう。

「今回はお前達が悪い、なんで女子更衣室になんて入り込む？西村先生に追いかけられているとはいえ」

「あれは仕方ないんだよ！？鉄人がどこまでも追いかけてくるからさ！？」

「大人しく捕まる方が楽とは考えないのか？」

「無理だよ！？それにあの時は蓮司が傍にいたからそこまでいかなかったんだよ！？」

「ふーん」

蓮司はカバンを地面に置いて、子どもが蹴り飛ばしてきたサッカー

ボールをキャッチしてその子に投げ返す。

女子高生中野梓はギターを背負って自宅への道を歩いていたのだが、どうも、さつきから体が重い。

歩くたびに何かに引き寄せられているような感覚がある。

「うーん、風邪でもひいたのかな？」

誰に言うまでも無く呟いて帰ったら早く寝ようと梓が歩き出した時、横に巨大な蜘蛛が見えた。

「えっ!？」

梓は驚いて近くのショーウィンドウを見る。

けれど、そこにはなにもない、あるのは綺麗な服や靴が見えるだけ。

「気のせいだよな？」

自分に言い聞かせるようにして梓は家へ歩き出す。

だが、いきなり後ろからぐっと引き寄せられて梓はそのままショーウィンドウに頭を打ちつけるはずだったのだが、そのままぐっと梓は鏡の中に消えた。

「え……なにこれ？」

梓は呆然と目の前を見て呟く。

彼女の前には先ほどまで背を向けていたお店のウィンドウが見える。

一体、何が起きているのか、梓は混乱するばかりだ。  
その間も彼女は連行される囚人みたいにどこかへ連れて行かれる。

「……っ!?」

一体、何が後ろにいるのだろうかと気になってみた梓は言葉を失う。  
居たのは巨大な蜘蛛。全身が機械的な姿をしているのに生物みたいな部分もあり、ロボットなのか生物なのかわからない。

逃げないと、と体を動かさそうとするがいつの間にか全身が糸で包まれていて逃げる事ができなかった。

巨大な蜘蛛 デイスパイダー は大きな口をあけてゆっくりと梓を引き寄せていく。

デイスパイダーの口の大きさと悪臭に彼女の恐怖心は最高度に達する。

「（助けて……ムギ先輩……律先輩……澁先輩、唯先輩……  
純……憂……誰か!）」

後少しというところで銀色の閃光のようなものがデイスパイダーに体当たりした。

デイスパイダーはころころと転がって銀色の閃光……いや細長いバイクのような乗り物 アドベントサイクル は急停車して上部カバーが開いてそこから一人の騎士が出てくる。

「え……」

梓は呆然と現れた騎士を見ている。騎士は無言で乗り物から降りて梓を拘束している糸を引きちぎってしまう。

「結構でかいな……」

騎士は腰のホルダーから細長い剣を抜いて構える。

「でも、敵じゃない」

そういつて騎士はデイスパイダーの足を切り落とす。

斬られた箇所から血のようなものが噴出してデイスパイダーは悲鳴を上げるが騎士はそんなものお構いなしとばかりに背中に飛び乗って剣を突き刺した。

体に激痛が走ってデイスパイダーは体をくねらせて騎士を落とそうとする。

ソレよりも早く騎士は地面に着地して腹部のベルトから一枚のカードを抜いた。

持っている剣の柄を引っ張る、すると側面がスライドして開く。騎士はそこにカードを入れて仕舞う。

『SWORDVENT』

剣から音声が流れ、空に黒い大きな蝙蝠が現れて一振りの槍 ウィングランス を落とす。

騎士はウィングランスを掴んでそのままデイスパイダーの顔に突き立てた。

「GIGAAAAA AAAAAA AAAAAA AAAAAA!」

大きな悲鳴を上げてデイスパイダーは口から糸を吐くが騎士は大きく後ろへ跳躍して糸を避ける。

着地すると同時にもう一枚カードをベルトから抜いて剣に仕舞う。

『FINALVENT』

「これで終わりだ！」

騎士は叫んで駆け出す。その後ろを蝙蝠が覆いかぶさるようとび、騎士の背中にマントとなつてくつつき、騎士はそのまま地面を蹴る。空高く舞い上がりマントが騎士を包み込んで槍のようなものへ形を変えてデイスパイダーを貫く。貫かれた場所から大爆発を起こした。

「……あ……」

梓は呆然と目の前で起こった出来事を見ているだけしか出来なかった。騎士はゆっくりと爆煙の中から現れて梓の前に跪く。

「大丈夫か？」

「あ……はい……」

「そっか……よかった」

騎士は笑った（仮面をしているから笑っているのかはわからない）

「ちょっと失礼」

「きゃっ！」

梓は小さな悲鳴を上げる。騎士はいきなり梓を抱きかかえたのだ。世間で言うお姫様抱っこ、男にされたことなどなかったので顔が真っ赤になった。

騎士はそのまま彼女が立っていたショーウィンドウの前まできてそのまますり抜けるように入り込んだ。

それを目の前で、実際に起こった出来事に梓は呆然としてしまう。

「おろすよ?」

声が聞こえて顔を上げるとそこにいたのは騎士ではなく一人の少年だった。年齢は自分と同じか少し上くらい、とても優しそうな表情をしていて、梓は大樹を想像してしまった。

「あ……はい」

梓はゆっくりと地面に両足をつけて立つ、まるでここ数年間足をつけていなかったかのように足取りがおぼつかない。

「大丈夫……って、そんなわけないか、まあ、今日の出来事は悪い夢をみたとかそう思え」

そういつて少年は傍にあったカバンを掴んで歩き去っていく。梓はいろいろな事を聞こうとしたが、少年の姿は無かった。

## EPISODE 3 (前書き)

ユーザー制限解除しました。感想沢山ください！

### EPISODE 3

「やり直し、これじゃあ、全然ダメね」

「えっ・・・またですか・・・」

ATASHIジャーナルの編集長、大久保の言葉に佐伯風華はええーと声を漏らす。

長い髪の毛を後ろに束ねてがつくりとため息を吐くと胸元の山が揺れた。

「全く・・・あなたがやりたいといったのよ？失踪事件の真相を追いかけるって・・・なのに大した情報も無く、手に入れたのは・・・被害者の親御さんの悲しみの声、これが大きな事件だったら人の心をつかむ事は出来るわ。でも、この事件はまだ小さな火でしかない」

「・・・でも」

「あなたの過去からしたら大きな事かもしれない・・・でも、普通の人、世間に対して全く目を向けていない人や幸せな家庭の人間がこの記事に目を通して何も感じない、人の心に届かせる記事を書きなさい！」

「・・・はい」

頂垂れて佐伯は自分の机に座る。

「連続失踪事件・・・」

数ヶ月前からこの街で発生している事件、何人も人間が失踪するという内容。失踪している人間に共通している点はまるでない。街では都市伝説と囁かれているこの事件、その事件の被害者は必ず帰ってくることを信じている、それを佐伯は伝えないといけない。あの子のような辛い思いを他の子にさせないためにも。

「……がんばるぞ！」

佐伯風華は立ち上がり叫ぶ。

「佐伯、うるさい！」

大久保編集長に怒鳴られて佐伯はしゅん、と頂垂れた。

桜ヶ丘女子高等学校一年生の教室で中野梓はぼーっと昨日の出来事を思い返していた。

「（昨日のあれ・・・なんだったんだろ？）」

思い出すのは不気味な蜘蛛の怪物、そして颯爽と現れた黒い騎士。

「カツコよかったなあ・・・」

「なにが？」

「わっ!？」

ぼつりと呟いていると友達の平沢憂が尋ねる。  
梓は驚いて席から立ち上がった。

「憂・・・脅かさないでよ・・・」

「あ、ごめんね、梓ちゃん」

「ううん、何かよう?」

「あ、えつとね・・・放課後、少し付き合っただけでいいかな?」

「うん、いいよ」

それから二人は他愛のない話を始める。  
話が終わる頃には梓は騎士や怪物の存在などすっかり忘れてしまっていた。

大勢の人が歩いている道、サラリーマンや主婦といった人達がせつせと日々の生活のために歩いている。

だから、片隅や鏡のことなどにいちいち注意を向けることが無い。  
誰も見る事がない鏡の向こう、そこにはもう一つの世界が広がっている。

広がっている世界の方では先日、黒い騎士が倒したディスプレイの残骸が転がっているのだが、それが徐々に集まって新たな形を成していく。

復活の日はすぐ……

「もうイヤだああああああああああああああああああ！」

吉井明久の絶望のような声が聞こえてきて春風蓮司は視線を向ける。

「我慢しろ、今回はお前が悪い。手伝ってやっているだけありがたいと思えおつと」

そういつて蓮司は手から落としそうになった段ボール箱を持ち直す。二人は大量の段ボール箱を地下にある保管庫に運んでいるのだ。

一時間前、明久は姫路さんの料理を食べて発狂して窓ガラスをぶち割るという奇行に出た。それにより鉄人の制裁&テスト問題を地下室へ運ぶという罰則を受けているのだ。

ただ、テストの量があまりにも多すぎるのでかわいそうに思った蓮司は手伝いを申し出た。

「そうだけどさ・・・はぁ」

「よくあんな殺人的料理を食べられるな？」

「料理人といえるくらいの実力を持っている蓮司からしたら仕方ないけどさ、姫路さんだって頑張っているんだからそれを否定することはできないよ」

「・・・お前らしいな」

「まあね・・・」

蓮司が苦笑して明久もつられるように笑う。

その頃、平沢憂と中野梓はショッピングモールの中にいた。  
この街の中でかなりの規模で服の店だけでいくつもの店舗がある。  
二人はそのいくつかの一つの店の中で服を選んでいた。

「梓ちゃん、これどうかな？」

「あれ、それ憂が着るの？」

「ううん、お姉ちゃんに！」

「ああー、唯先輩かぁ・・・似合うかも！」

「そう？よかったぁ」

二人は楽しげに服を選んでいる。  
だが、気づいていなかった。彼女達を狙っている存在に。

「ありがとうございました〜」

店を出た二人はこれからどうするかを話しながらショッピングモール内を歩いていた。

「一杯買ったね!」

「少し・・・多すぎる気もするけどね」

梓は苦笑しながらちらつと周りを見ている。

鏡などを見ても怪物なんかいない。

やはりあれは夢だったんだろうか?と思おうとしている。

キイイイイイイイイイ

金属がこすり合わせたような音が響き渡る。

「え・・・」

「どうしたの?梓ちゃん?」

「憂には・・・聞こえないの?」

「え?何が」

どうやらこの音は自分にしか聞こえていないようだ、と思っているとすぐ傍の鏡から巨大な足が現れて憂と梓を捕まえる。二人は悲鳴を上げる暇もなく引きずり込まれた。

「いたた・・・」

「あ・・・梓ちゃん・・・」

「・・・え？」

憂と梓は目の前にいる存在に驚きを隠せなかった。

そして、梓の驚きはさらに大きい、なぜなら先日、黒い騎士によって倒されたはずのデイスパイダーがいたから。

ただ、デイスパイダーの外見が少し違う。

人の外見と似たような上半身と蜘蛛が合体した姿、デイスパイダーは唸りながらゆっくりとこちらへ近づいてくる。

「う、憂にげ」

逃げようといおうとしたところでデイスパイダーRは口から大量の針を吐き出す。

針が憂と梓の逃げ道を絶つ様にいくつも突き刺さった。

デイスパイダーRはゆっくりとまるで恐怖を与えようとするかのよう二人に近づいていくがバイクのエンジン音が辺りに響く。

「なに・・・？」

「もしかして・・・」

二人が振り返ると銀色のバイク・アドベントサイクルから降り立って細長い剣を構えた黒い騎士がいた。

「どうして・・・倒したはずだぞ？」

黒い騎士ウイングナイトはブラックバイザーを構えて目の前にいる  
デイスパイダーRに驚いていた。

「とにかく」

ウイングナイトはベルトにセットされているカードデッキからアド  
ベントカードを引き抜いてブラックバイザーの側面にカードをベン  
トインする。

『ATTACKVENT』

音声が響いてアドベントビースト、ブラックウイングがすぐ横のピ  
ルの鏡から現れてそのままデイスパイダーRに体当たりをするはず  
だった。

だが、デイスパイダーRは奇声を上げて前足でブラックウイングを  
地面に叩き伏せる。

「なっ・・・パワーがあがってる!？」

驚きながらもすぐ近くで震えている憂と梓へと近づいていく。  
ウイングナイトの動きに気づいたのかデイスパイダーRはブラック  
ウイングを一撃叩き込んでからウイングナイトへ襲い掛かる。

「くっ!」

振り下ろされた前足をブラックバイザーでいなして、デイスパイダ

ーの下を潜り抜けた後、  
ジャンプしてデイスパイダーRの背中に飛び乗るようにしてブラッ  
クバイザーで斬りつける。

「早く逃げろ！」

デイスパイダーRの気をそらしながらウィングナイトは梓と憂へ逃  
げるように叫ぶが二人は恐怖に体が支配されているようですぐに逃  
げ出せそうにない事に気づく。

「ブラックウィング！」

地面に半ば埋もれていたブラックウィングが鳴きながら地面すれす  
れを飛行して梓と憂の前に止まる。

「そいつに乗って遠くに逃げ・・・うおっ」

デイスパイダーRの後ろ足がぐるりと動いてウィングナイトの背中  
を掴んで地面に叩き伏せた。

予想以上の衝撃を受けて意識が遠のきそうになるがすぐに起き上が  
って一枚のアドベントカードをブラックバイザーにベントインしよ  
うとする。

だが、デイスパイダーはソレを見越していたようで口から白い糸を  
吐く。

「しまっ・・・」

一瞬で体の自由を奪われてウィングナイトは後ろに倒れてしまいそ  
うになるのをこらえる。

「だ、大丈夫ですか！」

「俺にかまうな！・・・早く逃げるんだ！」

「で・・・でも」

後ろから聞こえた声に大丈夫だと返しながら前を見たらディスプレイが口から大量の針を射出した。

体の自由を奪われているとはいえ、この程度よけられる。  
だが。

「（ダメだ・・・避けたら後ろの子にあたってしまう！）」

絶対絶命！ウイングナイトは来るであろうダメージに耐えようとする。

『SWORDVENT』

「つりゃー！」

襲い来る針達を横から赤い戦士が持っている武器で叩き落していく。  
チャリチャリチャリと針が渴いた音を絶てて地面に落ちた。

「・・・ヒーローみたいな登場だな・・・おい」

「まあ、ヒーローだからね？」

現れたのは二人目の“騎士”の名前を関する戦士ヒーロー  
名をドラゴンナイト。

「振り切るよ！」

ドラゴンナイトは持っている武器、ドラグセイバーを構えながら目の前のデイスパイダーRを睨む。

「悪いが、この系の解除に時間がかかる・・・あれの相手を任せていいか？」

「大丈夫、強いみたいだけど、敵じゃないよ」

ドラゴンナイトは仮面の中で笑いながらデイスパイダーRに近づいていく。

デイスパイダーRは口から針を射出するがそれをドラゴンナイトはドラグセイバーや拳で叩き落して地面を蹴り、デイスパイダーRに飛び乗ってそのまま顔を殴り、胸部へ連続パンチを叩き込む。

ウイングナイトのパンチよりも強力な攻撃を受けてデイスパイダーRは苦しそうな声をあげてドラゴンナイトを引き摺り下ろそうとするが、ソレよりも早くドラゴンナイトはデイスパイダーRの腹を踏み台にして一気に距離を置いた。

「これで決める！」

『FINAL EVENT』

アドベントカードを左腕に装備されている籠手型のバイザー・ドラグバイザーにベントインをして両手を前に突き出す。すると、ドラゴンナイトの周りに赤い龍が現れて周りを飛ぶ。

「はあああああああああああああ！」

ドラゴンナイトは両足で地面を蹴って空高く舞い上がる、赤い龍がドラゴンナイトへ火球を放ち、ドラゴンナイトの速度があがり、デイスパイダーRへ迫っていく。

デイスパイダーRが逃げるよりも早く、ドラゴンナイトの必殺技・ドラゴンライダーキックを受けて、デイスパイダーRは爆発、四散した。

「・・・お疲れ」

「うん・・・“二回目”だけど、なんとか戦えたよ」

ドラゴンナイトが振り返ると糸を切断したウイングナイトがゆっくりとやってくる。

二人は他愛のない会話をしつつ、同時に憂と梓の方を見た。

「えっと・・・二人とも大丈夫？」

ドラゴンナイトが震えている二人に尋ねる。  
怖くて喋れない憂に代わって梓が口を開く。

「あ・・・だ、大丈夫です」

「そう・・・悪いんだけど、場所を変えてもいいかな？ここが安全とは少し言いにくいから」

「あ・・・はい」

「じゃあ、こっちに来てくれ」



### EPISODE 3 (後書き)

今回、初めてこの作品を読んでいる人がいるかもしれないので、一応、注意点を。

新訳とありますが、前作の二人の騎士とは始まりも話の流れもそれなりに変化しているので前作とは違った楽しみがこの新訳で起こりえるはずです。

前作は修正もせず、完結した状態で残しているので気になる人はチェックしてみてください。

## EPISODE 4 (前書き)

今回、前作と違うキャラが登場？

## EPISODE 4

「あの……どこへいくんですか？」

「ん……一応、安全な所」

そういう赤い騎士の言葉に梓は不安になっていた。

あのショッピングモールの近くから既に20分くらいは経過しているだろう、どこへいつているのか聞いても安全な所と答えるだけで一向に教えてくれない。

さらに、

「ねえ、梓ちゃん……あの人達……あれがいつもの姿じゃないよね？」

「そうだと思うけど……なんなんだろ」

ショッピングモールからそれなりに距離を置いて、二人はAmigoと書かれたプレートの店の前にたどり着く。

「さあ、中に入って」

赤い騎士にいわれて二人はおずおずと中に入る。

中は喫茶店のようだけれど、人がいる気配はしない。

「誰も……いない」

「そのままそこ入って」

カウンターを通過して従業員の休憩スペースのような場所に入った二人に黒い騎士が指差したのは大きな鏡。

「えっ……鏡って」

「大丈夫大丈夫、鏡ゲートさえあれば、ここからすぐおさらばできるから」

「というわけで」

「「いつてらっしやいませ〜」」

二人の騎士がそういつて梓と憂を突き飛ばす。

グラツと体が動いてそのまま二人は鏡にぶつかることなく真っ直ぐに歩いていく。

「え……」

「あ……あれ？」

梓と憂は狐に頬を詰まれたような表情をして目の前の光景を見る。

二人がいたのは無人だった喫茶店だったはずなのに、店の中には人の話し声が聞こえていた。

二人が驚いているとさらに後ろから二人の少年が出てくる。

一人は茶色い髪形で、中性的な顔立ち、もう一人は真っ黒な髪の毛にところどころ白髪が混じった少年で、どこか優しそうな雰囲気を持っている。

「えっ、誰……」

「あ……そつか、変身解除したんだっけ？」

「まあ、こっちですつとあの姿にしているわけにはいかないからな、とにかく二人ともコツチへきてくれ」

「あ……はい」

憂は頷いて二人の後に続く。

「まず、自己紹介から、僕の名前は吉井明久、学生兼仮面ライダーだよ」

「俺の名前は春風蓮司……まあ、仮面ライダーだ」

「中野梓です」

「平沢憂です。あの仮面ライダーって？」

憂が蓮司の呟いた言葉に尋ね返す。

梓は“仮面ライダー”という単語に聞き覚えがあるのだが、どこで聞いたのか思い出せない。

「まあ、そこから話さないといけないよな……」

「蓮司……そんなめんどくさがらなくても」

梓はむつとした表情をして蓮司を睨む。

「あの！いい加減説明してほしいんですけど！」

「あ、梓ちゃん・落ち着いて」

だん！と机を叩いて梓が叫ぶ。

そんな彼らに一人の男がやってくる。

「少し騒がしいね」

「あ……すいません」

やってきた老人に梓はぺこりと謝って席に座る。

老人は笑いながら二人にコーヒーを置く。

そして、蓮司と明久の頭の上に拳を叩き込む。

ゴンという鈍い音と共に二人は頭を抑えこんだ。

「お、おやっさん……い、痛いよ！」

「当然だ……いつもいつておるだろうが！人を巻き込むなど！だいたいお前らときたら！」

「……明久、おやっさんがうるさいから状況を説明して彼女を返そう」

そういった直後、蓮司の頭の上に、もう一個ゲンコツが落ちた。

蓮司は頭を抱えて地面をのた打ち回る。

「言っている傍から！お前は本当に女心というのがわからんやつだな！」

「おやっさん……蓮司は女心がわからないわけじゃ」

「あの・・・すみません、話をしてもらえませんか？」

憂の言葉に老人と明久は苦笑した。老人は笑ってカウンターへ戻っていき、明久が口を開く。

「キミ達がさつきまでいたのはベンタラなんだ」

「べん・・・たら？」

「こことは違うもう一つの、俺達のようにちゃんとした人が生活していた世界、名をベンタラというんだが、今は無人となっている」

復活した蓮司が椅子に戻って喋る。

「どうして・・・無人なんですか？」

「侵略者が現れたからだよ」

「そいつは自分の崩壊した星を復興させるための労力を必要とした、そして自分の星と同じくらいの数が住んでいる星、すなわち地球に目をつけた」

「侵略者に対抗するためにあっちの世界の人達はライダーシステムを開発した。これがそのライダーシステムだよ」

明久はそういつてポケットの中から龍の顔のようなものが刻まれた四角いデッキを見せる。

憂と梓は興味深げにアドベントデッキを見る。

「あんなすごい力があるのにどうしてベンタラ・・・でしたっけ？  
無人になってしまったんですか？」

「・・・負けたからだ、侵略者に」

蓮司が重々しげに呟く。

何か聞いてはいけない事を聞いてしまったのではないかと思ひ込んで二人は追求す売ることをやめた。

「僕らも詳しくは知らないけれど、負けた人達全てが敵に捕まっただけ、それでも数が足りなくて侵略者はこっちに目をつけたんだ」

「俺と明久は偶然、その事実を知ってこのアドベントデッキを使って戦っているんだ、そしてキミ達はベンタラに行ったためにあつちの世界が見えるようになってしまった。これが現在の世界の状況・・・」

その後、蓮司と明久が家に送ろうと提案したが帰れるからということとで二人は帰っていった。「まあ、そうそう巻き込まれる事はないだろうが、何かあったら連絡してくれ」と明久と蓮司、そしてこの店の番号が書かれているメモを渡した。

「ねえ、蓮司、なにを焦っているの？」

店の入口にCLOSEというプレートに裏返して入ってきた蓮司に

明久は尋ねる。

今日の彼はいつもと様子が違う。  
付き合いはそこまで長いわけじゃないが明久は春風蓮司の存在というものをよくわかつている。

「・・・わからない」

「え？」

蓮司は眉間に皺を寄せてポケットの中にいれていたアドベントデッキを取り出して小さく呟く。

「よくわからないけれど、何かが起こるかもしれないという不安がずっと続いているんだ、あの倒したはずのモンスターが蘇っていた事や、色々と“聞いていた”事と違うことが起きているから胸騒ぎがしているんだよ」

「そうなんだ・・・」

明久はそれで納得した。

「全く、仮面ライダーがそんな事でどうする」

「おやっさん・・・」

「ほらよ」

「あ、どうも」

「すみません」

この店のオーナー、立花藤兵衛が明久と蓮司にコーヒーの入った力  
ツプを渡す。

「仮面ライダーはどんな絶望的なことが起こっても最後まで諦める  
なんて事はせず、人の自由と平和のために戦ったもんだ、そんな“  
名前”を引き継いでいるお前達がそんなことで不安になってどうす  
る！」

「おやっさんの言つとおりだよ？蓮司」

「……ああそつだな、くそつ、昔からの悪い癖だな」

蓮司はバシンと両頬を叩いた。

その表情は先ほどまでの暗い表情とは違い、ゆるぎない信念を秘め  
た表情。

蓮司の顔を見て立花藤兵衛と明久は笑う。

ある路地裏。

『はあ……はあ……はあ』

誰もいない路地裏でウィングナイトやドラゴンナイトと同じ仮面ライダーがいた。

その仮面ライダーは荒い息を吐いて目の前の敵を殴る。

何度も何度も何度も何度も。

まるで止まる事のない暴走をしているかのように殴り続け、敵が粒子化を始めるまで仮面ライダーは殴り続けた。

そして、敵がいなくなり仮面ライダーは空を見上げて大声で叫ぶ。

内に溜め込んでいる狂気を少しでも鬱憤させるために。

EPISODE 4 (後書き)

次の話、すぐに見たいですか？

## EPISODE 5

誰もいない世界“ベントラ”

そこのある場所に二人の姿があった。

一人は蝙蝠を模したような騎士・ウイングナイト、もう一人はドラゴンの力を持つ騎士・ドラゴンナイト。

ウイングナイトはブラックバイザーを構えて、ドラゴンナイトはドラグセイバーを構えて体制を低くしている。

「つりゃ！」

最初に動いたのはドラゴンナイトだった。

ドラグセイバーを持ってウイングナイトへ切りかかる。

だが、ウイングナイトは振り下ろされる斬撃を右へ左へと華麗に避けていく。

「そこ！」

そして、ドラゴンナイトの動きが少し鈍くなったところをブラックバイザーで連続で切り込んでいく。

攻撃を受けてドラゴンナイトはドラグセイバーを手放してしまう。

宙を舞うドラグセイバーに目がいつてしまった瞬間をウイングナイ

トが逃すはずがなく。

「……僕の負けだね」

「ああ」

ドラゴンナイトの喉元にブラックバイザーの剣先が突きつけられていた。

「そういえばさ、蓮司、今日って学園祭の話し合いだったよね？」

「ああ……まあ、俺には関係ないが」

「そんなこといわないですよ。クラスの一員なんだからさ」

「……そうだな」

明久に言われて蓮司はどこかめんどくさそうに文月学園へ歩いていこうとするがぴたりと立ち止まる。

「どうしたの蓮司？」

「……」

「蓮司？」

「ああ、なんでもない……何かが見ているような気がする」

「ふうん、人気者だから大変だね」

「そうかもな」

蓮司は苦笑して文月学園へ歩いていく。

「……暇だな」

みかん箱にもたれて蓮司はぼんやりと青い空を見上げる。

ボロボロのガラスから見える景色からは明久達がクラスメイト達と野球をしていた。

蓮司も参加しないかと誘われたのだが、体が少しだるかったので遠慮させてもらった。

「（実際は、あの蜘蛛モンスターとの戦いで受けた傷が痛いってのが理由なんだが、これを知ったら明久のヤツ心配するからな、これだけは避けないと）」

「さつさと、教室に入れ！」

「い、痛い！」

「おい、もう少し優しくできないのかよ!？」

『くそつ、鉄人め』

『あんなのにしごかれるより高橋先生の方がいいぜ』

『同感だ』

さて、昼寝でもしようかなーと蓮司が畳の上に寝転がるうとした時、ドアが開いて明久と坂本がぼんぼんと投げ入れられた。そして、ぞろぞろとFクラスの男子が入ってくる。

二人が畳の上に落下した拍子にぼぶん、と大量の埃がまっ。無言で蓮司は窓を開ける。

「いいか、次に戻ってきた時にちゃんと話し合っていないかったら貴様ら補習だからな！」

そういつて鉄人は教室から出て行く。

さて、と坂本が立ち上がって学園祭について喋りだす。

坂本はFクラスの代表なので、こういう指揮をとらないといけないのだが、どういいうわけか当人はまるでやる気が無い。

実行委員を指名するのめんどくさいという表情をしている。

「そうだな・・・明久と・・・明久、お前がやれ」

「雄二、僕の名前しかないよ?」

「すまん、間違えた。島田、このバカのフォローを頼む」

「バカって、もしかなくて僕の事だよね!?」

「わかったわ」

「あれ、島田さんは普通に受け入れているなんで!?」

「んじゃ、後はこいつらに聞いてくれ・・・ふぁー」

そういつて坂本は寝てしまう。

蓮司も会話に参加するのがめんどくさくなってそのままみかん箱の上に倒れこむようにして寝てしまおうとしたのだが。

「春風、いるか!」

ドアを開けて西村先生が入ってくる。

全員がびしっ、と身構えた。そして西村先生は、つい、黒板に書かれている文字を見てしまう。

『中華喫茶・ヨーロッパアン』

『ウェディングドレス 人生の墓場』

『写真撮影・いけない部屋』

『音楽鑑賞・春風蓮司の演奏会』

「……………補習を増やした方がいいのかもしれんな」

「ま、待ってください！これは吉井が悪いだけで！」

「そうですね！ス・ベ・テの元凶は吉井なのですよ！」

「やかましい！」

西村は大声で叫び、明久は西村へ喜びの視線を向けるが。

「吉井にやらせたことに問題があったのだ！」

教師じゃなかったら容赦なく明久は殴り飛ばしていただろうな。と蓮司は起き上がって西村に尋ねる。

「それで先生、用事ってなんですか？」

「うむ、すまんがこれを届けてきて欲しいのだ」

そういつて茶色い封筒を蓮司に見せる。

西村先生は封筒を蓮司に渡しながらかとんでもない事を述べた。

「桜ヶ丘女子高等学校へこれを届けてくれ」

「総員、狙え！」

『イエス！ハイエロファント！』

三角頭巾の覆面姿となり、蓮司を襲おうとしていたFFF団もとい  
異端審問会が鉄人によって一瞬で殲滅させられる。

それ以外の面子（明久etc）はまたかという表情をしてやりとり  
を見ていた。

「なにやってんだか・・・」

蓮司は西村先生によって鎮圧させられた異端審問会を見て感想を漏  
らす。異端審問会の面子は全員が燃え尽きたような真っ白い姿で地  
面に突っ伏している。中には外に落ちていったヤツもいたが、まあ  
新ではないだろう。

西村先生は息一つ乱すことなく茶色い封筒を渡す。

「ところで、どうしてこれを俺が？他の先生がいけるのでは？」

「実はな、この後、緊急の職員会議があつて、誰も抜け出す事がで  
きなくてな。お前、バイクの免許取得しているだろう？」

「ええ・・・まあ」

「教員のバイクを貸すのでそれで届けてくれないか？代理で来たと伝えてくれれば構わん」

「……あ、バイクはそのまま学校に？」

「明日返してくれば問題ない……だが、壊すなよ」

「そんな真似しませんよ。わかりました、バイクお借りしますよ」

蓮司はみかん箱の近くにあるカバンを引っつかんで教室を出て行く。

「断ればよかった……」

桜ヶ丘女子高等学校の校門を前にして蓮司は後悔をしていた。既に放課後で帰宅をしている生徒達がちらほらと見えていて、蓮司が視線を向けるとその生徒達は顔を赤くして逃げていく。

「にしても……本当に女子校なんだな」

蓮司はさっさと終わらせようと思って受付へ足を運ぶ。

「すみません」

平沢唯は鼻歌を歌いながら職員室へ向かっていた。  
提出し忘れていた宿題を担任の先生に渡して、やる事を終えた彼女は教室に向かって歩いていこうとして、きよろきよろと周りを見ている男子生徒に気づく。

「んー、もしかして？」

珍しく、唯の頭は的確な答えを見つけてその男子生徒へと近づいていった。

「ねえねえ、どうしたの？」

「え、ああ、これを届けたいんだけど、職員室がどこにあるのかわからなくて」

「そうなんだー、じゃあ、案内してあげるよ」

「え、いいの？そっちの都合とか」

「いいの、いいのーほら、こっちだよ」

あ、そうだ、と唯はくるりを向きを変えて男子生徒に微笑む。

「私の名前は平沢唯、二年生だよ」

「俺は春風蓮司、文月学園の二年生だ」

「あ、同い年なんだ、へえ、あ、ここだよ」

「ああ、ありがとう」

蓮司は感謝して職員室の中に入り込む。

明久は女子更衣室の中にいた。

それだけを聞いたら彼が変態だと思うだろう。だが、これにはちゃんとした理由がある。

「やあ、奇遇だね、雄二」

神童と呼ばれた坂本雄二の協力を得るために。

クラスメイトの島田美波から姫路瑞希が転校するかもしれないという話を聞いてしまったのだ。

その理由が学習環境だ。

くだいようだが、FクラスはAクラスとの試召戦争に負けてしまい施設がワンランク下がっている。

元々授業に適した環境でない場所がさらに悪化するということはよ  
り勉強ができなくなるという事。さらに元々体調がよろしくない姫  
路さんがさらに悪化した所にいると体が悪くなると考えた彼女の父  
親が転校したほうがいいのではと言い出したらしい。

折角、仲良くなり始めているのに転校だなんて、と思った明久はそ  
れを阻止するために親友不在のためその次に頼りになるこいつに話  
をするべくやってきた。

どうしてこいつが女子更衣室にいるのかは理解できないが。

「……明久、何のようだ？」

「実は雄二、相談したい事があるんだ」

明久が協力してくれといおうとした所でドアが開いて一人の女子生  
徒が入ってくる。

「あら、吉井君、坂本君」

「あ、木下さん、こんにちは」

「あなた達、なにしているの？」

「うん、ちょっと雄二に用事があったね」

「ふーん、そうなの」

木下秀吉の双子の姉である木下優子は室内にいる明久と雄二を一瞥

して、後ろへ一歩下がり、ドアを少し開けてから。

「西村先生！ここに覗きをしようとしている犯人がいます！」

「逃げるぞ明久！」

「了解！」

西村先生、もとい鉄人へチクった。

二人はそのまま更衣室の窓を開けて外に飛び出して逃げる。  
鉄人へ捕まって生徒指導室へ連行されないために。

「すまない、平沢助かった」

「うっん、困った時はお互い様だよ」

その頃、蓮司は平沢唯のおかげで無事目的を達成する事ができた。  
後は家へ帰るだけとなったのだが、唯がふと振り返って尋ねる。

「ねえ、この後暇かな？」

「おいおい、逆ナンですか？」

「え？」

なんのこと？と聞いて首をかしげる唯、どつやら理解できていない  
ようだ。

純粹な子なんだなと蓮司は納得する。

「まあ、暇だけど、それが？」

「だったらさ、私達の部活見学していかない？」

「部活？」

「うん、私ね、軽音部に所属しているんだー」

「へえ、軽音ね」

そういえば、あいつも軽音をやるのかいっていたような？

ある人物を思い出して懐かしむ蓮司はまあ、少しくらいならいいだろうと考えてついていくことにした。

「それじゃあ、お言葉に甘えて」

蓮司は微笑んで唯の後を着いていく。

「まったく、お前のせいで酷い目にあつたじゃねえか、明久」

「いや、確かに僕が悪かつたけどさ、女子更衣室に隠れる雄二もど

うかと思うよ?」

「しょうがねえだろ、男子トイレに隠れていてもあいつは普通に入ってくるんだぞ!？」

「霧島さんつて、雄二のためとなるとためらいがないものね・・・」

「冗談じゃねえ・・・それより、姫路の転校を阻止したいんだっただな?」

坂本は悪態をつきながら明久に尋ねる。

「うん、折角仲良くなったのに別れるなんて嫌じゃないか」

「まあ、そうだな、けどな、それなら学園長に訴えればいいじゃないか」

「どゆこと?」

「いいか、いくら文月学園が成績で全てを決めているとはいえ、体調に問題があるとなったら教育者として何かしないとイケねえんだよ」

「それじゃあ、学園長に会いに行けばいいんだ?」

「そういうこと・・・さて、俺はかえ」

『・・・雄二、どい?』

「ろうと思ったが明久、お前が心配だから付き合う事にしよう!」

自分の命が大切な坂本雄二、どうしてもあそこまで嫌うのだろうか？  
と明久は首をかしげる。

二人は足早に学園長室へ向かう。

「ここが、私達の部室だよ」

「へえ、音楽準備室でやっているのか」

蓮司は唯に連れられて軽音部部室の前に来ていた。

「あ、みんなに知らせてくるから入口で待っていてくれるかな？」

「ああ、いいぞ」

唯が中に入ったので明久にメールでも送っておこうと思い黒い携帯  
電話を開けると既にメールが届いている。

「おやっさんから……」

内容に目を通した蓮司は嫌そうな表情をした。  
そんな彼の後ろでドアが開いて平沢が顔を出す。

「はいつていいよ」

「あ、わかった」

蓮司は携帯電話をポケットの中に入れてドアの中に入る。

そこには興味津々という表情でこちらを見ている二人の少女と顔をしかめた少女達を見ながら蓮司は一人の少女を見て立ち止まった。

蓮司は無言で目の前にいる相手を見ている。

相手も蓮司を真っ直ぐに見て動かない。

腰にまで届きそうな黒い綺麗な髪、ブレザーにスカート、一言で済まずととても可愛い女の子

蓮司の目の前にいる少女は嬉しそうな悲しそうな表情をしている。

「……久しぶりだな……漣」

「ああ……蓮司」

## EPISODE 5 (後書き)

ストックは現在、学園祭編が終了していようとしています！

ところでみなさんはウルトラシリーズの中で、どの防衛チームが好きですか？

自分は科学特捜隊 GUTS MYDO 他多数ですね。

EPISODE 6 (前書き)

学園祭、スタート！

EPISODE 6

「な、なんであなたがここにいるんですか!？」

「あ?」

蓮司は自分を見て立ち上がった少女を見て、机に座っている子が先日助けた女の子だという事に気づく。  
出会いが悪かったからか、蓮司の事を少し嫌っているようだ。

「あれ、レン君って、漣ちゃんやあずにゃんと知り合いだったんだ?」

「え、漣、あいつ知り合いか?」

「おい、秋山は覚えているのにお前は俺のこと忘れたのか? 田井中」

「え、私の事も知ってる!? まさか一目惚れしたストーカーか!？」

「んなわけあるか・・・俺だ。蓮司、春風蓮司!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ええ!?! お前、あの春風かあ!?!」

カチューシャをして額が見えるようになってる少女、田井中律は蓮司を見て驚きの声を漏らす。

「あれ、りつちゃん、知り合いなの？」

「ていうか、律先輩、この人と知り合いなんですか？」

「この人って、それより梓はコイツとどこで知り合っただ？」

「ええ・・・その」

「不良に絡まれていたのを偶然助けたんだよ・・・な？」

「・・・そうです」

「へえ、変な出会いもあるんだなあ」

変な出会いってなんだよ？と蓮司は口から出そうになる言葉を飲み込む。

もし、ここで余計な事をいえば、絶対に律はうるさくになると思った。事実、今も律は蓮司がどんな人物だったかと喋りだしている。当人の前で。

「あの、紅茶いかがですか？」

「あ、ありがとう・・・えつと？」

立っている自分に紅茶の入ったカップを勧める少女に蓮司は尋ねる。

「琴吹細っつていいいます。はじめまして」

「さっきも名乗ったけど、春風蓮司だ。よろしく」

「ムギちゃんはね、お嬢様なんだよ、レン君」

「へえ……って、レン君？」

「うん、蓮司だからレン君！……ダメかな？」

「いや、俺はいいけど？」

了承すると唯はにっこりと嬉しそうに微笑む。

その後ろで澪は複雑そうな表情をしている。

律が思い出したかのようにあ、と声を出す。

「そういえば、レンって、なんでここにいるんだ？」

「もう定着したのか……、それより今さらの質問だな……文月学園の用事を頼まれてここに届け物を持ってきただけ……ったく、学園祭の話しぬけてきたんだが」

「学園祭！？」

「うおっ……なんだよ？」

突然、大声を上げた唯に蓮司は驚く。

唯はニコニコと笑みを浮かべて律と喋りだす。

「りっちゃん、りっちゃん、学園祭だって、見に行こうよ」

「いきなりだな、おいレン、学園祭はいつやるんだ？」

蓮司は二人に日時を教えると、嬉しそうな表情をする。

文月学園の学園祭は2日間かけて行なわれるが、どうやらその2日間桜ヶ丘はお休みのようだ。

「なあなあ、レンのクラスはなにをやるんだ？」

「・・・悪い、少し待ってくれ」

蓮司はポケットから携帯電話を取り出してメールを確認する。

「ついさつき“学園祭について”という内容のメールが来ていた気がするのだ。」

メールは明久からで一言『Fクラスは中華喫茶をやるよ』ということらしい。

「中華喫茶だつてよ」

「へえ、餃子とか食べられるかな？」

「平沢・・・喫茶店に普通餃子はない」

「あれね？」

「しっかりしてくれよ・・・」

「ぶー、そういつりっちゃんは何があるかわかるの〜？」

「当然！ラーメンとかチャーハンとか！」

「「そんなもの置いてあるわけないだろー!!」「」

胸を張って偉そうに言う律に蓮司と澪が叫ぶ。

「……………答える」

路地裏に倒れている男を無理やり立たせて尋ねる。

男は目の前にいる存在に震えながら喋ろうとするが酸欠を起こした金魚みたいに口をぱくぱく動かしているだけだ。

「……………いつに見覚えはないか？」

喋らない事に苛立ちを覚えたのか右手に持っている写真を見せる。

写真を見せられて男は目を見開いて目の前の存在から逃げようとするがしっかりと首をつかまれていて逃げる事ができない。

「答える……………」

ギリギリと強く締められて男の口端から泡が出てくる。

「……………ちっ」

気配に気づいて男の首から手を離す。

男はそのまま座り込む。

「いっておくが、逃げてても無駄だぞ？……………どこまでも追いかけてやるからな」

釘を刺しておいて存在は近くの割れた鏡の中へ吸い込まれるように消える。

男は恐怖の余り意識を手放した。

「ねえ、蓮司」

「なんだ？明久」

「どうしてFクラスの教室で喫茶店をやらないの？」

場所は音楽室、そこでFクラスの面々が蓮司の用意した机を並べている。

指揮を坂本雄二がとっているのを眺めながら。

「Fクラスは土台が腐っているからな、あそこでやっているのをおやっさんが知ったら確実に雷が落ちるぞ？」

「何気に酷い事いつてるよね。まあ、そうかもね。おやっさんはいつも店を綺麗にしているし」

二人は脳裏でパイプをふかしながら店を掃除している恩師のことを思い出して苦笑する。

「それに、坂本も本気だからな、徹底的にやるなら・・・とことんな」

「なるほど・・・雄二もバカだけど、こういう時は頼りになるね」

「・・・まあ、そうだな」

ふと、蓮司はあることを思い出す。

「そういえば、明久試召大会に出るらしいな？」

「あ・・・うん、成り行きでね」

「そうか、頑張れよ」

「うん、ありがとう・・・蓮司はでないの？」

「優勝商品に興味がないからな、それに文月学園を案内してくれと頼まれたからそっちにいかないといけない」

「ああ・・・中野さんの所属している部活の友達がくるんだっけ？」

「・・・ああ」

返事に少し間を置いていった。

それには少し理由があったのだが明久は気づかなかった。

「おい、明久行くぞ」

「あ、うん、それじゃあ蓮司後で」

「ああ、頑張れよ」

「大丈夫かの？明久と雄二は？」

二人を見送っているとウェイター姿の秀吉が不安げな言葉を漏らす。蓮司はちらりと一瞥して大丈夫という。

「明久は召喚獣の扱いが上手い、坂本は最近勉強をやり直しているみたいだからAクラスとかに当たらない限りは大丈夫だろう」

「そういうことではないのじゃ、わしが心配なのはあの二人がコンビネーションというものを上手く出来るかということじゃ」

「……それは無理だな」

蓮司の言葉に秀吉は不安の表情をより強くなってしまった。

「……春風、非常事態」

「……あ？」

厨房で料理の手伝いをしていた蓮司はいきなりムツツリー二の言った言葉に呆然と返してしまふ。

「非常事態って、爆弾でも見つかったわけじゃないだろ？」

「……クレーマーが現れた」

「クレーマー対処法ならこれを使え」

蓮司は傍においてあった『Fクラス喫茶店における問題においての対処法ベスト100（製作者春風蓮司・坂本雄二）』を渡す。

「……使おうにも雄二がない」

「そろそろ試合が終了している頃だろう、探して来い」

「……了解」

そういつて土屋は瞬時に姿を消した。

「忍者か何かの類か、あいつは？」

「おい、近藤！もう少しお湯の温度をあげてから入れろ！葉が開かずお茶が不味くなるだろうがあああああ！」

「とりあえず、そこで近藤を血祭りにしようとしている須川を誰か止めろ」

蓮司はめんどくさそうに頭を抱えそうになると坂本雄二がクレマーに関節技に始まり窓へ投げ捨てるという対処法が実施されるとほぼ同時だった。

「というわけで、須川 厨房をお前に任せるがくれぐれもお茶のことで喧嘩は起こすなよ？もし問題を起こした場合、この本の角で即座にお前の脳天を叩き割るからな」

「サーイエッサー！」

ビシッと敬礼をして須川に厨房を任せて蓮司は外に出る。

明久は試召大会以外は店の方に専念するらしいので蓮司は一人で澪達のお迎えに向かう事となった。

「……………はあ」

「すっげえ盛り上がりようだなあー」

「……………ああ」

秋山澪と田井中律は文月学園の校門を見て感想を漏らす。

律は楽しげな表情をしているが、それに対して澪はどこかつらそうな表情をしている。

「まだ、あのときのこと気にしているのか？」

「別にそういうわけじゃない！……………ただ」

「ただ？」

「その」

「すまない、遅れた」

何かを言おうとした澪の前に蓮司が現れたため、二人の間に気まずい雰囲気が一瞬流れるが蓮司はそれに気づくことなく喋る。

「すまない、色々とクラスのほうの用事が立て込んでいてな。とりあえず、何から見て回る?」

「春風って、タイミング悪いな」

「・・・よく言われるが何かあったか?」

「いや、さて・・・では何から案内してくれるんだ?」

「まずはウチのクラスから・・・って、ところで他のヤツらはどうしたんだ?」

「ああ・・・唯は補習、宿題持ってくるのを忘れたんだ、ムギは家の用事で欠席、梓は友達の約束があるから今日は無理だって、明日から来るんだって」

「ふうん、まあ大勢は大変だから嬉しいけど」

「本当に春風って昔から一人で行動するのが好きだよな?」

「まあな、色々と気を配る必要ねえし、ところで秋山さつきから無言だけどどこか体調でも」

「なーなー、キミ可愛いよね?」

「どうせだからさ、これから一緒に回らないかい?」

振り返ると澪は坊主頭とモヒカン頭の二人に絡まれていた。澪は何か言葉を発しようとしているが顔が青ざめている。

秋山澪は男子が苦手だ。特にあの事があってから男性恐怖症が一気に悪化してしまっていた。

「ちっ」

蓮司は舌打ちをして澪の方へ駆け寄っていく。

服装から察するに絡んでいるやつらは三年生だろう。

「すみません、先輩方、そいつは俺の連れなんですよ」

「あ？なんだてめえは」

「見たところ後輩だよな？だったら先輩に譲れよ、いい女みたいだしてめえには勿体ねえよ」

「……」

無言になった蓮司に澪は悲しげな表情を浮かべる。

三年の先輩達は肯定と受け取ったのかそのまま澪を連れて行くこととするが。

「あ、船越先生、丁度いいところに召喚の許可が欲しいのですが」

「召喚の許可？今は学園祭の最中です、許可できるわけが」

「明久に頼んでよい男紹介しますよ？（ボソボソッ）」

ぴくりと、船越先生の表情が歪む。

この先生、婚期を逃していかかなり焦っていて点数をちらつかせては生徒と関係を持つとうとするくらいにまで躍起になっているのだ。

明久もその毒牙にかかりそうになり、逃げるための手段に知り合いの男性を売ったのだ。

「この前の男失敗したらしいですが良い男でしたよね？もし、ここで特別に許可してくれるなら明久に頼みますよ？」

「し、しかし……」

「それには一般人の人が大勢いるし、召喚獣がどれほどすごいのかという宣伝にもなりますから、学校としても+になると思いますよ？」

「そうですね、特別に試召戦争を許可しましょう」

ブウウンと召喚フィールドが形成される。

「それでは、先輩始めましょうか、試獣<sup>サモン</sup>召喚！」

「へっ、先輩にたてついた事後悔させてやる！」

「まあ、弱いものイジメは好き……ってなにいいいいいいいいいい！？」

モヒカン頭の先輩が表示された点数を見て驚きの表情を浮かべる。

『Fクラス 春風蓮司 数学595点

V S

Aクラス 夏川勇作 数学330点

Aクラス 常村俊平 数学270点』

明らかにFクラスに所属している人間ではとる事が出来ない点数が表示されていた。  
そして、蓮司の前に立っている召喚獣もそれなりの装備を有していた。

「な、なんなんだその点数！？てめえ、本当にFクラスなのか？」

「ええ、Fクラスです、振り分け試験をさぼったからFクラスになったというのが理由ですけど」

蓮司の召喚獣が腰の刀を引き抜いて一瞬で二人の召喚獣の武器を破壊してしまふ。

「なっ……」

「一撃だと!？」

二人が驚きの声をあげている間に、蓮司にの召喚獣は背中に背負っている大型ランチャーを撃つ体制に入っている。

「お二方、覚悟してくださいね！」

叫ぶと同時に緑色のエネルギー弾が片方の召喚獣を飲み込んだ。

「なっ！」

『夏川勇作 0点』

「おいおい、なんだそりゃ!？」

「次！」

蓮司の召喚獣が逃げの体制に入った先輩の召喚獣を叩き伏せた。

「戦死者は補習！！」

どこからか西村先生が現れて二人を肩に担いでそのまま走り去っていく。

「あゝ、春風、今のなんだ？」

「文月学園の試召戦争において点数が0になったヤツは補習室に連行される事となっていて、最終的に尊敬する人は二宮金次郎、好きな本は六法になってしまふという素晴らしいのか悪いのかよくわからん性格矯正される」

「それって、犯罪なんじゃ？」

「大丈夫だ、当人が進んでそうなるだけだし」

「・・・大丈夫っていわねえよな・・・」

「ところで秋山は大丈夫か？」

「・・・・・・・・・・」

「秋山？」

蓮司は呆然と立ち尽くしている秋山へ尋ねる。

澪は頬を赤くしてぼーっとした表情をして蓮司を見ていた。

「おーい、澪どっした？」

「え……あ、な、なんでもない!？」

「おっと……」

いきなりあたふたしだした澪はバランスを崩して後ろに倒れそうになったので蓮司が抱きかかえるようにして受け止める。

「大丈夫か？」

「あ……あぁ」

「そっだな、Fクラスにでも行くか、ここからすぐ近いからな」

三人はFクラスの主催している喫茶店『ヨーロッパ』へ向かう。

## EPISODE 6 (後書き)

前作を読んでいる人に質問します。

明久のカップリング・・・どうしましょう？

**EPISODE 7 (前書き)**

ちなみに連続投稿です

E P I S O D E 7

「それにしてもよかったな（ボソッ）」

「え？」

Fクラスへ向かって歩いていく時に律がボソッと漣に言う。

漣は驚いた表情をして律を見た。

「あんな事があったから漣に遠慮するかと思ったたら普通に接しているし、気にしていないみたいだな、あのことのこと」

「……そう……だな」

漣はどこかつらそんな表情をして先を歩く蓮司の背中を見た。

「うわぁ……結構本格的にやってんだなぁ」

「本格的な味か……どんなものだろう？」

中華喫茶ヨーロッパピアノにたどり着いた律は店の出来具合に驚きの声をあげる。

漣も同じことを思っていたようで結構びっくりしていた。

「とにかく中に……」

『お、可愛い子だなあ』

『残念、後数年経っていれば好みだったのに』

『俺は今が好みだなあ・・・ねえ、俺とお話しない？』

変態たちが小さな女の子を囲んで盛り上がっていた。

蓮司は目の前で起こっていることを理解するのに時間がかかり、ようやく脳が再起動をした時には小さな子が明久に抱きついているという場面になっていたので、蓮司は近くにいた秀吉に尋ねる。

「おい、これはどういう状況だ？」

「おお、実はそこにいる子が明久の知り合いのようなのじゃ」

「当人は記憶にないみたいだけど？」

「あれ、葉月？」

島田美波がやってきて明久に抱きついている子どもを見て驚きの表情をしていた。

「あ、お姉ちゃん！」

「島田の妹みたいだな」

「そつらしいの」

「それにしても、何か客足が悪いな」

「うむ、何も不備はないはずなのだが・・・」

蓮司は辺りを見回すがどこにも不備らしきものは見当たらない。

「そついえば葉月、ここに来る途中でいろいろな話を聞いたよ」

「ん？どんな話だ？」

坂本が葉月と視線を合わせて尋ねる。

葉月がいうには中華喫茶は汚いから行かない方がいいということだった。

「ふむ……。例の連中の妨害が続いているのかもな、探し出してシバき倒すか」

「例の連中の妨害つて、あの常夏コンビ？そこまで暇じゃないでしょ？なにより、あの坊主先輩は窓から投げ捨てられたんだからさ」

「どうだかな、ひとまず様子を見に行った方が」

「坂本の言うとおりでな、噂がどこから流れてどこまで広がっているか確認しないと客を確保する事も難しくなる」

「お兄ちゃん、葉月と一緒に遊びにいこっ！」

「ごめんね、葉月ちゃん。お兄ちゃんはどうしても喫茶店を成功させないといけないから、あんまり一緒に」

「今から外にいくんだから一緒に回ったらどうだ？怪しまれる心配も少しは減るからな」

「春風の言うとおりでな。どうせ他の飲食店やっているクラスの偵

察もやるんだ。楽しめるだろ」

蓮司の言葉に雄二は同意する。

「ん〜、それじゃ一緒にお昼ご飯でも食べに行く？」

「うんっ！」

天使のような微笑を浮かべて明久と手を握る葉月。

こういう子を純真爛漫というのだろうと蓮司は考えていた。

「なあ、春風。私達邪魔かな？」

今までの会話の流れを聞いていた田井中律が尋ねてくる。

店のために動こうとしているから自分たちはいないほうがいいのでは？と考えていた。

「いや、二人とも一緒に来てくれ、回る約束はちゃんと守るよ」

「それでチビツ子さっきの話はどこで聞いたのか教えてくれないか？」

「えつとですね・・・短いスカートをはいた綺麗なお姉さんたちが一杯いる店で」

「なんだって！雄二すぐに向かおう！」

「そうだな明久！我がクラス成功のために（低いアングル）から綿密に調査しないと！」

葉月の言葉を最後まで聞かずに教室を飛び出した明久と雄二に。

「お兄ちゃんのバカ！」

「アキ、最低・・・」

「吉井君、酷いです」

後ろから二つの罵倒が追いかける。

「あれ、春風は追いかけないんだな」

「追いかける必要があるなら追いかけるが？」

「いや・・・いいよ」

律が追いかけるよ〜という中で漣が蓮司を見て嬉しそうな表情をしていたことに蓮司は気づかなかつた。

「あ、あの二人場所わかってるのかな？」

「すぐに戻ってくるだろう。そこまでバカじゃないはずだからな」

## EPISODE 7 (後書き)

カップリングについての意見ありがとうございます！

まさかの、という意見が多数もらえたので嬉しかったです。

ただ、意外と姫路・島田っていう意見が少ないですね・・・って、原作読んでいたらそう思ってしまうますかね？

EPISODE 8 (前書き)

まさかの……登場です。

EPISODE 8

「明久、春風、ここはやめよう!」

「ここまで来て何を言っているのさ! さあ、中に入るよ!」

「頼む! ここだけは・・・Aクラスだけは勘弁してくれ!」

「なあ、春風、あの人どうしたの?」

「気にするな、自分に素直になれないだけだ・・・にしても、ここか」

蓮司は目の前にあるAクラスが経営している喫茶店『ご主人様とお呼び!』と書かれている入口を見てぱつりと言葉を漏らす。

「何か言った?」

「別に、入ろうぜ」

明久が雄二を引きずっていたのを見て、蓮司も澁と律をつれて中に入っていく。

「・・・・・・・・!! (パシャパシャパシャパシャ!)」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ムツツリーニ・・・・・・・・って、蓮司堪えて! 雄二! 早くムツツリーニを追い出して!」

「しゃーねー……ほら、行くぞ」

明久は分厚い辞書で、一心不乱にカメラのシャッターを押しているムツツリーニを始末しようとする蓮司を後ろから羽交い絞めにしている間に、雄二はムツツリーニの足を掴んで教室の外に放り出した。それと入れ替わりに漣と律が中に入る。

「……おかえりなさいませ、お嬢様」

漣と律を出迎えたのは黒いロングヘアにメイド服を身に纏った霧島翔子。

クールビューティーという言葉が似合いそうな姿だ。

「わぁ……」

「綺麗だな……」

しかも、同姓が見惚れるほどに。

「それじゃ、僕も！」

「おかえりなさいませ、ご主人様お嬢様」

二人が続いて入った明久と葉月を霧島が出迎える。

そして、続いて舌打ちをした雄二とやれやれという表情をした蓮司が続く。

「……おかえりなさいませ、今夜は帰らせません、ダーリン」

「おかえりなさいませ、お風呂にしますか？ご飯にしますか？それともわ・た・し？」

「……なにやっているんだ？星」

蓮司は驚いた表情をして、突如現れたショートカットの少女に尋ねる。

「く、クラスのためです……じ、自分はあまりこういうことはやりたくなかったのです……」

「はいはい、席に案内してくれないか？メイドさん」

ポカポカと手に持っているトレーで殴ろうとしてくる少女に苦笑しながら蓮司は案内された席に座る。

「あ、須藤さん、こんにちは」

「あら、吉井君もいらしていたのですね。楽しんでくださいね？」

「……では、メニューをどうぞ」

霧島がみんなに可愛い字で書かれているメニューを渡す。  
数分して、

「私は『ふわふわシフォンケーキ』で！」

「私も」

「葉月も！」

「僕は『水』で付け合せに塩があると嬉しい」

「俺が金払ってやるから何か頼めよ」

「じゃあ、水を取り消してマンゴージュースで」

「俺は」

「……ご注文を繰り返します」

女子は仲良くシフォンケーキ、明久はマンゴージュース、そして蓮司と雄二の注文を遮るメイドさん。

「……『ふわふわシフォンケーキ』を三つ、『マンゴージュース』が一つ、そして」

「『メイドとの婚姻届』が四つでよろしいですね？」

「全然よろしくねえぞ!？」

「何やっているんだ……光」

霧島の横に青いツインテールの髪型をした女の子がにじしし、と笑いながら奥へと消える。

「……では、食器を用意します」

「ありがたく受け取るのだ」

そういつて三人の前にはフォークと皿、坂本と蓮司の前には婚姻届と朱肉がそれぞれおかれる。

「お、おい翔子！コレ本当にウチの実印だぞ！？どうやって手に入れたんだ！」

「よくこんな悪ふざけ星が認めたな、夜」

「祭りだ！無礼講だ！といって光と共に説得したのだ、では、メイドとの楽しい生活を想像して待っているがいいぞ」

「……では、メイドとの新婚生活を想像しながらお待ちください」

「明久……俺はどうしても召喚大会に優勝しないといけないんだ……」

「あ、うん、それは僕もそうだけど」

「今のやり取りと召喚大会に何の関係があるんだよ」

「なあなあ、春風、あの三人の子って知り合いなのか？」

律が興味津々と言う表情をして尋ねてくるので、蓮司はああと頷いて。

「俺の大切な家族だ」

「え……」

「み、漣、気をしっかり持て」

蓮司の言葉に漣はこの世の終わりみたいな表情をして横に倒れそうになり、律はよしよしと彼女の頭を撫でる。

明らかに勘違いをしていると気づいた蓮司は付け足す。

「何を勘違いしているかは知らないけれど、あの三人は妹みたいなもの」

だぞ、といおうとしたところで蓮司の頭の上にトレーがぶつかってゴォインと鈍い音を立てる。

「何をする・・・夜？」

「お前が勘違いをしているのが悪い、この塵芥が」

「須藤さん・・・あまり暴力は」

「なんだ塵芥の分際で我に意見をするのか？いっておくが星が認めたらからといって我が認めたわけではないという事を自覚しておけよ。吉井明久」

ギロリと明久を睨んでからもう一度蓮司へ視線を戻す須藤夜。

「もう、夜々仕事なんだから嫌でも営業スマイルしなよ」

「光、全て営業スマイルでやりとりしていると勘違いされますよ？」

続けて須藤光、須藤星がやってくる。

「あー、三人ともそろったから紹介しておく、左から須藤星、光、夜だ。三人とも挨拶な」

「その前に蓮司よ、一つ聞きたいのだが？」

「なんだ？」

「その黒髪の女はいつぞやお前に」

「「ストローップ！」」

何かを言おうとした夜を光と星が遮る。

なんなんだ？という表情を蓮司がしていると、遠くからうるさい声が聞こえてきた。

『それにしてもこの喫茶店は綺麗でいいな！』

『そうだな。さっきいた2 Fの中華喫茶は酷かったからな』

『テーブルは腐った箱だったし、虫も湧いていたからなあ』

「待て、明久」

「雄二、どうして止めるのさ！あの連中を早く止めないと！」

「落ち着け、こんなところであんな奴ら殴り飛ばしたら有りもしない悪評が実際に起こった悪評に変わってしまうし、厄介な事になる」

「でも・・・見ていることしかできないなんて・・・」

「それには心配ない、おーい翔子おー」

「……なに？」

「あの連中ここに来るの初めてか？」

「いいや、初めてではない」

霧島が答えるよりも前に夜が眉間に皺を寄せて答える。

「……さつき出て行ってまた入ってきた。話の内容もさつきと変わらない。同じような事ばかり」

「しかも、星の事を気に入っただのか何かと星が横を通ったときに注文ばかりしてくる、終いには星にちよっかいをかけようとしてきていた……光が止めなければ塵にしてやったものを……」

「ほお……」

「そうか……よし、メイド服を貸してくれ」

「……わかった」

坂本雄二の問題発言に霧島翔子は驚く事がなく、着ているメイド服を脱ぎ始めた。

「ぶっ!?!」

明久は口に含んだマンゴージュースを噴出す。

「ちよつとお！こんなところで脱いたらダメだって！」

「は、春風は見るなあ！」

「わあ、おねえさん、胸おつきいです！」

「……雄二が、欲しいっていったから」

「お、俺がいつお前の着ているメイド服を欲しいといった！？予備のヤツがあれば貸して欲しいという意味だ！」

「まあ、坂本の言い方が悪いな」

「しかし……あそこまで愛情表現できるとはやはり只者ではない。」

「翔子ちゃんみたいにストレートにするべきなのかな？」

「何かいったか？星に光？てか……秋山、そろそろ手をどけてくれないか？何も見えないんだけど」

「あ、ご、ごめん！」

漣は慌てて蓮司から距離を置く。それと入れ替わるようにして翔子がメイド服を持ってやってくる。

「……雄二、これ」

「すまないな」

「……貸し、一つ」

「だ、そうだ。明久」

「わかったよ、御礼に雄二を一日好きなようにしていいよ」

「……ありがとう、吉井はいい人」

「ちょっと待て!?!どうして俺が……」

「自業自得だな」

「ああ」

「そう……だな」

律の言葉に俺と澪は頷く。

「それで坂本、そのメイド服どうするつもりだ?」

「……着るんだ」

恨みがましい目で明久を見る坂本。

「え、雄二が着るの?うえっ、気持ち悪い」

「そんな趣味があつたのか……」

「ちげえ!明久、お前が着るんだ!」

二人の言葉を一蹴して、少し声を荒げながら坂本が明久を睨む。  
なるほど、と蓮司は口の中で呟く。

ちらりと、とあの二人が座っている方を見て、蓮司は近くにいる霧島に声をかける。

「霧島、これと同じタイプの服、もう一着あるかい？」

「・・・ある・・・」

「それから田井中と秋山、櫛を持っていたら貸してくれ」

「え・・・ああ」

「どうしたんだ、春風？」

「少し・・・怒った」

蓮司の視線の先には馴れ馴れしく星に触っている三年の二人が見えた。

「こ、この上ない・・・屈辱だ・・・」

「別に、俺一人でもよかったぞ？」

「にしても・・・二人とも存分に似合っておるぞ？」

喫茶店から急遽呼ばれた秀吉によりメイド服を身に纏い変装した明久と蓮司。

明久は長い髪のかつらをかぶり、うつすらと化粧をしている。  
蓮司はボサボサに乱れていた髪を櫛で奇麗にして、変装するために  
メガネを装着した。

「さて、行くぞ」

「うん・・・」

「うむ、二人とも存分に悪党を成敗してくるのじゃ」

秀吉に見送られて二人は喫茶店の中に入る。

『にしても、あの喫茶店、汚かったよな？』

『ああ、あそこの食べ物も不味かったしな』

「お客様」

「なんだ・・・へえ、結構可愛いな」

「こんな子達もいたんだな」

「申し訳ありません、足元のお掃除をしますので、少々ご迷惑をお  
かけします」

「掃除・・・さっさと済ませてくれよ！」

そういつて、がたがたと席を立つ二人、蓮司は明久に目配せをする。  
明久はコクリ、と頷いて坊主頭に近づき、モヒカン頭の方へゆっく  
りと蓮司は歩いていく。

「きゃっ!」

裏声で甲高い悲鳴を上げてモヒカン頭の横に倒れ込む。もちろん、ばれないようにスカート裾を持ち上げて。スカートの裾を持ち上げたためにパンツが見える。

「うおっ!?!」

顔を真っ赤にしながらもモヒカン頭は蓮司のパンツを覗き込む。にやり、と蓮司は口の端をゆがめた。それと同時に。

「くたばれええええええええええ!」

明久が坊主頭にバツクドロップを決める。

「きゃああああ、この人痴漢です!私のパンツを見ました!」

「キサマはFクラスの吉井・まさか女装趣味がって、待て待て待て!見ていない!俺は見ていないぞっ!」

「じゃあ、何色でした?」

「え………あ」

「見たんですね!誰かこの人捕まえてください!」

「こんな公衆の面前で痴漢行為とは、ゲス野郎が!」

スカートの中の色を思い出そうとしたのか顔が赤くなる。

痴漢撃退の名目で様子を伺っていた坂本がモヒカン頭を殴り飛ばす。

「ウェイトレス、そっちの坊主の処理は任せたぞ」

言っている坂本の横で明久は装着していた？ブラを瞬間接着剤で坊主頭と合体させた。

「さて、取調べ行為のため、一緒に来てもらおうか？」

「くっ、行くぞ。夏川！」

「くそっ、これ取れねえじゃねえか！覚えていろよ！」

「逃がすか！追うぞ、アキちゃん、レンちゃん！」

カチンと苛立つて蓮司は様子を伺っていた霧島のほうへ駆け寄りひそひそと会話をする。

「霧島」

「……なに？」

「この会計なんだが、坂本雄二を差し出すでよろしいか？」

「……うん」

「そうか、三人に伝えておいてくれ」

「……わかった」

霧島が頷いたのを確認して蓮司は後を追いかけてようとしたのだが、近くの鏡へ偶然、視線が動いた。

「……くそっ、こんな時に」

蓮司はトイレへ駆け込む。

駆け込んだのと入れ替わりに男子達が大慌てで出て行く。

「……そうか、女装したままだった」

まあいい、と思考を切り替えて鏡にアドベントデッキをかざして、変身する。

『KAMENRIDER!』

叫んでウィングナイトとなり、ベントラへと突入した。

アドベントサイクルから下りると、こちらを真っ直ぐに見ている仮面ライダーがいた。

全身がオレンジの姿をしていて、左腕にはカニバサミのようなモノが装備されている。

傍にはアドベントビーストが一步後ろで従者のように立っていた。

「……仮面ライダー……インサイザーか」

「……………」

オレンジ色のライダー、インサイザーは無言で腕のバイザー、インサイザーバイザーにアドベントカードをベントインする。

『STRIKEVENT』

インサイザーピンチという武器を右手に纏い斬りかかって来た。

「ちっ！」

ウィングナイトはブラックバイザーでインサイザーピンチをいなして拳を腹部に叩き込む。

『ぐっ……………』

ダメージを受けたのか仮面の中でぐもった声を出すインサイザー。そのまま攻撃を繰り返していきこうとしたが横からインサイザーのアドベントビースト、ボルキヤンサーが襲い掛かってくる。

「がっ！」

横から地面に叩きつけられてそのままハサミを繰り出してきた。

アドベントカードを引き抜いてブラックバイザーにベントインする。

『ATTACKVENT』

鏡からブラックウィングが現れてボルキヤンサーを翼で弾き飛ばす。

「……………いない」

起き上がるとそこにはインサイザーの姿がない。

「にしても……四人目か……敵か味方か」

誰もいないベンタラで眩きながらウィングナイト……蓮司は元いた世界へ戻っていく。

「くそっ……どこだ……どこに……」

インサイザーに変身していた男はアドベントデッキを強く握り締めながら拳を壁に叩きつける。

すぐ近くからは生徒達の楽しげな声が聞こえてきた。

『順調かな？インサイザー君』

「……あんたか」

すぐ近くから現れた男にインサイザーは視線を向ける。

『キミに朗報だ。仮面ライダーウィングナイトというライダーに遭遇しただろうか？そのライダーを探したまえ、彼がキミの友の行方を知っているかもしれない』

「……そうか」

インサイザーは口元をゆがめた。



**EPISODE 8 (後書き)**

はい、マテリアル登場です。

須藤といし苗字は……いしこ。

「で、三回戦は不戦勝じゃと?」

「うん、相手が食中毒で棄権したんだ」

「まあ、運が良かったな」

結局、坊主頭、モヒカン頭の二人に逃げられた明久と坂本は喫茶店に戻ってきていた。

蓮司もメイド服をAクラスに返した後で帰ってきた。

「明久、少し話がある」

「なに?」

蓮司は教室の隅に移動して、明久に仮面ライダーインサイザーが現れたことを告げる。

「敵なのかな?」

「それはわからない、いきなり襲い掛かってきたからな……一応、警戒はしておいてくれ。どこに隠れているかわからないからな」

「うん……でも、話し合いで解決できないかな?」

「わからない。ライダーはそれぞれの目的で動いているからな……」

あのライダーと同じで」

「……………うん」

「おい、明久、春風！人手が足りない手伝ってくれ！」

「了解、さてと……………」

「行くうが」

「ああ」

蓮司と明久はエプロンを装着して接客へ向かう。

「すまないな、二人とも」

「いっていいって〜、どうせ暇なんだし、なあ、漣？」

「うう〜」

田井中律、秋山漣の二人は土屋康太が瞬時に作成したチャイナドレスを身に纏って接客を手伝っていた。

律は楽しげにやっているのだが、漣は胸や足を周りに見られないように隠そうとモジモジと動いていて、逆に客の高感度を上げている事に気づいていなかった。

「……………ん？」

蓮司は明久が教頭の竹原と話している姿を見て、あることが気になった。

「（あの、教頭・・・まさか？）」

そんなことを思いながら接客を続ける事となった。

明久は須川に頼まれて食料が保存されている教室へ戻ったのだが、部屋の中に何人かやってきた。

「おい」

「はい？」

「お前が吉井明久か？」

「え・・・あ、はい」

『おい、こいつがそうなのか？』

『そつらしい』

『なら、とつととやるか』

「あの・・・ここは関係者以外、うわっ！」

明久は目の前にいた男が繰り出した拳を慌ててよける。

「くそつ！避けるんじゃない！」

「嫌だよ！」

当たったら痛いじゃないか！と明久は言いながら周りの男達の攻撃を右へ左へと受け流して、カウンターを叩き込んだりした。以前の自分なら逃げるだけで精一杯だったのだが、今は違う。

「くそつ！てめえ・・・ふざけるのも・・・大概にしろよ！」

「っ・・・それは!？」

明久は男の一人が取り出したものを見て固まる。

男の手の中には黒い骨を模した様なUSBメモリのようなものが握られていた。

それが、なんなのかを明久は知っている。

それが、どういうものをもたらすかのかを明久は知っている。

それを、使った結果を明久は知っていた。

「ダメだ！それに手を出したら！」

「うるせえ、俺は好き勝手に」

USBメモリの起動スイッチを押そうとしたとき、誰かが置き忘れたのか、机においてあった小さな手鏡からブラックウイングが現れて風を巻き起こす。

風が起こったために教室内は目茶目茶になるが男はメモリのスイッチを押すタイミングを逃してしまい、それをチャンスと見た明久が間合いを詰めて鳩尾に拳を叩き込み、手から零れ落ちたメモリを足で踏み潰す。

バキヤツとプラスチックが壊れる音に似た音が響いてメモリが砕ける。

「・・・おい、明久。須川のヤツが材料がすくなくなってきたる・・・って、なんだこりあ？」

騒動が終わってブラックウイングが鏡の中へと戻ったと同時に坂本雄二が中に入って惨状に驚く。

「あ、雄二、いきなりこの人達が入ってきたんだけど」

「ん・・・ああ・・・なるほどなあ。ここまでやるとはなあ予測はしていたが」

「え？」

「まあいいや、そいつら捨てたらさっさと教室に戻るぞ」

「う、うん」

だが、この時、明久は気づいていなかった。

鏡の中からボルキヤンサーが見ていることを。

春風蓮司はある所へ連絡をするために教室の接客をムツツリー二に任せて、電波の良い屋上へと足を運んでいた。

明久は召喚獣の大会に出場中で、接客をしていた澁と律はその大会を見に行っている。

「すみません、唐突ですけど、検索をお願いしてよろしいですか？」

『問題ない……。キーワードを言ってくれたまえ』

「一つ目、文月学園。二つ目、教頭……。最後に召喚獣」

『……。ダメだ、条件が満たされていないようだ……。他のキーワードはないかな？』

「……………そうですね」

ふと、蓮司はあることを思い出した。  
召喚大会の優勝商品。

「三つ目のキーワードを変更……………」に……………」

『なるほど……………どうやらキミの学校では厄介な事が起こっているようだ』

「……………」

電話の相手からの情報に蓮司の表情が硬くなる。

「……………非常事態」

「なにがあつた……………」

蓮司が話を終えて教室に戻ろうとしている途中に土屋、明久、坂本がどこかへ行くこうとしているので尋ねたら、土屋が非常事態と答え、嫌な予感がする。

「……………ウエイトレスが誘拐された」

「……………行き先はわかっているんだらう?」

「……………問題ない」

土屋の言葉を聞いて、蓮司はついていく、と答える。

「人数は少ない方がいいが……」

「さらわれたウェイトレスの中に俺の知り合いがいる可能性がある、確認するだけだ」

「それなら……仕方ないな、行くぞ」

「ああ……」

蓮司達は学校を出て少し先にあるカラオケボックスにたどりついていた。

土屋は盗聴器の受信機を懐から出して全員がそれに耳を澄ませる。

「さてどうする？坂本と吉井だったか……こいつらを人質にして呼び出すんだろ？」

「待て。吉井つてのは知らないが坂本は下手に手を出すとかなりヤバイ。今は聞かないが中学の時相当鳴らしていたらしいからな」

「坂本つて、あの坂本か？」

「ああ。できれば事を構えたくはないんだが……」

「問題ないだろ？」

「え？どうしてだよ？」

「忘れたのか“ ”からもらったこれのこと」

『そうだな・・・これさえあれば』

「(ねえ、雄二、この連中って?)」

「(ああ。黒幕に依頼されたチンピラだろう)」

「(状況はよくわからないが、人質の数を把握する必要がある・・・  
もう少し様子を見るぞ)」

「(・・・蓮司、どうかした?)」

「(・・・なにが?)」

「(少し様子がおかしいような・・・?)」

『お、お姉ちゃん・・・』

『アンタ達、いい加減葉月と秋山さんを放しなさいよ!』

『お姉ちゃん、だつてさ! かつわっいい!』

『ギャハハハハハハ!』

島田葉月の震えたような声と島田美波が妹を助けようと叫ぶ声が聞こえて、明久は中に突撃しそうになるのを蓮司が横から抑える。

「(明久・・・落ち着け)」

「(わかってるよ!でも・・・)」

「（・・・落ち着け）」

明久は蓮司の顔を見る。普段と違って表情というものがなくて、無しかし、下へ視線を向けると、拳から血が出そうなほど強く握り締めていた。

『・・・灰皿お取替えします』

『おう。で、このネーちゃん達どうするのやっちゃっていいの?』

『やるなら俺はこの黒髪の奇麗チャンがいいな』

『ズリー、なら俺はこの巨乳ちゃんで!』

『ちょっとあんた達! 溼に変なことしたら!』

『あー、うっせえ』

『律!』

「（あ、おい明久・・・つて、春風!?）」

ドシンという音と机に何かがぶつかるとような音と溼の悲鳴を聞いた途端、明久と蓮司は同時に立ち上がりドアを開けて中に入る。

「失礼しまーす」

「あ、なんだ、お前ら?」

「そうですね・・・」

「とりあえず」

「お前達の罪を数えろ！」

二人同時に目の前の男の顎を殴り飛ばし、次に呆然としている身近の男を蓮司が蹴り飛ばして、状況を理解して攻撃を仕掛けようとした男を明久がタツクルをする。

「な、なんだ、てめえらあ！」

「くそつ、こつなつたら！」

男の一人がポケットからUSBメモリを取り出す。そのスイッチを起動するよりも早く目の前に設置されていたテレビからボルキャンサーが現れて男を取り込む。

「・・・なんだと？」

「蓮司、今のつて・・・」

「明久、春風、大方、終えたみたいだな」

隠れて様子を伺っていた坂本がゆっくりとやってくる。

「ああ・・・」

ちらりと鏡の中の様子を見ると恐竜を模したような怪物とオレンジ色のカニを模したような仮面ライダーが戦っていた。

「・・・おい、春風？」

「田井中・・・大丈夫か？」

床に座り込んでいた田井中へ蓮司は近づいて尋ねる。

怪我がないか確認したあと、ソファアールに座って震えている秋山へゆつくりと近づいていく。

「・・・・・・・・あきやま・・・無事」

無事か、と最後まで言う前に漣はだっ、と律へ駆け寄ってそのまま律を抱きしめた。

蓮司は言葉をやめて、そのまま外へと出て行って誰もいないのを確認して近くの窓でアドベントデッキをかざす。

「KAMENRIDER！」

叫んでウィングナイトへ変身して蓮司はベントラへ入る。

**EPISODE 9 (後書き)**

カップリングについての意見ありがとうございました。

台風でまさかの授業お休みです。

ベントラでは恐竜を模した怪人がインサイザーに止めを刺される瞬間だった。

インサイザーのファイナルベントを受けて恐竜を模した怪人から人の姿に戻り、無様に地面を転がる。  
手にもっていたメモリに亀裂が入り砕け散った。

『さつきも聞いたが答える、あいつはどこにいる?』

「だ……だ……だ……」

ふらふらで弱っている男の胸倉を掴んでインサイザーは尋ねる。

「やめておけ、そいつは喋る気力がない……聞きたい事があるなら後にもらおうか?俺もそいつに用事がある」

『邪魔をするなあ!』

『STRIKEVENT』

『SWORDVENT』

インサイザーピッチをウィングランスで受け止めていなす。  
互いの武器がぶつかり合う中、ウィングナイトは顔を近づけて尋ねる。

「何が目的でライダーになった?」

『お前に話す必要はない!』

拳をウィングナイトの懐に叩き込む。

ウィングナイトは少し怯むが即座に膝蹴りをインサイザーに入れる。

「ライダーになることで起こるデメリットを知っているか？」

『そんなものに興味はない!』

『ATTACKVENT』

背後からボルキャンサーがウィングナイトに襲い掛かる。

「邪魔するな!」

『ATTACKVENT』

ブラックウィングがボルキャンサーに体当たりをする。

ボルキャンサーが離れたので、振り返りウィングランスでボルキャンサーを突く。

さらに突く。何度も何度も突いて、突いて、突き続ける。

強烈な一撃を受けてボルキャンサーは大きく後ろへ飛んでそのまま逃げ去った。

「……逃げたのか」

後ろを見るとインサイザーの姿がなく、倒れている男の姿だけ。

「……あの臭い」

ウィングナイトは戦ったときに漂ってきた香りに顔をしかめる。

「……………」

放課後、春風蓮司、吉井明久、坂本雄二はFクラスの教室で人を待っていた。

「成る程な……だから坂本は明久とタッグを組んで参加していたのか……」

「うん……ごめん、黙っていて」

教室の中で蓮司は二人が召喚大会に出た理由を聞いた。

その理由は教室の設備を改築するのと、ある遊園地の会社が企画しているイベントへのみちしるべとなるペアチケットの回収。

「まあ、お前が“気になる人”のために何かをしていたんだ、とかくいうつもりはない」

「うん……」

「それで、いつになったら来るんだ？ 坂本のいう根源は？」

「やれやれ・・・わざわざ来てやったのに随分な挨拶なこったね。ガキ共」

「来たな！諸悪の根源め！」

「やれやれ、いつからアタシが黒幕になったのやら」

ため息をはきながら文月学園の学園長がやってくる。

「明久、根源だが、諸悪じゃないぞ？」

「・・・え？」

「おや、誰かと思ったら春風蓮司までいるのかい？」

「どうも・・・」

「諸悪の根源ではなくても、俺達に話しておくべき事を話しておかないのは十分な裏切りだと思うが？」

「ふむ・・・やれやれ賢いヤツだとは思っていたけれど、まさかアタシの考えに気づくとは思っていなかった」

「最初に取り引きを持ちかけられたときからおかしいとは思っていたんだ。あの話だったら、俺達に頼む必要はない、高い成績を持っている奴、例えばそこにいる春風みたいなのを使えばいいのに」

「それに、こんな遠まわしのようなことをせずに優勝者から直接説

明してもらえるように頼めばいい」

「あ、そうだね」

「それにわざわざ俺達を擁立するなんて効率悪すぎる」

「話を引き受けてきた教頭の手前おおっぴらに妨害する事ができない、とは考えなかったのかい？」

「それなら教室の補修に関して渋ったりなんかしないはずだ。教育方針なんてものの前にまず生徒の健康状態が重要なはずだからな。教育者側、ましてや学園の長が反対するなんてありえない」

「つまり、明久と坂本を召喚大会に出場させるためにわざと渋ったということだ」

明久がぎりつと歯をかみ締める。

「明久、俺がババアに一つの提案をしたのを覚えているか？」

「提案・・・えーっと」

「科目を決めさせろってヤツかい？なるほどね。アレでアタシを試したわけかい？」

「なるほど、めぼしい参加者全員が同じような提案をする可能性があるあるかもしれない。もしそうなら坂本達が有利になるような話はない。しかし」

「そう、このババアは提案をのんだ。他にも学園の喫茶店」

営業妨害がでたり、俺達の対戦相手に情報を流す密告者がいたりと色々あったし、何より俺達のじゃまをしてきた連中が姫路達を連れ出したのが決定的だった。ただの嫌がらせならここまでではしない」

「（それに“ガイアメモリ”を所持していたりな）」

「……そうかい、向こうはそこまで手段を選ばなかったか……すまなかったね」

いきなり学園長が頭を下げて明久は驚きの表情をしている。坂本も同様に少しびっくりしている。

「アンタらの点数だったら集中力を乱す程度で勝手に潰れるだろうと最初は考えていたのだろうけど、決勝まで進まれて焦ったんだろうね」

「さて、こちらのタネ明かしは終了だ、今度はそっちの番だ」

「はぁ……あたしの無能を晒すような話だから出来れば話しておきたくはなかったんだけどね」

「坂本、明久、学園長の狙いは如月ハイランドのペアチケットじゃない。白金の腕輪の方が目的だ」

蓮司の言葉に学園長は驚いて目を見開く。なんで、そんなことを知っているんだ？と。

「白金の腕輪がどういうものか調べているな？」

「確か……二つあるんだっけ？」

「そう、一つは点数を二分して二体の召喚獣を呼び出すことが出来る腕輪、もう一つは先生の代わりに立会人になって召喚用のフィールドを作る事のできる腕輪、その腕輪を二人に勝ち取って貰いたいんだよ」

「僕らが勝ち取る？回収して欲しいわけじゃなくて？」

「回収が目的だったら明久達を使う必要性がない・そもそも、学園長は回収なんて真似をするのをどうして避けたかったのさ」

「そうか……」

「気づいたか、坂本……」

「え……なに？」

「白金の腕輪には欠陥があったのさ」

苦々しい表情をして学園長が答える。

技術者としては自身の作成したものが欠陥品であるということ暴露するというのはかなり屈辱的なことだ。

「その欠陥は俺達が使っ分には問題ないのか？」

「そうさ、アンタ達が使っなら暴走は起きない。不具合は入出力が一定水準を超えたときだけだからね、あんた達にしか頼めなかったのわ」

「えっと……それって、つまり、僕達バカにしか使えないんだよ」

ね？」

「なっ、明久がわかるなんて明日は雨が降るのか!？」

「バカにしないでくれないかな!」

「となると、明久達の妨害をしてくるやつ等は学園長の失脚を狙う人達だな・・・考えるなら他校の経営者とその内通者か・・・」

「そうだな、俺達の邪魔をするってことは、腕輪の暴走を阻止されたら困るって連中、そんな学園の醜聞をよしとするとすることはウチに生徒を取られた他校の経営者くらいしか考えられない」

「ご名答、身内の恥晒すみたいだけど、隠しておくわけにもいかなからね。恐らく一連の手引きは教頭の竹原によるものだね、近隣の私立校に出入りしていたなんて話も聞くし、まず間違いないさね」

「それじゃ、僕らの邪魔をしてきた常夏コンビとか、例のチンピラとかも教頭の差し金?」

「協力している理由はわからないがおそらくそうだろう」

「あのさ・・・これって、かなりマズイ話だよね?」

「ああ、文月学園存亡の危機ってヤツだ」

試召戦争と試験召喚システムは、その特異な教育方針と制度で存在自体の是非が問われているものだ。そんな状態で暴走なんて問題が起きたら学校そのものの存在意義も問われる事となる。

それはつまり、仲間と離れるのを意味する事で、明久はなんとか解

決法を考えようとした。

「あ、でもいざとなったら優勝者に事情を話して回収したら」

「そうはいかない。決勝戦の対戦相手を知っているか？」

そういつて、坂本が一枚の紙を見せる。

対戦相手の名前は今まで散々、明久達に迷惑行為をしてきた。

「常夏コンビ……！」

「おそらく……いや、間違いなく奴らは教頭サイドの人間。喜んで観客の前で暴走を起こすだろう」

「悪いがアンタ達にはなんとしても優勝してもらわないと困るんだよ」

そこで学園長は蓮司へ視線を向ける。

「というわけだが、春風蓮司、アンタはどうするんだい？」

「決まってる」

蓮司はにやりと不適に笑う。

「秋山達に深い傷を残そうとした奴らをみすみす逃すわけには行かない。追い詰めて自身の罪を数えさせてやる……それに」

ちらりと明久を見る。明久はにやりと蓮司に微笑む。

「相棒が地獄の底までいくってんなら、どこまでも相乗りしてやる」

「それじゃ、アンタ達、明日は頼んだよ」

「はい」

「漣、大丈夫か？」

「そういう律こそ・・・頭とか怪我しなかったか？」

「あたしは問題ないよ。怪我もなかったし・・・でも、あんな態度とってよかったのか？」

「なにが・・・？」

「春風のことだよ・・・。助けに来てくれたのに、あんな態度・・・」

「いいんだよ・・・春風は私の事、見てないから」

秋山澪は中学生の時、一人の男子生徒へ好意を抱いていたことがあった。

その男子生徒の名前は春風蓮司、いつも教室の隅でぼんやりと窓から見える景色を見ていることが多い生徒。

春風蓮司に対して他のクラスメイトは冷たい態度を取っていて、蓮司もクラスメイトに対して冷たい態度をとる事が多かった。

その理由は知らない、気がついたらクラスメイト達の何人かが蓮司たちを嫌っていて、暗黙の了解として、話しかけることを許していなかった。

だが、秋山はクラスメイトが知らない一面を知っていたのだ。

春風はクラスメイトが世話をするのを嫌っていたウサギの世話を一人ですいている。

ウサギの世話をするくらいなら勉強をしたほうがいいと思うくらい、クラスの子達はウサギを毛嫌いしていた。

その中で、ただ一人、教師に申し出て一人で世話をすると、蓮司は言った。

秋山も手伝おうと申し出ようとしたのだけれど、自分もいじめられてしまうのではないかと怖くなって言うことができなくて、でも、気になって、何回かウサギ小屋に足を運んでしまっていて。

そんなある日。

『そんな所で見ていないでこっちにきたらどうだ？』

そういつた彼はにこりと微笑む。

秋山は戸惑いながらもゆつくりとウサギを撫でる。

それから、毎日ウサギの世話を秋山は春風と一緒にする事となった。春風は何も言わずに黙々と作業をするため二人は無言の作業となっていた。けれど、毎日が不思議と楽しかった。

そんなある日、事件が起きた。

春風蓮司の事を快く思っていない一部のクラスメイトが夜にウサギ小屋の鍵を壊して開けたまま。放置していたがために野生の動物が忍び込んで中にいるウサギを食い殺してしまった事件。

生徒は誰も名乗り上げる事がなく。そのうち変な噂が流れるようになった。

春風蓮司がウサギを殺した・・・と。

噂の当人である春風蓮司は否定する事も犯人を捜すという事を一切せず、彼はウサギの亡骸を燃やして骨にしてどこかに埋葬した。

この時、澁はウサギの骨を蓮司が円筒形の壺に埋葬するまでずっと泣き続けて、蓮司は作業を終えたとき、澁の手を握り、こっぴう。

『俺の分まで・・・泣いてくれてありがとう・・・と。』

それから蓮司は続けてこんなことをいった。

『もう、俺と関わるな』

感謝のことばの後に拒絶の言葉、当時の漣は受け入れるどころか、蓮司を抱きしめてある言葉を叫んでしまった。

『好き』だと。今思えば、拒絶されているのになんで好きだと叫んだんだ？と思うくらい自分は混乱していたのだろう。

それに対して春風蓮司は何も答えることなくその場を去っていった。告白した後・・・彼は一度も漣と会話をすることなく、クラスも別々となつて、それから卒業となつて、桜ヶ丘女子高等学校で再会するまで・・・それから会話をする事もなかった。

再会した時、春風はあの時と違っていた。  
あの影のあるような表情と違い、明るく・・・前よりもカッコよくなっていた。

けれど、春風は・・・。

「とんでもないことになったな」

「そうだね・・・教室の修理を頼むだけのはずだったのに、いつの間にか学園を巡る大問題になっているものね」

暗くなった通学路を明久と蓮司は歩いていく。

「ねえ、蓮司、一つ聞いてもいいかな？」

「なんだ？」

「秋山さんとはどういう関係なの・・・その付き合ってるのか？」

「・・・そんなのじゃないさ。ただ、無自覚な発言であいつを傷つけてしまっただけだ」

蓮司は一人でいる事が当たり前だった。

家族は昔に死んでしまったらしくずっと孤児院での生活。

孤児院で家族といえる人達がいたが同時に嫌なヤツもいた。

そんな中で、蓮司は“秋山澪”という少女に出会う。

びくびくして、大人しい印象の子。

その子の傍には田井中律という元気そうな子がいて、時々困ってい

たが楽しそうにしていた。

その時は羨ましいとかそんなものは感じなかった。ただ、可愛いと  
思っている自分がいたのを覚えている。

「昔の俺はかなり根暗だったからな、色々と無自覚な発言をしてい  
たんだよ」

「本当にそうなのかな？」

「？」

「だって、蓮司は優しいから、色々と迷惑をかけないために無自覚  
な発言をして相手を遠ざけようとしていたって事もあると思うんだ。  
ほら、僕らが始めてであって友達になった時みたいだね？」

そういつて、明久は制服をめくって腕の火傷のような痕を見せる。

蓮司にも同じような所に痕がある。

それを思い出してか、蓮司は苦笑した。

「やっぱり・・・お前には敵わないな、明久」

「蓮司が僕より不器用すぎるんだよ」

「なんだとー」

二人は小突きあいながら帰路へつく。

余談だが、蓮司は家に帰るのを渋り明久の家へ泊まったのは内緒だ。

EPISODE 10 (後書き)

次回くらいでインサイザー編は終了ですかねえ？

ところで、アイドルマスターを知っている人は好きなキャラって、誰ですか？

EPISODE 11 (前書き)

クイズです。今回使われているネタ全てをあてなさい。

E P I S O D E 1 1

学園祭2日目。

『5人揃って!』

『超新星!』

『人に隠れて悪を斬る!』

『星を守るは天使の使命!』

「元気な奴らだな・・・」

「雄二がどんなノリでもいいから盛り上げるといっておったからのう・・・」

蓮司と木下は急遽用意された舞台の上で盛り上がっているFクラスの面子を見てぼつりと感想を漏らす。  
そんな二人のところに須川がやってくる。

「春風、坂本みなかったか？」

「あいつなら召喚大会に向けて睡眠中だ。どうかしたのか？」

「臭い消しがないかと思ってさ？嬉しい事なんだけど、お茶の葉の香りが消えなくてさ」

「そういえば、良い香りが漂ってくるのう」

「嬉しい事なら消す必要がないんじゃないか？」

木下がくんと須川の周りをくんと、と嗅ぐ。

「・・・ナンパをしようとするともこの香りが原因で失敗してしまうみたいで・・・」

「ふうん、臭い消しはないから・・・どうしても欲しいなら個人で買ってくれ」

「おう、わかった！」

須川は出て行き、舞台のほう騒がしくなる。

先ほどまで何人かいた生徒達が舞台から降りて二人だけとなり、雰囲気を出すためか周りを暗くしていた。

『全てのアンデットは封印した！残るはキミ一人だけだ！できれば・・・キミとは戦いたくない！』

『俺とお前は戦う事しか・・・分かり合えない！』

「どうでもいいが・・・ネタに走りすぎだな、あいつら」

「そっじゃの、ここは演劇がなんたるかをワシ自ら見せて」

「木下、注文が入った。行って来い」

「……………お主は鬼じゃ！」

「そんな悲しい顔をしてダメだ、仕事を全うして来い」

蓮司に言われて秀吉は接客を開始した。

『それにしても、春風はアキと一緒に寝ないのかしら？』

『そうですね。もしかして吉井君。坂本君に乗り換えちゃったとか？』

「「こらそこ！アホな妄想してないでさっさと仕事につけ！殴られた  
いか！」」

「ああ、よくなたあ」

「お、繁盛してんじゃねえか」

「まあな、原因がアレというのが納得できないけどな……」

『馬鹿な！何故立てる！？もうエネルギーは残っていないはずだ！』

『どんな時も諦めず、不可能を可能にする。それが』

「あいつらのテンションに感化されたのが客がどんどん入ってきているんだよ」

「なんか……女子の魅力負けてねえか？」

「それはいわない約束じゃない？」

「二人とも手伝ってくれるんだろ？そろそろ俺は休憩だから後は任せたぞ」

「おう！」

「蓮司、楽しんできてね」

「あ、レン」

「………よお、星」

ぶらぶらと廊下を歩いていたらメイド服ではなく文月学園の制服を着た星がいた。頭にウサギ耳をつけて。

「お前……頭どうした？」

「頭ですか？・・・っ！」

ぺたぺたと触ってウサギ耳に気づいた彼女は慌てて頭からウサギ耳を取り去る。

「んで、その」

「そうだ！どうせだから一緒に行きましょうか！」

「いや、その頭の」

「そういえば、この近くに出し物がありましたね！覗きに行きましようか！」

「・・・もういい、よほど触れて欲しくないみたいだな」

蓮司はウサギ耳の追求を諦めて星の後を着いていく。

そして、星は自分の言っていた出し物が何なのか確認していなかったため、酷い目にあってしまったということを書き記しておこう。その名前を絶叫ハウス。

「ひ、酷い目に合いました・・・」

「お前がちゃんと確認しないからだろ？」

「そ、そうかもしれないですが・・・レンも気づいているならちゃんと言ってくれてもいいじゃないですか！」

「いや、お前って、しっかりしてるから大丈夫だと思ったんだが・・・まあ、こっぴどミスがあるってのもいいよな」

「どういう意味ですか？」

「そのまんまの意味だよ」

蓮司は微笑みながら星の先を歩く。

星はむむっという表情をして、蓮司の手を掴んだ。

「ん？」

「人が多くなってきましたから・・・迷わないようにです！」

「お、おう」

少し戸惑いながらも蓮司と星の二人は仲良く廊下を歩いていた。

「あ、春風くーん！」

二人が仲良く？廊下を歩いていた所に平沢唯達がやってくる。

「よお、みんな・・・じゃないな、来たのか」

「うん！澪ちゃんは用事があるから遅れるんだって」

平沢唯の後ろに琴吹紬、中野梓、田井中律、平沢憂もいた。

しかし、秋山澪の姿がないことに、なぜかわからないが蓮司の心が痛む。

「ここが文月学園なのね、早く二人から聞いた召喚獣が見たいわ」

ムギの言葉に蓮司はポケットから黒い携帯電話を取り出して時間を確認する。

後三十分くらいしたら決勝戦が始まるな。

「それじゃ、会場に行くとするか」

「しかし、レン、予定の時間までまだ」

「こういう行事ってのは早めに行動して席を確保しておいた方がいいんだよ、特に召喚獣なんて外部の人間が見る機会なんて早々ないんだ。見たいと考える人間は大勢いるだろう？」

「あ、そっかー！レン君頭いいよねえ」

「いや・・・常識だろ？」

「律先輩の言うとおりだと思います」

「憂々、りっちゃんとあずにゃんが苛めるよ」

「お姉ちゃん、大丈夫だよ」

泣きじゃくる？姉を妹がなだめていた。

どうでもいいが、どっちが姉妹かわからないと蓮司は思う。

「みんなを会場に案内するけど、星はどうする？」

「私も行きます」

「そっか」

二人を先頭にして桜ヶ丘メンバーを会場へと連れて行く。

その途中、平沢唯と田井中律の二人がいくつかの出し物に興味を持ち、そちらに向かおうとしたり、琴吹が綺麗とかいいながら外をふわふわとんでいた風船を掴もうと窓から飛び降りそうになったりと、色々なハプニングがあったが割愛しておこう。

『さて皆様。長らくお待ち致しました！これより試験召喚システムによる召喚大会の決勝戦を行ないます』

「お、ようやく始まるみたいだな！」

「それにしても凄い熱狂ですね」

「やはり、みんな試験召喚システムが珍しいんですね、普段から使っている私達からすると実感が大分遠いですけど」

聞こえてくるアナウンスは今まで聞いた事のない声だった。どうや

らプロを雇っているようだ。

『出場選手の入場です!』

「あ、吉井さんですよ!」

「隣にるのがパートナーの人なのかな?」

梓と憂が少し緊張した様子で入ってきた明久を見る。

「ねえねえ、りっちゃん。あの人がゴリラと組んでいるよ!」

「おお・・・って、なんでじゃい!あれはどうみても人間だろ」

「え・・・?」

「・・・唯先輩」

『二年Fクラス所属・坂本雄二君と、同じくFクラス所属・吉井明久君です!皆様拍手でお迎えください!』

「しかし、残念ですね」

「なにがだ?」

星が小声でいった事が気になって蓮司が尋ねる。

「実は、夜と光も召喚大会に出場していたんですよ」

「へえ、それは初耳だな。でも、あの二人なら優勝狙えただろうな」  
「実際、優勝候補だったのですが・・・試合前に腹を壊してしまい、不戦勝で敗北してしまっただんです」

「あああー、それは不運だな」

気になって対戦相手の表を確認すると明久達とぶつかっていた。  
明久達からすると幸運だっただろうな。

相手が光と夜だったらポロポロでは済まなかっただろう。

あの二人はどういうわけか、明久に対して嫌悪感を示していて、時々、結託しては明久を亡き者にしようとする事があるから注しないといけない。

二人が話している間に反対側のブロックから対戦相手が現れる。  
三年生の坊主頭とモヒカン頭の二人。

『そして対する選手は、三年Aクラス所属、夏川俊平君と同じくAクラス所属・常村勇作君です！皆様、こちらにも拍手でお迎えください』

「あいつらAクラスだったのか・・・しかし」

Aクラスなら普通に学力においては優秀な筈だ。なのに、なんでこんな悪事に手を染めようとしているのだろうか？

『出場選手が少ない三年生ですが、それでもきっちり決勝戦に食い込んできました。さてさて、最年長の意地を見せる事ができるでしょうか！』

「三年生が相手って、春風の知り合いは大丈夫なのか？」

「田井中、あいつらを舐めていると痛い目みることになる」

「え？」

「あいつらをバカにしていると寝首かかれちゃうぞといことですよ」

蓮司が微笑み、星が付け足すように言う。

「ようセンパイ方、もうセコい小細工はネタ切れか？」

腕を組んで、小バカにしたような雄二の態度、こういった仕草が様になる男だよな。と明久は思う。

「お前らが公衆の面前で恥をかかないように、という優しい配慮だったんだがな。Fクラス程度のオツムじゃ理解できなかったか？」

応える坊主センパイも負けていない。顎を手で擦り、挑発し返してきた。

どちらも相手を苛立たせる態度が実に上手い。  
しかし、

「残念ながら、お前らの言葉なんてAクラス所属でも理解できない  
だろうよ。まずは日本語を覚えてくるんだな。サル山の坊主大将」

「て、テメエ、先輩に向かって・・・！」

坂本の方が一枚上手だ。そして、確認したい事がひとつだけある明  
久が一步前に出る。

「先輩。一つ聞きたい事があります」

「んだ？」

「教頭先生に協力している理由は何ですか？」

「・・・そうかい。事情は理解してるってことかい」

「大体は。それでどうなんですか？」

「進学だよ。うまくやれば推薦状を書いてくれるらしいからな。そ  
うすりゃ受験勉強とはおさらばだ」

「そうですね・・・そっちの・・・常村先輩も同じ理由ですか？」

「まあ・・・」

「・・・そうですね」

小さく頷いて会話を打ち切る。  
明久が聞いたかった事はそれだけだ。

「本当は小細工なんていらなかったんだよな。Aクラスの俺達とFクラスのお前らじゃ、そもその実力が違いすぎる」

「そうかい、それなのにわざわざご苦労な事だな。そんなに俺と明久が怖かったのか？」

「ハッ！言ってる！お前らの勝ち方なんて、相手の性格や弱みに付け込んだ騙まし討ちだろうが。俺達相手じゃ何もできないだろ？」

坊主頭先輩のいう事に一理あった。

明久達が今まで勝ってこられたのは相手のことを知っていたからだ。今回の対戦相手だと今までと同じようなパターンでは不可能。

『それでは試合に入りましょう！選手の皆さん！どうぞ！』

「「「「試獣召喚！」「」」」」

三年の先輩の装備はオーソドックスな剣と鎧。  
高得点者の召喚獣らしく、質はかなりよさそうに見える。

『Aクラス 常村勇作 & Aクラス 夏川俊平  
日本史 209点 & 197点 』

「どうした？俺達の点数見て腰が引けたか？」

「Fクラスじゃお目にかかれなような点数だからな。無理もない

な

誇らしげにディスプレイを示す先輩達。

確かに誇ってもよいくらいの数。凄く、強いだろう。

けれど、これだけの点数が取れるなら自分たちの実力で勉強したらいい、なのに、彼らはできることをやろうとせず、人生で一度しかない、高校二年生の学園祭を壊そうとした。楽しい思い出作りの邪魔をしてきた。

明久や蓮司の大切な人達に取り返しのできないような酷いことをしようとした。

ちらり、と会場を見上げると観客席にいる蓮司と目が合う。

“参加できないから、俺の分まであいつらをぶつとばしてやれ!”  
“そういわれたような気がして明久は頷く。”

「ホラ、観客の皆様に見せてみるよ。お前らの貧相な点数をよ」

「夏川。あまりいじめるなよ。どうせすぐに晒されるんだぜ?」

「……前に」

「んあ?」

「前に、クラスの子と大切な親友が言っていた」

「なんだ?晒し者にされた時の逃げ方でも教えてくれたのか?」

「『好きな人のためなら頑張れる』『どんな時にも諦めない人間に必ず勝利の女神は微笑んでくれる』って」

「ハア？コイツ何言ってるんだか」

「僕も最近、心からそう思った」

『Fクラス 坂本雄二 & Fクラス 吉井明久  
日本史 215点 & 166点』

「「なっ!?!」」

「アンタらは小細工なしの実力勝負でブツ倒してやる！」

「悪いが先輩方、本気で行かさせて貰うぜ？」

秋山澪は息を切らして文月学園の校舎に足を踏み入れる。

「はぁ・・・はぁ・・・もう始まつちやってるかな？」

澪は用事が長引いてしまい、一人遅れる形で文月学園にたどり着いた。

「おや、どうしました？」

会場へ向かおうとしていた澪に誰かが呼び止める。

振り返ると上品なスーツを着てにこりと微笑んでいる事から学園の関係者か何かなのかな？と思い込んで。

「あ、ちょっと友達との待ち合わせに遅れてしまいました・・・」

「それはいけませんねえ・・・待ち合わせというのは大事ですからね・・・本当に」

「二人ともお疲れ様。凄かったぞ!」

「すごいすごーい!まるでヒーローみたいだったよ!」

「あ、ありがとう。田井中さん・・・と、どちら様?」

「彼女は平沢唯、ここにいる平沢憂の姉だ」

「えっへん!」

「そこで威張るんですか？」

決勝戦はなんとか明久と雄二の勝利で終わった。

三年生側が周りに気づかれぬように卑怯な手を使うといった事もあったが、それすら乗り越えて明久達は勝利したのである。

文月学園の面々と桜ヶ丘の面々が混ざり合いながら明久と雄二を賞賛する。

「あれ……蓮司は？」

「春風君なら用事があるとかでどこかにいっちゃったよ？」

蓮司とも話し合いたかったのに、と明久は思いつつも明久と雄二は喫茶店の手伝いを再会する。

召喚大会は終わったが、学園祭はまだまだ続くのだ。

鏡の中からインサイザーは獲物を睨んでいた。

獲物の二人は悪態をつきながら、ある部屋で何か作業をしていて鏡の中にいるこっちは気づいていない。

インサイザーはボルキャンサーに二人を誘拐させようとカードをデッキからアドベントカードを抜いた。

「あの二人とつちめる気か？」

背後から聞こえた声に振り返ると春風蓮司がインサイザーの前に立っている。

どうしてここに！？とインサイザーが動揺しているのがわかったが蓮司は気にせず前に出た。

「お前がどんな目的で人を誘拐しているのかは知らない、だが、あの二人はどうせすぐに痛い目を見る・・・それで手を打つつもりはないか？」

『断る』

「何故だ？」

『キサマに話す必要はない・・・邪魔するなら』

インサイザーがカードをベントインしようとして動きを止める。

「いつの間に……」

「悪いが、俺とお前では踏んでいる戦いの数が違う、その程度の速度で勝てるほど、仮面ライダーは甘くはないということだ」

手を動かして蓮司は奪い取ったボルキャンサーのATTACKVENTのカードをインサイザーに投げ返す。

投げ返されたカードはインサイザーのすぐ横の壁に突き刺さった。

『何故返す?』

「戦う理由がなくなったから」

蓮司が指差した方向を見ると、さっきまでいた常夏コンビの姿がなくなっていた。

インサイザーは仮面の中で舌打ちしながら背を向ける。

『次邪魔するなら……容赦しない』

そういつてインサイザーは去っていく。

「俺は邪魔をしないさ。お前の前に立ちはだかるのは……」

学園祭が終了して坂本雄二は近くで遊んでいた吉井明久を呼び止める。

周りを見ると、桜ヶ丘のメンバーは姫路瑞希、島田美波とかなり仲良くなったみたいでこの後の打ち上げに参加しないか？と話合っていて、他の男子達はどの子が可愛いかなどと遠くで話し合っていた。

「おい、明久、遊んでないで学園長室に行くぞ」

「学園長室じゃと？二人とも学園長に何か用でもあるのか？」

「ちょっとした取引きの清算だ。喫茶店が忙しくて行けなかったからな。遅くなったが今から行くことと思う」

「ならばその間にワシは着替えを」

「そうはいかない！秀吉も一緒に連れて行く！」

「……………(クイクイ)」

「あ、ムッツリーニも来る？」

「……………(コクコク)」

「困ったのう、雄二、なんとかいってやってくれんか？」

「ん〜……………ま、いいだろ。秀吉とムッツリーニも行くつぜ。明久を説得できるのは春風だけだし、あいつがいない今、何を言っても無駄だ」

「やれやれ。雄二まで……………仕方ないのう。着替えは後回しじゃ」

秀吉がため息を吐いて、全員は外へ出て行く。

「失礼しまーす」

「邪魔するぞ」

ノックと挨拶をして学園長室のドアを開ける。

「お主ら、全く敬意を払っておらん気がするのじゃが・・・」

「そう？きちんとノックをして挨拶をしたけど？」

「アタシは前に返事を待つようにいったはずだがねえ」

「あ、学園長。優勝の報告に来ました」

「言われなくてもわかっているよ。アンタ達に賞状を渡したのは誰だと思っっているんだい」

相変わらず遠慮のない学園長、だからか余計話しやすく感じる。学園長は秀吉とムツツリー二を咎めるような視線を向けていた。

「それにしても、随分と仲間を引き連れてきたもんだねえ」

「こいつらもババアのせいで迷惑を被ったからな。元凶の顔くらい拝んでもばちはあたらなはずだ」

「・・・ふん、そうかい。そいつは悪かったね」

「それで、白金の腕輪は返却したほうがいいですか？」

白金の腕輪は高得点をたたき出した時に出てくる金の腕輪と違って、召喚者自身が装備するものという違いがある。

「いや、それは後でいいさね。どうせすぐに不具合は直せないんだ」

「む？明久、不具合とはなんじゃ？」

「あ、そっか、秀吉は知らなかったんだね。この白金の腕輪はちょっと欠陥品で」

明久が続きを言おうとした所で学園長室のドアが乱暴に開いて春風蓮司が乱入してきた。

「明久あ！」

「うわっ！？蓮司？」

「何さね、急に！」

学園長が怒鳴るのを蓮司は指で“静かに”という動作を取って、小声で。

「盗聴されている」とだけ告げる。

そして、明久に外に出るぞと指差す。

二人が同時に外に出ると離れた所からだつと逃げていく二人の姿が見えた。

「どうする！？」

「明久、お前はインサイザーのほうを頼む」

「頼むつて。どこに現れるのかわからないんだけど……」

「あの二人を追いかけろ。インサイザーの狙いはあの二人」

その時、蓮司の携帯電話が振動する。

ポケットから取り出すと非通知と表示されていた。

「……もしもし？」

『ハルカゼレンジカ？』

「誰だ？」

『オマエノタイセツナオンナハアズカッタ。カエシテホシクバ、シラガネノウデワヲモツテ、キュウコウシャノオクジョウニコイ』

「あ？何を」

『モシ、コナカッタラコノオンナハニドトヒノヒカリヲミルコトハナイダロウ』

「……おい、大切な女つて……くそつ、切れた」

「どうしたの？」

「誰だか知らないが、女を預かったから返して欲しかったら白金の腕輪をもってこいだそうだ……大切な女つて」

蓮司の脳裏に星、光、夜と浮かんでいく。

「はい、これ」

「明久・・・お前・・・」

「僕はインサイザーを追う、正体は蓮司の言っていたとおりなら任せて。だから蓮司は誘拐したっていう女の人を助け出して」

「・・・わかった」

二人は互いに拳を突き出して反対の方向へ走っていく。

常夏コンビは突如現れたボルキャンサーに腰を抜かしてその場所から逃げようとしていた。

彼らは決勝戦で敗北してしまったために校長室に仕掛けた盗聴器でこの学園を潰すためのキーワードを入手しようとしていたのだが、春風蓮司の乱入によりそれが台無しとなった。

しかし、まだ手段があった彼らは教頭の指示を得るために校舎の屋上へ向かったのだが、そこにボルキャンサーが現れた。

「なっ、なんなんだよ!?この怪物は!」

「俺が知るかよ!」

二人は顔を真っ青にしながら近づいてくるボルキャンサーに恐怖していた。

ボルキャンサーが二人に触れるか触れないかの距離に近づいた時、横からドラグレッダーが体当たりをして、ボルキャンサーは鏡の中へ消えた。

ドラグレッダーも一声大きく鳴いて鏡の中へと消える。

ありえない出来事に遭遇した二人はぶつつんと意識を手放す。

その時、持っていた録音機を尻にしていしまい、バキャンと壊れる音が響いた。

「くそっ!」

須川亮は悪態をついて目の前に現れた吉井明久を睨む。

「吉井!お前が仮面ライダーだったなんてな!」

「須川君……」

「どうして俺がライダーだとわかった？」

「紅茶の香りだよ」

明久は語る。

ウイングナイトが戦っているときに気づいたのだ、相手の体から漂ってくる匂い。

その匂いが文月学園Fクラス『中華喫茶ヨーロッパアン』で使われている葉の匂いだということに。

「はっ……今度から変身する時は臭い消し全身に噴きかけないとダメだな」

「それよりも、どうしてこんなことを？」

須川はにやりと笑みを広げて、アドベントデッキを明久に突きつけた。

「知りたかったら俺と戦え！ドラゴンナイト、ウイングナイトのどっちかと戦って勝利したら俺の目的を達成できる！俺がまけたら話してやるよ！」

「……僕らが戦う必要なんて」

「戦わないっていうんなら、こいつがクラスメイトを誘拐するぞ？」

須川は悪人が浮かべるような残忍な表情をして笑う。

「さあ、どつする？」

「……須川君、そこまで歪んでいたんだね」

明久は悲しそうな表情をしてポケットからドラゴンナイトのデッキを取り出して前に突き出す。

デッキから赤い光が走って腹部にVバツクルを形成する。

「それでいい！」

須川は笑ってアドベントデッキを前にかざす、オレンジ色の光が走って腹部にVバツクルが形成された。

『『KAMENRIER!』』

赤とオレンジの円形の光に包まれて二人は仮面ライダーに変身する。

「オラッ！」

インサイザーの繰り出された拳をドラゴンナイトは右手で受け流してカウンターを入れる。

「ぐへっ！」

「うりゃー！」

カウンターを入れた後、片足でインサイザーの腹をけりとばす。

「なめんなー！」

『STRIKEVENT』

インサイザーピッチを片手に装備して振り回してくる。  
振り回してくる攻撃を右へ左へ避けようとしたが猪みたいにインサイザーが突進してきたために近くの壁に倒れ込む。  
壁を壊して教室の向こうへと倒れた。

「うりゃああああ！」

『SWORDVENT』

すぐ近くの壁を壊してドラゴンナイトはインサイザーにドラグセイバーを振り下ろした。  
バチバチとアーマーに火花が散って後ろに仰け反る。

春風蓮司は新校舎の屋上にたどり着いた。  
周りには大きめの放送設備が置いてあって人の姿がみえない。  
ここどこかに犯人とさらわれた女の子がいるのだろうか？

「やあ、遅かったね」

「・・・成る程、あんたか。俺を呼んだのは」

現れたのは教頭の竹原だった。

竹原はネクタイを緩ませてにたにたといやらしい笑みをこちらに向けている。

「それで、白金の腕輪は持ってきてくれたかな？」

「その前に、女って。誰だ？」

ここへ向かう前に蓮司は星、光、夜と遭遇していて、大切な女が誰なのかわからなかった。

蓮司の態度を見て竹原はにたにたと笑みを浮かべたまま横へ一步動く。

壁にぬいつけられたかのように地面に座り込んでいる秋山漣がいた。漣は薬かなにかで眠らされているのか起きる気配がなく、手には手錠がつけられていた。

「なんで・・・彼女が・・・」

予想外の事に蓮司は戸惑う。

「少し前にキミが楽しげにその子と歩いているのを見かけてね。計画が失敗したために保険として捕まえたのさ。さあ、白金の腕輪を渡したまえ」

「一つ聞かせろ、あんたは文月学園の人間だろ？なんでこの学校を潰そうなんて考えたんだよ？」

「簡単な事だよ。いつ潰れるかわからない学園の教頭なんてやっていられるわけがないだろう？それに、二年生は史上最悪のバカといわれる生徒がいて、度々問題を起こしてまわると言う。いつ学園がなくなるかわかったもんじゃない」

「それだけの理由か？」

「もちろん、それだけじゃないさ。何より一番の理由はここにいてはトップになることができないからさ、トップにはあのババアが居座り続けるしかない。悔しい話、あのババアがいなかったら文月学園は機能することがない。私がトップになってもこの学園はちゃんと機能しない・・・ならば、この学校から出るために潰してしまえばいい。そう思いついたのだよ」

「そのためなら、若い子がどうなってもいいっていうのか？」

「私さえよければそれでいいのさ！」

「そうか・・・」

蓮司は顔を俯かせた、それを見て教頭の竹原はくっくつと笑い出す。だが、それに被せるかのように蓮司も笑い出す。

「・・・何がおかしい？」

「いや、申し訳ない。どこの悪役みたいに全て明らかにするものだからさ・・・校内に全部筒抜けだぜ？」

## 学園長室

「全く、とんでもないことをする餓鬼達だねえ、ワタシが慎重に調べようとしていた事をこんな形で暴露させちまうんだから」

学園長室で学園長は苦笑いをして放送を聞いていた。

「ば・・・バカな！？どうやって・・・この機器を弄った！？そんな動き微塵も」

『それは私がやったのだ』

「だ、誰だ！？」

『ここだ』

竹原のすぐ近くの場所に黒い携帯電話が立っていた。黒い携帯には手と足がついていて、液晶画面には顔が浮かんでいて、ジャンプして蓮司の掌の上に着地する。

「ご苦労様、ゼロワン」

『校内全域に放送した。学園長が警察にも連絡するだろう。すまないバディ、バッテリーが切れる。オレが手伝えるのはここまでだ』

「ご苦労さん」

蓮司はポケットに携帯電話を入れて、竹原を見る。

「さて、教頭先生、今ならまだ自首すれば終わりますが……」

「ふざけるなあ！」

竹原は叫んだかと思うと懐のポケットからUSBメモリの形をした道具、ガイアメモリを取り出す。

「あんたもガイアメモリを持っていたのか!？」

「これはねえ、学園を潰そうとした時にある男が役に立つと行って数本くれたのだ。もっとも、不良達に渡したらほとんど壊されてしまっただけだ。こいつだけだがねえ！」

「やめろ！ソレを使うと」

「うるさい、餓鬼風情が偉そうに私に指図するなあ！」

『ENERGY』

「うおおおおおおお！」

メモリを口の中にあるアダプタに差し込んで教頭はエナジードーパントへと変身した。

エナジードーパントの片腕にはプラグのようなものが装着されていてそこから電気の塊が飛び出す。

「ちっ、まずは、秋山を安全な所に」

蓮司は駆け出して漣の下へ走る。それをさせまいとエナジードーパントが妨害してくる。

電撃を手に纏い振り回してくるのを蓮司は大きく開いていた足の間に入り込む事で攻撃を回避し、蓮司は漣を抱きかかえた。

漣を大事そうに抱えて蓮司は唯一の出口のドアへ手を伸ばそうとした。しかし、エナジードーパントの雷撃がドアを破壊した。

ドアの形が歪んで開かなくなる。

「ぐおおおお！」

インサイザーの攻撃を受けてドラゴンナイトは後ろに倒れ込む。しかし、すぐに起き上がって殴りかかる。

なぜ、立ち上がる！？とインサイザーは仮面の中で苛立った表情で睨む。

あんな屑を守るためか！？

屑がいくらなくなっても困る奴らなんかいないだろうに！

須川亮には友達がいた。

文月学園ではなく隣町にある学校に。

その友達と須川は仲良しだった。

春風蓮司と吉井明久の仲に匹敵するかもしれないくらい、お互いの事を信頼している。

だが、須川の親友の家庭はかなり不安定で、何かが起こってもおかしくはない状況。

そんな中で友達が消えた。

須川は警察などに頼み込んで友達を探すように頼み込んだが、親族が搜索依頼を出していないため、警察は動く事ができなかった。無力感が全身を包み込んだ須川の前に一人の男が現れる。男は須川にアドベントデツキを渡してこういう。

『キミの友達の行方を捜すための道具だ。好きな風に使いたまえ』  
そして、こうもいった。

『もし、ウイングナイトという存在に出会ったら倒して欲しい。彼はキミの願いを妨げようとするだろう』

ウイングナイトは春風蓮司だった。  
クラスメイトでも邪魔をするなら容赦しないつもりだったが、どういわけか目の前にいるのは吉井明久でウイングナイト「春風蓮司」じゃない。

自分の目的を妨げられては困る！

インサイザーはインサイザーピッチを振り上げた。  
がっ、とドラゴンナイトは声を漏らして体が宙に浮く。  
さらに止めることなく拳を繰り出そうとした。

「いい加減に……しろお！」

『STRIKEVENT』

ドラグクローを装備したドラゴンナイトの拳がインサイザーの腹部を打ち抜かなかった。

「何故だ……」

インサイザーは拳を強く握り締めて目の前にいるドラゴンナイトを睨む。

「こんなことをしても、何の意味もない・・・須川君が傷つくだけだよ」

「ふざけんな！俺は傷ついていない！あいつを取り戻すためならどんなことでもしてやる！傷つくのは俺の聞いている事を応えようとしない奴らだけだ！」

「そんなことない！」

ドラゴンナイトは叫ぶ。

「人を傷つけて傷ついていないなんて人はいない、そう思い込んでいるだけだよ！それに・・・」

ドラゴンナイトは一步、後ろへ下がる。

「手段は結果を正当化するなんてことはないんだよ・・・キミが大勢の人を傷つけて大切な人を助けたとしても、君が大勢の人を傷つけたという結果は変わらないんだよ？そのことを理解してる？」

「うるせえ！それがどうした！」

「・・・そうか」

ドラゴンナイトは体制を低くして告げる。

「キミがこのまま大勢の人を傷つけていくというなら僕はここでキミを倒す・・・そして君を止める！」

「やってみろよお！俺を止めるってがああああ！」

最後まで言うことなくドラグクロー・ファイヤーを受けてインサイザーは後ろに倒れ込む。

「てめっ！本気で」

返事は二度目の火球だった。

インサイザーは慌てて右へ飛んで避ける。

「お、おいおいおい！マジで俺のことを倒すっていうのか！？ちょっと待てぐおお！」

三度目の火球が当たりインサイザーは後ろに倒れこむ。

「大丈夫、死ぬ事はないよ」

ドラグクローを構えたままドラゴンナイトは喋る。

「ライダーシステムにはある一定レベルのダメージを受けると“あるシステム”が起動して死ぬ事はないよ、でも背負うものがある。それがなんだと思う？」

応えないインサイザーにドラゴンナイトの言葉は続く。

「人を傷つけたという十字架だよ。キミにはそれを背負う覚悟があ

る？いや、考えていないだけだよ。でも大切な人を助けたとしても、いつかは須川君・・・キミは対面しないといけないんだよ？大勢の人を傷つけたという事実がキミにやってくるよ？」

「なんでそんなことがいえるんだよ！」

「・・・僕と蓮司はそれを味わったからだよ」

ドラゴンナイト、いや、明久は語る。

少し前、彼には助けたい人がいた。どんなことをしても助けたい人が・・・。

助けるために明久はあるものに手を出してその人を助けた。

その後、彼と蓮司は現実を突きつけられたのである。

『俺達が大勢の人を傷つけた』という事実。

だから、今のインサイザーを見ていると助けたいと同時に知らず知らずといけないことがある。

「須川君、もう一度」

「明久ああああああ！そこどけえ！」

「えっ？」

窓をガシャンと蹴破って春風蓮司がドラゴンナイトの上に倒れ込む。倒れた拍子になぜか変身が解除される。

インサイザーは突然の事に呆然とした後、はっ！と気づいてそこから逃げ出す。

「蓮司・・・重いよ」

「すまん、それよりも明久・・・」

「なに？」

「走れ」

『逃がさんぞお！餓鬼どもお！』

「ドーパント！？」

「くそっ！」

蓮司は秋山澪を抱えて走り出す。

明久も遅れて後を追う。

「ちょっと蓮司！？どうしてこんなことになっているの！？」

「変身したくても鏡がなかったんだよ！だから、場所を変えようと思っただらお前がそこで戦っていたんだ！」

「てか、あのドーパントって・・・教頭なの！？」

「ああ・・・どうやらあいつがあ不良達にメモリを渡していたらしい」

「・・・そっ」

蓮司と明久は同時に立ち止まる。

そして蓮司は秋山澪を近くの壁に眠らせるように横にして立ち上がった。

「インサイザーは逃げたのか」

「蓮司のおかげだね」

「すまん」

『見つけたぞ、餓鬼があ・・・殺してやる!』

「大人が軽々しく殺すなんて言葉を口に出しちゃダメだよ!」

「悪いが、あんたを許すつもりはない、俺の大切な人を酷い目にあわせようとしたんだからな」

二人は同時にアドベントデッキを前にかざす。すぐ近くに鏡があつてそこからスパークが発生してVバツクルを形成した。

『KAMENRIDER!』

『KAMENRIDER!』

赤と青のスパークが発生して二人の姿が変わり、ドラゴンナイト、ウイングナイトへと変身する。

そして、同時にビシツと指をエナジードーパントへ突きつけた。

「さあ、お前の罪を数えろ」

『んなの知るかあ!』

『SWORDVENT』

『 STRIKE EVENT 』

ウィングランスを構えてウィングナイトは駆け出す。

エナジードーパントは腕から電撃を放とうとするがソレよりも早くドラゴンナイトのドラグクロー・ファイヤーが炸裂して電撃が爆発してエナジードーパントはダメージを受けた。

その隙を狙ってウィングランスがエナジードーパントを攻撃していく。

エナジードーパントは反撃しようとするがウィングナイトの猛攻に成す術もなく崩れていった。

近くの窓を壊して落ちていったエナジードーパントを見下ろしながら二人は腕のバイザー、剣のバイザーにアドベントカードをベントインする。

『 FINAL EVENT 』

『 FINAL EVENT 』

ブラックウィング、ドラグレッダーがやってきて飛んでくる。

二人は同時に空高く飛び上がり、ドラゴンライダーキック。飛翔斬を放つ。

エナジードーパントはヤバイと判断して背を向けて走り出そうとするが間に合わず二つの攻撃を受けて大爆発を起こす。

爆発が起こった後、教頭が口にメモリをくわえた状態で地面に倒れ込んでいた。

パキヤツと嫌な音がしてメモリが砕け散る。

こうして、文月学園を巡る事件は終わりを告げた。

秋山漣はぼんやりとした表情で保健室のベッドの上に寝ていた。どうして自分はここで寝ているのだろうか？

はて、と首をかしげているとカーテンを開けて誰かが入ってくる。

「あ……………」

「起きたのか」

入ってきたのは癖のある黒い髪に文月学園の制服を身に纏った春風蓮司。

そして、自分が片思いをしている男子。

漣は何もいう事ができず俯く。

蓮司はベッドの近くの椅子に座って。

「漣、その……………すまなかった」

ぺこりと蓮司は頭を下げる。

「えっ！？な、なにが！」

何故、頭を下げられたのかわからない漣は混乱する。

「カラオケボックスの事だ。その……………巻き込んでしまった悪かった」

「いや、蓮司が悪いわけじゃない……………その怖かったけど……………ああ、でも！」

蓮司が漣といったために、漣自身も昔みたいに名前で呼ぶ、

怖かったという言葉聞いて辛そうな表情をする蓮司に漣は手を乱暴に振りながらゆっくりと思っていた事を告げる。恐怖が先走っていえなかった言葉を。

「蓮司が助けてくれた時はとても嬉しかったから」

彼女の笑顔を見て蓮司は「そうか」という表情をしてそっぽを向く。その頬が赤くなっているように見えた。

「あ、秋山」

「漣」

「え？」

「さっきみたいに……昔みたいに、漣って呼んでくれ……私も蓮司って……呼ぶから」

「……わかったよ、漣……それで……これからFクラスの面々で打ち上げを行なうんだが、一緒に来ないか？」

「……え、いいのか？迷惑になるんじゃない？」

「もう、平沢達に参加している……今さら一人増えた所で問題じゃないさ」

「そう……か、ならいくよ」

「よし、行くか」

「というわけで、吉井君、脱いでください！」

吉井明久はFクラスの打ち上げでへとマヌケな表情をしていた。目の前には頬を赤らめて片手に酒が入ったジューズを持つ姫路瑞希の姿がある。

どうしてこうなったかというと、少し前に遡る。

召喚大会に優勝した後、姫路瑞希に話があるので駐車場にきてくれ

といわれていたのをすっかり忘れていて、つい、さっきそのことで姫路さんが怒っているといったので、ごめんねと謝罪した途端、先ほどの言葉が姫路瑞希の口から出てきたのである。

「ねえ、姫路さぐお！？」

何か言おうとした明久に姫路は抱きついて明久の服を脱がそうとし始める。

「ねえ！？ちよつと落ち着こうつてやめてえ〜！僕の服を脱がそうとしないであえ」

「ダメです！吉井君が学園のために必死になつて頑張っていたというのに・・・私は自分の事で一杯一杯・・・でしてえ・・・ふあから・・・」

という光景が起こっているのを平沢唯と琴吹紬は観察していた。

「わあー、大胆だねえ〜」

「この後どうなるのかしら？」

「ねえ！そこの二人、見ていないで助けてよ！？」

「つまんないから嫌だよ〜」

「つまんなくないよ！？大事な事だよ！」

「どつするムギちゃん？」

「どうぞしよつかしらっ？」

「早く助けましょう!」

梓が気づいて眠っている姫路を抱き起こす。

「「あー、あずにゃん、いけずう」

「何がですか!?!」

「うにゅーい。明久くん……」



「そうか・・・あの男、メモリ渡したのに失敗したのか」

『そのようだよ？どうやら期待はずれだったようだね？』

「そうらしい・・・これだから人間というヤツは出来損ないばかりだから困る」

『しかし、そういうキミも人間だろ？』

「“将軍” 私は貴方に選ばれたときからそこらへんの人間達とは違う存在ですよ？あんな出来損ないと一緒にしないでもらいたいですね・・・ところで、彼が動き出すようですが」

『ああ、彼は好きにやらせるとも・・・駒の数は均等にした方が面白いからね』

「果たして均等になりますかね？選ばれた人間の殆どがあっちへ行きそうな気がします。」

『もちろん、何人かには首輪をつけるつもりだよ。でも、あちらも“二人だけ”の戦いではすぐに終わってしまったらつまらないじゃないか、あそこまで凄まじい事をやっておいて』

「そうですね・・・さて、これからどのように動くのか見物しますか・・・ゼイビアックス將軍」

『そうだね、楽しみだよ・・・君』

## EPISODE 11 (後書き)

さて、これにてインサイザー編は終わりです。

これを読み終わった方は気づいたかもしれないですが、インサイザーはまだ脱落しません。

そして、大事なお知らせが一つ、クロスオーバーの中にあつたFateを削除する事を決定しました！

理由としてはクロスオーバーの話が減らして、いくつかに集中させた方がいいと思ったからです。

多重クロスというのは・・・あくまで個人的な感想ですが、重なりすぎるとキャラで薄いヤツがでてきたり、不憫な扱いをしてしまう？のも出てくる事になりそうなので、ゲストとして登場するキャラを除いてメインを少し減らす事にしました。

最後に次回からの話を少し。

簡単にいいますと、アイマスが登場します！

これだけでわからない人がいるかもしれないですが、アイドルマスターのキャラクターが登場します。

どういう形で絡むかは楽しみにしててください。

それでは！

薄暗い闇の中一人の女性が逃げている。

その後ろを巨大な翼を持った『何か』が追いかけていた。

女性はある場所からなんとか抜け出してここまで逃げていたのだけれど、もう少しで交番にたどりつくところである怪物が現れた。

自分を助けようとしてくれた警官を殴り飛ばして、自分を捕まえようと迫ってくる。

このままでは殺される。

迫り来る恐怖におびえながら女性は公園の近くの茂みに隠れた。

『どこダ？カクレてモムダダよ。デテオイでエ』

壊れたラジオのような声を出してゆっくりとあたりを探す怪物に女性は体を縮込めるようにして抱きしめる。

早くあつちに行って、戻ってこないで、と親から渡されていた数珠を握り締めて女性は祈り続けた。

『ミイツケタア』

聞こえてきた声に女性が悲鳴を上げようとしていると真正面から緑色の光弾が怪物を撃ち抜いた。

桜ヶ丘女子高等学校軽音部室で中野梓は練習が終わって、嬉しそうに帰る準備をしている秋山澪に気づいた。

普段の秋山澪は練習の時間が少ない！というくらいの練習時間を大切にしている彼女がなぜか帰ることを楽しみにしていることに梓は気がなった。

「澪先輩、どうかしましたか？」

「え？」

「いえ・・・何か楽しそうにしているので」

「あ、もしかして」

「律！」

何か言おうとした律を澪が制する。

しかし、声が少し多かったために唯が反応した。

「あれ、澪ちゃん。顔赤いよ」

「あらあら」

「そ、そんなことない！」

澪は顔を真っ赤にして鞆を手にとって外に出ようとする。しかし、唯がボタンと出口のドアを閉じた。

「まだ話の途中だよ！澪ちゃん」

「…………唯先輩、早く動けたんですね」

「あずにゃん！酷いよお！」

「まあ、唯が早く動けたことは置いておいて」

「ひどいよ…！」

まだ騒ぐ唯を置いておいて、律はにやりという表情を浮かべて澪に迫って。

「諦めて全て白状しまいな」

澪は親友を見た後、周りを見る。

みんな年頃の女の子みたいなお表情をしてこちらを見ていた。

澪は諦めるしかなさそうだ。

春風蓮司と吉井明久は授業が終わり、仲間達と別れて喫茶Amigoへと足を運んでいた。

文化祭の騒動の後、文月学園はこれから数日間の休みを迎えることとなる。

なぜかというと校舎が一部半壊したり、内部がところどころ壊れたりしたために修築する必要があるためだ。  
Amigoへ向かうのは彼らがこの店のバイトとして働いているため、と仕事に来ていないかの確認である。

「こんにちはー」

「こんにちはー」

「おう、よく来たな」

二人がドアを開けるとこの店のオーナーで父親のような存在である立花藤兵衛が出迎えた。

「おい、二人とも“あれ”が来てるぞ」

「あ、そうですか!」

「いつもの場所ですか?」

「ああ」

二人は頷いて、奥のテーブルへ向かう。

テーブルの周りには植木が置いてあって周りの客からは見えないようになっている。

そして、その席には一人の女性が座っていた。  
蓮司と明久は互いに頷いてその人の前に座る。

秋山澪、田井中律、平沢唯、琴吹紬、中野梓の四人は楽しげに会話

をしながら喫茶 Amigo のドアの前に立った。

「へえ、ここで春風働いているのか」

「ああ、それでバイトの休みの時間とかなら話ができるっていわれたから……」

「へえ〜」

「いいな」

「入りますね」

梓がドアを開けると立花藤兵衛が出迎える。

「おや、今日はお友達も一緒かい？」

「はい……あの、春風さんは？」

梓が尋ねると、藤兵衛は少し顔をしかめて。

「すまないが、あそこの席で待っていてももらえるかな？あいつら今大事な話をしている最中なんだ」

「大事な話？」

「ほらほら、入って入って」

唯達が入って席に座ろうとしていた時に溲はちらりと室内に蓮

司がないか探すが見つからない。

その時、カウンターの片隅に木製のポストみたいなものが置いてある事に気づいたが、すぐに蓮司を探すために周りを見る。

## EPISODE 12 (後書き)

新章突入です！なので、今回は短いです。

今回の新訳は前作と比べると大きく違ってきている？ということをもろもろわかってもらえたと思います。

それと、この作品の第一期？イメージソングが決まりました。

少し前にプレゼントでもらったソングの一つを採用したのと最近ユーチューブに出現している曲を聴いて、これがいいなァーと思いました。

曲が知りたい人はメッセージで送信してください。曲名だけ送ります。

なぜそうするかって？新しい規約にひっかかりたくないからです。

最後にちっさいアンケートを

天海春香、星井美希、如月千早、萩原雪歩、この中で明久のヒロインにするならどれがいい？

ちなみにキャラクターがわからないという方は公式サイトをみるだけだと思います。

どんなキャラかだいたいわかるので！

## EPISODE 13 (前書き)

現在、アイマスヒロイン候補で有利なのは千早ちゃんですね、このヒロインについて少し後書きでちゃんと説明しようと思います。

「本当に・・・信じて大丈夫なんですか？見たところ、貴方達、年下にしか見えないんですけど」

「それに関してはご安心ください。俺達は学生ですが、今までに色々な事件を解決してきた探偵に鍛えられているので保証書つきです」  
女性に蓮司が頷き、明久が微笑みながら懐から保証書と書かれているものを取り出す。

「それに情報を漏らすようなへマもしません」

「本当に表沙汰にならないんですよ？」

「表沙汰にしないように努力はします。起こることといえば犯人が逮捕されるときに少しテレビに映るといふことくらいなんですが・・・」

「はぁ・・・まあ、わかりました。では、後日こちらに来てもらえますか？」

そついつて女性は名刺を渡して店から出て行く。

春風蓮司と吉井明久の二人は過去のある出来事からこの街で起こる不可思議な出来事を解決する一種の“探偵”のような副業を営んでいた。

彼らの本業は学生であるため表立ってこういうことはしていない。いわゆる相談役として成り立っていて、金の請求などもしない。していることといえば喫茶 Amigo にまた訪れてコーヒーを一口飲んでもらうことくらいだ。

たったそれだけのことなのに、依頼人達は頼りになると次々と太鼓判を押していき、知名度は上がってきていた。

「僕はその目撃された現場を見てくるよ」

「ああ、頼む」

明久は壁にかけられていたヘルメットを手にとって店の外に出て行く。

バイトに戻るかと蓮司が立ち上がると、二つの手が掴んである席へ強制的に座らせる。

「・・・なんで、お前たちがいるんだ？」

「えへへ、来ちゃった」

「てへつと可愛らしげに笑うな、田井中」

「まあまあ、レン君。今忙しくないでしょ？少しお話しようよ」

「すまない・・・蓮司」

「別に気にしなくていいさ。漣」

「あら？」

「なんだ？琴吹」

琴吹が手を口に当てて驚いた表情をしてこちらを見ているので蓮司が尋ねる。

「漣ちゃん、春風君と名前で呼び合っているのね」

「ん、ああ……まあな」

「（おいおい……これ漣に対して脈アリじゃないのか？）」

「（そうなんですかね……？でも、漣先輩はともかく春風さんってそういうの表に出ませんよね？実際の所どうなんですかね？）」

梓と律がひそひそと話している横で唯の口が開いた。

「レン君ってさ、漣ちゃんのこと好き？」

「ぶっ！？」

「ゆ、唯先輩！？」

律が飲んでいた紅茶を噴き出して、梓が驚いた声をあげる。

「……まあな」

蓮司が素直に答えると漣は顔を真っ赤にして、唯達が急に騒ぎ出す。唯達に捕まって蓮司はしばらく抜け出せなかった。

「それできー。さっきのあれはなんなのさー」

「あ、ああ……あれだよ」

ようやく落ち着いてから、律が尋ねる。

蓮司は隅に置かれていた郵便ポストみたいなものを指差す。

そこには『貴方の身の回りでありえない出来事が起こっているならこのポストに投稿してください。貴方の悩みを解決して見せます。

依頼料は喫茶 Amigo のコーヒ一杯』

「ありえない出来事……って？」

「少し大きさに書いているけど、誰にも相談できない悩み聞きますよーっていうもんだよ。いわゆる相談所？みたいなものだ」

「なんだー」

話を聞いて唯ががっかりして机に顔を伏せる。

「なんで突っ伏しているんですか？唯先輩！」

「だつてー、探偵みたいな事しているのかなーと思ったんだもん  
！」

「そつだよなー、相談なんて渋いよなあー」

「渋いのかしら？」

「わからないです」

ムギの疑問に梓が首を横に振る。

澪はポストを眺めていた。

「……ここかぁ。吸血鬼の出た公園っていうの……」

明久は吸血鬼が目撃されたっていう児童公園に足を踏み入れる。

ここ数日、有名アイドルを輩出している事務所に所属している子が吸血鬼に襲われるという事件が発生していた。

死者が出ていないため、警察はまともに取り合う事はせず、周辺パトロールを強化するのみだけらしい。

そして、今回の依頼人はある事務所の事務員で、その事務所に所属

しているアイドルが吸血鬼を目撃してしまい、おかしな出来事が多発しているから何とかしてほしいと依頼してきたのである。公園には滑り台やブランコといったありきたりなものが置いてあった。

「しまった・・・吸血鬼がどんな姿しているのか聞いていなかった」  
情報が少なすぎるし、出ないみたいだから帰ろうかなーと明久は考えて背を向けた直後、近くの電話ボックスからモンスターが飛び出して明久に襲い掛かる。

「うわっ！」

モンスターの爪を慌てて避けるとモンスターは着地した途端、電話ボックスのミラーに吸い込まれるようにして消えた。

「逃がすか！」

ポケットからアドベントデッキを突き出して電話ボックスのミラーに突き出す。

赤いスパークが発生して腹部にVバツクルが形成された。

『KAMEN RIDER!』

叫んでデッキをバツクルに入れる。

円形の赤いスパークに包まれて明久はドラゴンナイトへ変身した。

「っしゅー！」

ドラゴンナイトがベントラへ入り込むとモンスターの姿が見えない。しかし、何かに見られているような気配があった。なんで、いないんだ？と知っているのと突如、目の前が大爆発を起す。

「いつつ」

爆風にあおられてドラゴンナイトは滑り台の上に倒れ込む。

一体、何がと思って顔を上げると少し離れた所に緑色の大型ランチヤーを持った仮面ライダーの姿があった。

「……仮面ライダー!？」

現れた5人目の仮面ライダーは今まで出てきた仮面ライダーと比べると近代チックなデザインをしていた。

仮面ライダートルクは腰に装着しているマグナバイザーの銃口をドラゴンナイトに向ける。

「やばっ!」

ドラゴンナイトが横へ飛ぶと同時に緑色の光弾が滑り台に直撃する。さらに追い討ちをかけるように次々と緑色の光弾がドラゴンナイトに襲い掛かってきた。

「ねえ!」

光弾を避けながらなんとか説得しようとしたドラゴンナイトは話しかける。

しかし、トルクは返事することなく次々と光弾を放ってきた。少し危険だけど……。

ドラゴンナイトはトルクに向かって駆け出す。

トルクはドラゴンナイトに光弾を発射して行くが、全弾当たることなく地面に兆弾する。その中を突き進みトルクに拳を放つ。

ドラゴンナイトの拳はトルクの眼前に止まる。そしてトルクのマグナバイザーの銃口がドラゴンナイトの顔に向けられている。

「何故、攻撃を止めた？今の速度ならキミの拳が速かった」

「僕はキミと戦うつもりはないんだ。話し合いがしたいんだ」

「何をバカな事を・・・誘拐犯と話をするつもりはない」

「それが勘違いなんだよ。僕らは」

「うるさい！」

「うぐっ！」

トルクは叫んでドラゴンナイトの腹部に拳を叩き込む。

腹部を押さえて仰け反ったドラゴンナイトに背を向けてトルクは闇の中に消えた。

ゴキツとドラゴンナイトの腕から嫌な音が聞こえた。

「あー、また説得できなかった・・・やっぱり、説得とか向いていないのかな？」

実際、インサイザーの時だってまともに説得をせずひたすら戦ってしまったわけだし。

「それにしても……これ、どうしよう」

変身を解除した明久が自身の手を見るとうっすらと赤く変色していた。

須川亮は街中を独りで歩いていた。

ドラゴンナイトの戦いの後、どうしてかずっと友達を探そうという気持ち薄れていた。

いや、正確に言つと違う。

友達を探したい気持ちは前よりも強くなつていつているが、その方法を換えようとしているのだ。

今までは彼に酷い事をしてきた不良達を叩きのめす事で情報を引き出そうとしていた。しかし、二人の仮面ライダーと人間が化け物になった者の戦いを見てから彼の中で何かが変化していた。おかしなことかもしれないが実際にそうなっている。

「やあ」

そんなことを考えている須川の前に一人の男が現れる。

男といつても須川と同じくらいの年齢の少年だ。

「……」

誰かと会話する気になれない須川は横を通り抜けようとする。

「話くらい聞いてもいいんじゃないかな？仮面ライダーインサイザ  
ー？」

「……誰だ、あんた？」

須川はすぐに変身できるようにポケットの中に手を伸ばす。

それを見た少年は手を前に出して戦う気はないというポーズを取る。

「戦う気はないよ。とりあえず話だけでも聞いてもらえないかな？」

「……手短にしるよ」

須川の言葉に少年は見えないところでやりと不気味に口元を歪ま

せた。

EPISODE 13 (後書き)

アイマスのヒロイン候補ということですか、現在起こっている吸血鬼事件の間だけ、のメインヒロインになるかもしれないです。みなさんの票が多いキャラは場合によっては明久のヒロイン候補にもなりえますし、次席のキャラは他のキャラのヒロインになるかも？

つまり、何が起こるかわからないってことです。

そして、この意見は大勢の人に意見してもらいたいのです。票の数によって話の展開、キャラとのヒロインが変更になったりする可能性も有ります。

次回、アイマスキャラが登場……するといいなあ……。

「仮面ライダーダートルクか・・・」

「話し合いをしようとしたんだけど、いきなり攻撃されちゃったよ」  
文月学園への通学路を歩きながら蓮司と明久はひそひそと話していた。

明久は仮面ライダーダートルクの事について。

そして蓮司はというと。

「例の吸血事件についてだが、今までの被害者の数は五人。全員入院中だ」

「それって・・・血を全部抜き取られたとか？」

「襲われたときの恐怖が酷くて入院中だ」

蓮司の表情からして被害者達の状態がかなり酷いという事を明久は察知して小さく呟く。

「・・・酷いね」

「ああ・・・」

二人の間で会話というものがなくなる。  
そんな二人の前にひとりの生徒が現れた。

「おや。吉井君、春風君じゃないか。おはよう」

「あ、久保君。おはよう！」

「よう」

二人の前にやってきたのは学年次席、二年Aクラスの久保利光。噂では明久に好意を抱いているとの噂があるが、実際の所不明である。そんな噂とか関係なく蓮司と明久は接しているが……。目の前にいる久保は明久に会えたことが嬉しいのか顔が微笑んでいた。

「二人とも表情が険しいけど、何かあったのかい？」

「ううん、別に何もないよ」

「そうかい……。ん？吉井君！その手はどうしたんだい！？」

久保利光は明久の腕に巻かれている包帯に気づいて詰め寄る。  
詰め寄られて明久は蓮司に視線を向けた。

「実は少し前に車と激突しそうにらしくてな。その時に手を傷めてしまったんだ、日常生活に支障は出ないらしいが」

「それは心配だ。大丈夫かい？」

久保は明久の手の具合を見る。

蓮司は立ち止まってそのやり取りを見ていたが、時間がやばいなーということに気づいて一足先に学園に向かって歩いていく。

この時、蓮司達は気づいていなかった。久保利光のポケットから覗いていたものに。

授業が終わり（それまでにFFF団に追いかける。姫路瑞希の手料理を食べさせられるという出来事などがあったが）蓮司はふらふらの明久を抱えるようにして秀吉達と一緒に外に出た。

「明久よ。大丈夫かの？」

「な………なんとか………」

「………鉄の胃袋<sup>ボンリ</sup>」

「雄二はまだ保健室から帰ってきておらんというのに」

「ああ、それは……多分」

『………雄二、どこ？』

蓮司達のすぐ横をかなりの速度で黒い何かが通過して行く。

「霧島が坂本を探していたから隠れているんじゃないか？」

『……雄二、逃がさない』

『ざけんなあ！人の寝込み襲うようなヤツに負けて堪るかあ！』

そういった蓮司の横を雄二と黒い瘴気のようなものを纏った霧島翔子が通り過ぎていく。

あまりの展開の速さにこの場の全員何もいう事ができない。

「まあ、とりあえず……帰るか」

「」「うん」「」

その後、坂本雄二は鉄人に捕まって生徒指導室に連行されたらしい。

ある休日、吉井明久と春風蓮司を偶然、中野梓と平沢憂の二人は目撃した。

「あ、春風さん、吉井さん〜！」

「あ、平沢さん。中野さん。買い物途中？」

「はい・・・あの、お二人はどこか出かけるんですか？」

梓の質問に明久と蓮司の二人は互いに顔を合わせてから一言。

「「遠出するのに必要だからバイクを取りに喫茶Amigoへ」」

「バイク・・・？」

「Amigoのおやつさんは元々レーシングクラブのオーナーでね。自分でバイクの調整したり開発とかをしていてね、僕たちもバイクを預けてあるんだ」

「それで、俺達のバイクが必要になったから取りに行く事にした・・・」

Amigoが見えてきて蓮司はぴたりと立ち止まった。  
口がぽかんと開いていた。

「どうしたの？れん・・・」

明久も店の方を見てぽかんとする。

憂と梓の二人も呆然として店の方を見た。

喫茶Amigoのドアから黒い煙がもくもくと噴出している。

「「火事かあああああ！？」」

二人はダッシュで店のドアを開けて火元を探し始める。

憂と梓も気になって店の中に入り込んだ。

店の中は煙に包まれているだけで火が上がっている形跡がない。

「あの・・・これ、本当に火事なんですか！？」

「・・・あれ・・・でも、煙出ているよね？」

「とにかく換気だ！平沢手伝ってくれ！」

「あ、はい！」

二人で協力しながら窓を開けていくと段々と煙がなくなってくる。しかし、煙がなくなってくるとあることが気になった。この煙はどこから出ているのか、ということだ。

「もしかして……」

明久と蓮司の二人は互いに顔を合わせてトイレの方へ歩いていく。

「え……?」

「梓ちゃん、行ってみよう!」

「え、ちよつ!?」

二人はトイレに入ると近くに置かれている二匹のカメラのつかっている模型を動かす。

すると、壁が動いて小さなモニターのようなものが現れる。

蓮司がそのモニターに黒い携帯電話をかざすと、すぐ横に階段のようなものが現れた。

そこからうっすらと煙のようなものが上がってきている。

「やはり、ここからか……」

「となると、あの人の仕業だね?」

「……あの、この入口なんですか?」

「……隠し通路みたいでカッコイイね!梓ちゃん」

「とにかく、行くか。二人はここで……待っているわけがないよな。時間もなし、中で説明するからついてきてくれ」

「はい！」

二人は薄暗い通路のようなものを回転するかのようになりていく。歩きながら蓮司がここについて説明する。

「ここを作ったヤツの名前はジェル・スカリエツィ。俺達は親しみを込めてドクターとか、バカとか呼んでいるけどな」

「何気に悪口が入っているんですけど……」

「それくらい親しみやすいつてことかな？」

「どつという経緯であったのかはまた今度話すが、あいつは記憶が欠落しているらしくて自分がこの生まれで、どこに住んでいたのかとかそういうのを覚えていなくて、哀れに思ったおやつさんがここで生活していいと思ったら……」

「ここをこんな風に改造しちゃったんだよね、まあ僕らは便利だから気にしていないんだけど」

「さすがに色々な人に見つかるのはヤバイから、この事は隠している。二人も他言無用で頼む」

「はい」

少しして煙の元になっている部屋にたどり着く。

蓮司がドアを開けるとボワツと大量の煙が周りを包み込み。

少しして。

「よおし！ついに完成したぞ！今まで作った中での最高傑作だ！」

「おおおお！いままでマスターが作ってきたマシンを上回る可能性のあるエンジン！これを搭載したバイクがどのような進化をするのか楽しみだあ！」

部屋の中央にバイクのエンジンらしきものが置かれていて、それを囲む形で作業服に着替えた立花藤兵衛と白い服を身に纏い、紫色の髪をした外人が狂ったような表情を浮かべていた。

その男、ジェイル・スカリエッティに向かって蓮司と明久のダブルキックが炸裂する。

スカリエッティは声を発する間もなく壁に顔を叩きつけた。

「い、痛いじゃないか。明久君に蓮司君！」

「アホか！エンジン作るのにボヤ騒ぎ起こる寸前ってなんだよ！？てか、なんだよこの煙！」

「おやっさんもおやっさんだよ！エンジン開発してレースに出すのが夢なのはわかるけどさ！ボヤ騒ぎ起こして周りに迷惑かけた意味ないんですよ！それだけは自重してください！」

「す、すまん・・・嬉しくてつい」

そういつてにこやかに笑う藤兵衛が童心に返ったような表情をしていたので二人はこれ以上追求する事ができなかった。

「ところで蓮司君。そこの可愛いお嬢さんたちは誰だい？」

「は、始めまして！中野梓です！」

「平沢憂です。始めまして！」

「中々に礼儀正しい子達だね。私の名前はジェル・スカリエツィイ、そこからへんにいるような只のマッドサイエンティストならぬ科学者だ」

「ふざけるなそれと逆だろ？・・・それより、ドクター。バイクの調整終わってるか？」

「問題ないよ、格納庫に収納してある。これがその鍵だ」

「ありがとう！それじゃあ、中野さんと平沢さん行こうか？」

「お前ら急いでいるんだろう？この子達はわしに任せていってこい」  
「！」

「「はい！」」

二人は頷いて外に出て行く。

「あの・・・なんで、こんな所作ったんですか？」

梓が周りの機械類を見ながら尋ねる。

何の機械がよくわからないがびこびこことか変な音を立てていたりといいたくはないが悪の秘密基地を連想してしまう。

「ん、私の趣味だよ」

スカリエッツィの言葉にその場にいた二人は寄寓にも同じことを思った。

この人は変人だと……。

765プロの事務所ではプロデューサーと秋月律子、そして765プロの事務員で今回の依頼人である音無小鳥がひそひそと話している。

「それで……本当にその吸血鬼をなんとかしてくれるんですよね？音無さん」

「だと思つんですよ・・・私も社長の命令で行ったんですけど・・・一応、こういう事件に対してベテランらしくて、今日二二にくる」となっているんですけど」

「まあ、社長の事だから信頼できると思うけど・・・」

プロデューサーを含め、三人はうんと唸った。

『お、男の人~~~~~~~~!!』

ドンガラガツシャーン、ギアアアアアアアアアという悲鳴がすぐ近くから聞こえてきた。

「・・・・・・・・あれって」

「雪歩だな・・・」

「後は聞かない声ね」

三人が気になつて事務所の外に出るとこの事務所のアイドルの一人萩原雪歩が顔を真つ青にして階段の方を見ている。

そこには一人の男の子の頬に殴られた痕跡がありぐったりとしていた。

「あ・・・・・・・・これはもしかして」

「お、男の人が階段を上がってきて、わ、わたしと目が合つて・・・あつあつ」

雪歩は顔を真つ青にしてそのまま座り込む。

萩原雪歩は諸々の理由により男の人が苦手で、プロデューサーに慣れるまでにかかなりの時間を有した。そして、男の人と触れそうになると顔を真っ青にして逃げるか、暴れるかという行動を起こす。

「おーい、明久、無事か？」

階段を上がってきたもう一人の男の子が尋ねる。

「う、うん、Fクラスの面々と比べると蚊に刺された程度だよ」

そういつてむくりと吉井明久が起き上がり微笑む。

「とりあえず・・・この上のフロアだよな？」

「うん、あ、どうも」

明久はこちらを見ている三人に気づいて会釈する。三人も会釈をしようとするが。

「あー！。目がくらくらする〜」

「あ」

「「「ぎゃああああああああああああああ」」」

額からプシュツと飛び出た赤い鮮血を見て上のフロアの三人は悲鳴を上げた。

「いやぁー、すみません。お見苦しい所をお見せして」

雪歩を音無小鳥に任せて律子とプロデューサーの二人が蓮司と明久と話をしていた。

「い、いえ・・・(血が出ていたのに傷口がすぐに塞がるなんてどうなっているの?)」

「それで、貴方達なら吸血鬼をなんとかできるんですよね?」

プロデューサーの言葉に蓮司が頷いてポケットの中から手帳を取り出す。

「あなた方の依頼してきた吸血鬼の存在についてはまだ目下の所調査中ですが、吸血鬼の被害にあった方にはいくつかの共通点があったことを連絡しておきます」

「共通点?」

「被害にあった女性の殆どがアイドルであったということ。年齢が十代前半〜後半。最後にあるオーディションを受けようとしていた事です」

「そのオーディションって、もしかして・・・」

「はい」

「僕達がわかつているのはいまのところこれだけです。それで」

「ねえねえ、兄ちゃん。この人達誰？」

「ねえねえ、誰？」

突如、二人の女の子がプロデューサーに抱きつくようになして尋ねる。

「貴方達、今大事な話しているんだから邪魔しない！」

律子が二人をたしなめようとするがきゃっははと笑って、双子の双海亜美と真美は逃げるように離れていく。

「……アイドルの皆さん達もやってきたみたいですから、この話はひとまず終わりにして俺達はそろそろ失礼します。邪魔したら悪いですし」

「あ、大丈夫です……というか、お二人にお願いがあるんですが」

「はい？」

「ウチのアイドルのボディガードをお願いします！」

律子の言葉に蓮司と明久は互いの顔を見てから、ひそひそと話し始める。

「（どうする？蓮司）」

「（一応、遠くから様子を伺うっていうスタンスを取ろうと思っていたが都合が良い。引き受けよう……ただし、色々と覚悟しろよ）」

「

」(そうだね)」

二人は頷いてから前を向いた。

「その話引き受けさせていただきます」

EPISODE 14 (後書き)

アンケートありがとうございます。

すごい勢いで千早が優位に立っています。次に美希ですね。

アイマスもOPが新しくなり、面白い事になってきていますね。

そして、今回登場！ジェイル・スカリエッティ。

わかっていると思いますが、当人です。レプリカとかクローンとかじゃないです。

これからアイドル達と絡み、事件を解決して行くことになると思います。

このままいくと千早がヒロインになるかもしれないなあ・・・このままで終わるかどうか。

次回も楽しみにしてください。

EPISODE 15 (前書)

今回？

「よし、全員揃ったな、大事な話がある」

「あのプロデューサー、後ろの黒服の方たち誰なんですか？」

如月千早が手を挙げてプロデューサーの後ろにいる黒服を着た二人を見て尋ねる。

黒服の二人はギャング系統の映画に出てきそうな白いラインがついている黒いスーツを着て、頭の上にはソフト帽、顔はサングラスで隠している、と思いつきりギャングとかそこらへんの人達に間違われそうだ。

「あ……、みんなに大事な話というのがこの二人の事で……その最近物騒になってきているので護衛として雇いました」

「それって、ボディガードですか？」

「……男の人……」

歌手になるための手段としてアイドルとなった如月千早が眉間に皺を寄せて二人を見ていた。

「本当に護衛として使えるのかしら……」

「プロデューサー！この人達、強いんですか！」

「え……ああ、それなりに」

水瀬伊織がぼつりと呟き、ずいっとボーイッシュな女の子、菊池真が身を乗り出して尋ねる。その後ろでは我那覇響が面白いものを見つけたような顔をしているといった中で。

「おい……」

黒服を身に纏った春風蓮司の低い声が辺りに響く。

明久は慌てて蓮司を押さえ込み、プロデューサーも何かを囁くような表情をしている。

「どうしたんでしょうかー？」

大家族の長女で元気一杯の女の子、高槻やよいが不思議そうな表情をしていた。

「とりあえず、今日は春香達の護衛をしてもらう……といっても、付き添いみたいなものだからそこまで気にしないでくれ。二人とも」

「あ、はい！」

そして、蓮司達はアイドルの護衛を始める事となった。

アイドルの護衛といっても、早々に何か事件が起きるわけがない。当然、明久と蓮司もアイドル達が発声練習やダンスのレッスンを受けている間はかなり暇な状況にあるわけで……。

「暇だね」

「そうだな……」

黒いスーツを身に纏ったまま、蓮司と明久は入口でぼんやりと立っている。

「どうせだから、事件の情報整理でもする？」

「そうだな……事件が発生したのは今から一ヶ月前、襲撃場所、被害者達との接点などほとんど事件に関連性がみられるものはひとつも見つからなかったため、警察はこれが連続性のあるものだと判断していなかった」

「関連性がひとつも見つからなかったの？」

「それが……少しおかしくてな。警察のデータベースにハッキングしてわかったことなんだが、被害者の職業がどれも“本来あるはず”の情報と異なる情報に書き換えられていた」

「それって……誰かがハッキングしたってこと？それとも情報を仕入れてきた警官がウソをいったの？」

「そこまではゼロワンもわからなかった……だが、少し用心したほうがいいかもしれない。さて、そろそろ彼女達がオーディションに移動する事になるから、この話はひとまず終わりだ」

「そうだねー」

レッスンが終わり、アイドル達を車に乗せて次の場所へ向かおうとした蓮司は視界の隅にちらりと何かが見えた。

「……………」

何だ？と思って蓮司が見ようとしたら体に衝撃が襲いかかってきて壁に叩きつけられる。

叩きつけられた後、すぐ近くのゴミ箱の中に倒れ込む。

「春風君!？」

運転席にいたプロデューサーが驚いた表情をして外に出ようとするのを明久が止めた。

「このまま向かってください」

「でも……………」

「彼女達を危険にさらすわけにはいきませんから！蓮司！」

「無事だ……………明久、先に行け」

ゴミ箱を蹴散らすようにして蓮司がゆっくりと起き上がる。額を手で隠して指の間から覗く目が敵を見据えていた。

「うん……………プロデューサーさん、出してください！」

「あ……………ああ！」

車が去っていたのを確認して蓮司はゆっくりと手を顔からどける。手を離れたことにより地面に赤い液体がぼたぼたと落ちていく。押さえ込んでいた液体がつーと蓮司の顔を流れている。

先ほどの衝撃の時に額を少し切ってしまった。  
血が流れているのに蓮司は気にすることなく電柱の上にいる敵を見据える。

「降りて来いよ」

蓮司が呟くと目の前に下りてくる。  
灰色の姿にコウモリのような羽に口元から覗く白い牙、腹部には黄色いコアのようなものがついていた。

『これハ警告だ』

どこか壊れたようなラジオのような声で目の前のドーパントが呟く。

「これが警告だ？寝言は寝てからいえよ」

不適に微笑み蓮司はポケットからアドベントデッキを取り出して構える。デッキから青いスパークが発生してVバツクルが形成された。

『これ以上、邪魔すルならイノチハナイ』

ドーパントはがばつと口を開ける。

「遅えよ」

『KAMENRIDER!』

ドーパントが口を開けるよりも早くにアドベントデッキをバツクルにセットしてウィングナイトに変身すると同時に横に飛ぶ。

標的を見失った衝撃波は背後にあった壁にぼつかりと穴を空ける。

ウィングナイトは間合いを詰めてドーパントをベントラの中に引きずり込む。

「いわゆるホームグラウンドへようこそ！」

普通の人間はベントラに入る事はできない。

通れる事ができるのはデッキを持った人間とモンスターに捕まった者だけ。

しかし、どういわけかドーパントとなった人間はベントラを歩き来する事ができる。

その事実は最近知ったが、今の理由は謎だ。

ドーパントは口から衝撃波のようなものを乱射してくる。

咄嗟に近くの建物の陰に隠れた。

衝撃波は街の至るモノを破壊する。

窓ガラス、電柱、近くに止まっている乗用車。

誰も人がいないベントラだからいいものの、もし、人がいたら大惨事だ。

そんなことを思いつつウィングナイトはブラックバイザーを引き抜いてドーパントへ切りかかる。

ドーパントは白い腕で攻撃を防ぐが畳み掛けるように繰り返されていくウィングナイトの攻撃を対応しきれず次第に押され始めた。

「何が目的かは知らないが、これで」

デッキからアドベントカードを抜いて敵を倒そうとした時。

『SHOOTVENT』

「なっ……ぐおっ！」

背後から強烈な一撃を受けてウィングナイトは地面に倒れ込む。ダメージを背中に受けながらゆっくりと起き上がる。そこには大型のランチャーを両手に持った機械的な仮面やアーマーを装着した緑色の仮面ライダー。

「……仮面ライダートルクか……」

トルクはギガランチャーをこちらに向けて再び攻撃を仕掛けた。

「ちっ！」

飛んできた砲弾を避けるとドーパントから攻撃を受けて地面に後ろに倒れ込む。

「二対一か……」

少しふらつきながらもウィングナイトは武器を構える。

すると、目の前でおかしなことが起きた。

トルクが自身の武器を今度はドーパントへ向けているのだ。

ドーパントは口から衝撃波を出そうとするが、させまいと次々とランチャーの弾丸を放っていく。

自身が不利と判断したのか、ドーパントは近くの鏡に逃げ込んだ。

「くそっ……」

ウィングナイトはふらつきながら後を追いかける。

トルクはウィングナイトに武器を構えようとしたが、それより早くウィングナイトが鏡の中に入られたのでトルクは自身の武器をぱいっと投げ捨てた。

変身を解除して春風蓮司は壁にも垂れ込む。  
額の傷の出血が思った以上に酷い。頭がぐらぐらする。

「くそっ……」

そんな彼の前にゼロワンがゆっくりと歩いてきた。

『バディ、大丈夫か？』

「ああ……少し休めばなんとかなる……それより明久達の様子はどうだ？」

『さきほどから逐一チェックしているが今のところ、無事次の収録現場にたどり着いたようだ……しかし、本当に大丈夫なのか？』

「ああ……だから気にしないでくれ」

蓮司はゆっくりと起き上がって近くに停車させてあるバイクに乗って目的地へ走り出す。

その頃、アイドル達は765プロの事務所で明久に問い詰めていた。

「あ、あの！さっきのあの怪物ってなんなんですか!？」

「コウモリみたいな姿をしていて怖かったよ」

「いいなあ、自分も見てみたかった」

「怪物とは……恐ろしい」

「みんな無事でよかつたわ」

「説明してください。ボディガードさん」

事務所にいた人と先ほどの光景を見ていたアイドル達が詰め寄る。

「あ、あれは映画の撮影で・・・」

「そうなんですか・・・？でも、もう片方のボディガードの人本当に吹っ飛んでいませんでした？」

「え・・・いや、そうだけど？」

「ええっ！？本当に吹っ飛んでいたならかなり大怪我しているんじゃないですか！？」

あ、しまった。と明久が気づいた時にはまたアイドルに周囲を囲まれていた。

困ったなーと焦っているとポケットの中の携帯が振動している。

「あ、じ、実はね！あれは映画の撮影でちゃんとぶつかる場所も計算されていて当人は怪我をしていないんだ！」

「本当なんですか？」

まだ信じていないのか如月千早が疑った目で明久を見る。

証拠のために明久は携帯のメールに添付されていた画像を見せた。

そこにはスカリエッティとゼロワンによって合成という合成が施された画像が始まる。

流れた映像を見てアイドル達は納得したような表情をして離れていく。

よかった、信じてくれた。と明久は安心する。

しかし、如月千早だけ、何か考えるような素振りをして明久を見ていた。

事務所のビルの外にいた明久はこっちへ停車してきた一台のバイクに気づく。

春風蓮司はゆっくりとバイクから下りて明久の方へ向かう。

「蓮司！大丈夫？」

「……ああ、少しふらふらするけどな……それより彼女達は？」

「あ、うん。撮影のスタントを頼まれたってウソを……。それとゼロワンが送ってくれた映像のおかげで信じてくれたよ」

バイクに乗ったときに、あの怪物とのやりとりを演技だと、アイドル達に余計な不安を煽らせないようにゼロワンに頼んでシーカーで戦いを撮影してもらい誤魔化した。

「そうか……よし、俺達は帰る」

「あ、プロデューサーさんが聞きたい事があるから事務所の屋上に来てもらえないかって……」

「わかった」

二人は階段を上がって屋上へ向かう。

「やあ、待っていたよ、春風君。怪我のほうは大丈夫かい？」

「はい・・・少し痛いですけど」

ここに来る途中で知り合いの医者の方に足を運んで蓮司は応急処置を施してもらった。

一日安静しないといけないが、歩くくらいは問題ないらしい。

「あかさ・・・あの怪物って」

「おそらく今までの被害者を襲っていた吸血鬼・・・」

「そうか・・・あんなのが本当にいたなんて・・・」

プロデューサーはあの時の出来事を思い出したのかぶるつと体が震えている。

蓮司はそれに関しては何も言わず気になっていた事を聞くことにした。

「一つ聞きたいんですけど、あなた方が受けようとしているオーディションの内容はどんなものなんですか？調べてみても企業秘密とかで情報がほとんど開示されていないんですけど」

プロデューサーは少し記憶を思い出すような素振りをしてから。

「確か・・・怪物に狙われるヒロインを募集するものだった」

「オーディションを受ける中に有力候補っているんですか？それとそのオーディションってこれから有名な映画になるとか」

「いいや、その企画自体、金の節約を徹底しているみたいだからマ이너な映画になるらしい」

「マイナーな映画をつくるって……変わった会社？もあるんだね」

「とにかく、オーディション当日までアイドル達は護衛した方がよさそうだな……仕方ない。あれを使うか」

蓮司はポケットからゼロワンを取り出してコールする。

『私だ、どうかしたかい？』

「悪いんだが、今からいう子の護衛のためにメモリガジェットを用意して欲しい」

『そういうと思って、既にそっちにガジェットを送ってあるよ。そろそろつくころじゃないかな？』

スカリエッティの言葉どおり、こちらに向かって独特の機械音を鳴らしてバットショット、スタックフォン、スパイダーシヨック、デندنセンサー、フロッグポッド、ビートルフォンといった多数のメモリガジェット達が二人のところへ飛んでくる。

薄暗い中仮面ライダートルクの前に一人の仮面ライダーが現れる。  
全身が黄緑色の姿をしていて仮面の部分がどこかカメレオンと大変  
酷似している仮面ライダー。

「キミが仮面ライダーキヤモか？」

「・・・そうだ」

キヤモは頷いた後、二人の前にひとりの青年がやってくる。  
その後ろにはインサイザーの姿もあった。

「やあ、様々な目的により選ばれた仮面ライダー諸君、ようこそ」

「挨拶はいい、何のようだよ？」

インサイザーがどこか苛々した声で尋ねる。

彼は名前も告げない相手にここまでつれて来させられて、しかもいきなり変身するとわけのわからないことばかりいわれてかなり頭にきていた。

「そうだねー、では本題に入るよ」

青年は口元を三日月のように歪ませて語りだす。

「キミ達の目的を達成するのに邪魔なウィングナイトを排除するというチームを結成しよう」

「チーム？彼を倒すのに多数で挑むというのか？」

「そうだよ、実際、キミら単独で勝てるほど、ウィングナイトは弱くない。それは理解しているんじゃないかい？インサイザー君」

「ぐっ・・・」

「あのライダーが強いというのはわかるけれど、何故徒党を組む必要があるんだい？ここにいる者達はそれぞれの目的のために動いている。数はこちらが多いが獲物は一人。最終的に誰が倒すかでもめる可能性がある」

「そうだね、トルク君のいう事は一理ある。しかしね、これはキミ達にとって喜ぶべきチャンスなんだ。キミ達がウィングナイトを倒せば目的の願いをかなえてあげるよ？誰が倒したかを問わずに・・・ね」

その途端、仮面の中に隠れて表情が見えないが全員の表情が変わっ

たことに青年は心の中で笑う。

一人の人間を倒すだけで目的が叶う、しかも誰かが倒したかを問わないとあれば徒党を組んだ方が断然有利なのは事実。

「・・・やる」

キヤモは一步前に入る。

トルクも同じ考えなのか何も言わずに前に出た。  
しかし、インサイザーだけが動けずにいた。

「（くそっ、なんで一步前に踏み出せない！？）」

少し前のインサイザーなら気にすることなく前に踏み出していた。  
しかし、ウインググナイトの正体が誰なのか、吉井明久との殴り合いによりインサイザーの中で何かが起こっていて、それが彼に一步を踏み出す事を溜めらわせている。

それに気づいた青年はにこりと微笑み。

「インサイザー君は保留にするみたいだね。さて、二人には後日指令を出すからちゃんと動いてね。それとインサイザー君は早めに返事を出してね。敵になりそうなものは必ず排除するから」

それだけいって青年は背を向けて去っていく。

他のライダー達も何も言わずにその場所から離れていく中、インサイザーだけは拳を握り締めたまま立っていた。

「くそおおおおおおおおおおおおおおおおおおおー！」

## EPISODE 15 (後書き)

アイマスのヒロイン……とりあえず千早になりそうですね。  
報告が二つ。

ゆっくりですが、蓮司と明久の出会い、いわゆるEPISODE  
の執筆を行なっています。これは新訳本編に載せるか短編にのせる  
かのどちらかにしようと思うのですが、どちらがよろしいと思いま  
す？ 僕的には短編にしてしまおうかなあって、かなりの文字  
数になりますけどね。

### 二つ目

実は最近、真剣で私に恋しなさいとウルトラマンネクサスのクロス  
オーバーがずっと頭の中に浮かんでいて離れてくれません。始まり  
すら上手くかけていないのに。

誰かかこうとか考える人いらないかなあ？

EPISODE 16 (前書き)

あれですね、雪歩はやはり真君と一緒にがお似合いということとで。

『オーディションについての情報だが、私じゃなくて、キミの師匠に頼った方がいいのではないかね?』

「師匠に頼るのはこぞつて、時にしたいんだよ・・・、それに師匠の街は“こつち”よりも事件がハードだからな、絶えず忙しいだろうからあまり頼らないようにしたいっていうのが本音かもな・・・」

蓮司は電話の向こうにいるスカリエッティと話し込んでいた。

『成る程・・・キミ達らしいね・・・それでは調べていた情報だけど、キミ達が護衛していた765プロからオーディションに参加するアイドルは四人、一人は天海春香、如月千早、星井美希、萩原雪歩だ』

「そうか・・・企画側のほうは何かわかったか?」

『それがね・・・なんとというか、企画の方に変わった人が一人いるんだよ』

「・・・どういう意味?」

隣で電話を聞いていた明久が尋ねる。

『この作品の原案を考えている人みたいなんだけどね・・・』

うも、アイドルを指定してはその人に熱烈指導をするらしいんだよ』

「「熱烈指導？」」

二人が同時に尋ねる。

「って……どんな指導をするの!？」

「明久、落ち着け・何を想像したのか知らないが鼻血が出てきている」

『残念ながら明久君が考えているような事とは違うよ。いや、そっちの方がよかったのかな？アイドルをその作品の中のキャラに当てはめられるように様々な指導をするらしい。BWHのサイズから髪の毛の長さ、一番酷い場合にはプチ整形すらさせようとするらしい』

「おいおい……よくそれで問題にならないな」

『上が必死に隠しているみたいだね、被害にあったアイドルには慰謝料を秘密裏に支払っているらしい』

「やめさせたらいいのに」

『上の一部でそういう意見もあったみたいなんだけどね。一部のスポンサーが彼女以外に優秀な人材がいるか？という声があがってね、止めさせたら会社自体が潰れてしまう。世間というのは本当にやりづらいものだね』

「そういうものだとしても……」

「許せるような事じゃないな」

蓮司と明久は互いに頷いて事務所に向かって歩いていく。

ドーパントは薄暗い空間の中で不適に笑っていた。

もうすぐ……もうすぐだ……。

目の前にある壁には数枚の写真と書類らしきものが乱雑している。

その中にはオーディションを受けるであろう沢山のアイドルの情報が広がっていた。

ドーパントは笑いながら写真を見つめたり、書類を見てはまた不気味に笑っている。

「どうですか？その力は」

声のするほうに視線を向けると、そこには一人の青年が立っていた。

『サイコウだヨ！チカラがドンドンミナギツテくる！ワタシのシタイことをコンナニモデキル！』

「それはよかった、その力を提供した甲斐がありました……」

青年はにやりと笑うとその場から溶け込むようにして消える。

「ボデイガードさん！今日もよろしくお願いします」

「あ、よろしくお願いします・・・えっと、天海春香さんだよね？」

「これは？」

翌朝、765プロの事務所に足を踏み入れると手に箱を持った天海春香が出迎える。

明久は少し戸惑い、蓮司は目の前に差し出された箱を見て尋ねた。

「あ、私がつつたんですけど、よかつたらいいかがですか？」

箱の中にはクッキーが入っていた。

「あ、いただきます！」

「いただきます・・・」

二人はクッキーをひとつつまみして、口の中に放り込む。

「ん！おいしいよ！天海さん！」

「そうですか！ありがとうございます……えっと……」

「あ、吉井明久です。高二だけど、よろしく」

「あ、はい！えっと……おいしくありませんでしたか？」

天海春香はクッキーを食べた後、呆然とクッキーを見ている蓮司を見ておそろおそろ尋ねる。

「春香、どうしたの？」

菊池真がこっちへやってきて春香に尋ねる。

「あ……？」

「おいしい」

「え？」

蓮司は小さく呟いた後、さらにクッキーを一個、二個と手に掴んで食べる。

突然の行動に真と春香は呆然とした。

さらに、その様子を見ていた如月千早もやってくる。

「ねえ、その人どうしたの？」

「あ、気にしないで、蓮司はおいしいものを食べると時々こうなっちゃうから」

「それって、春香のクッキーがおいしかったことだよな？」

「え、あ、そうか！」

明久はお茶を手に持ってこっちの様子を伺っている萩原雪歩に気づく。

雪歩はびくっ！と体を震わせて顔を青くするが、明久は一定の距離を置いて持っていた湯のみを彼女に触れないようにして手に取る。

「ありがとう」

「え・・・あ・・・うん」

てつきり心配されると思っていた雪歩は意外そうな顔をして明久は微笑みながら湯のみに入っていたお茶を飲む。

蓮司はまだクッキーをおいしそうに食べていた。

クッキーを食べている事に気づいた我那覇響と乱闘するかのようクッキーの取り合いを始めていた。

それを四条貴音は「面白そうですね」といつて眺めているし、三浦あずささんに至っては「若いっていいわね」と声を漏らしている。

いつの間にか打ち解けていないか？とプロデューサーは気づいた。

そして、目的のオーディションがやってくる。

待合室で天海春香、星井美希、如月千早、萩原雪歩、その他に数人のアイドルが待機している外で春風蓮司と吉井明久が近くのソファに座っていた。

さつきから順番で企画側の人達に呼ばれて応答をされていたが、その内容というのがいささか偏っていた。企画側のプロデューサーは形式的な質問をするだけで、七割ぐらいが原案の女性が質問を繰り返している。

「好きな食べ物は何にか？」

「特技は何にか？」

「BWHはどのくらいか？」

「着ている下着を見せなさい」この時点で蓮司と明久は色々と危機感を感じてその空間から脱出した。

そして現在、二人は外にあるソファに座っている。もちろんただ座っているわけではない。周囲にドーパントがいないかメモリガジェットを周囲に展開させてある。

「ドーパント変なことをすると思う？」

「かなり毒されていたら・・・予測できないな」

ドーパントになった者は超人的な力を手に入れる事ができるがその代償みたいなものとしてガイアメモリの毒素に体を犯されていく。中には例外として毒素を体外から排出して毒素に耐えうる人間も存在するらしいが大抵の人間が毒素によって狂う。

毒素によって犯されたものは暴走して何をしでかすのかわからない。

「だから最低限の処置はやっておいた。後は敵がどうでる・・・」  
どう出るかといおうとしたところでいきなり頭上の電気が消えた。  
辺りから動揺したような声が聞こえてくる中、蓮司と明久が立ち上がる。

「仕掛けてきたみたいだな。明久は彼女達の方へ、俺は停電の原因を確認しに行く！」

「うん！任せて！」

明久と別れて蓮司は走り出す。

蓮司は薄暗い電気設備が置かれている場所へたどり着く。  
薄暗い中ペンライトを使ってゆっくりと探す。

「っ・・・っ」

ポケットの中から黒い携帯を取り出して電話をする。

「明久・・・ドーパントの仕業だ、警戒してくれ。俺もすぐに・・・」

戻るといおうとしたところで頭痛のような音が聞こえてきた。

「悪い、戻れなくなった。任せたぞ」

蓮司は壊れた機械に背を向けてポケットからアドベントデッキを取り出す。

『KAMEN RIDER!』

形成されたVバックルにアドベントデッキを入れてウイングナイトへ変身する。

ウイングナイトはブラックバイザーを引き抜いてベントラへと突入した。

ベントラへ入り込むと逃げようとしているカメレオンのモンスター、バイオグリーザの姿が見える。

「待て！」

ウイングナイトが後を追いかけてようとすると、近くの壁に光弾がぶつかった。

振り返ると、マグナバイザーを構えたトルクの姿がある。

「お前……」

「キミには悪いが、目的のために消えてもらう」

「はっ」

放たれる光弾をウイングナイトは転がるようにして避けていき、トルクへと接近していく。

トルクは接近させまいとマグナバイザーの光弾を連射するが、ウイングナイトはブラックバイザーで受け止めたりしながら間合いを詰めて拳をトルクへ叩き込もうとする。

トルクは攻撃が避けられない、と思っていたが横から手が乱入する形でウイングナイトの拳をつかんだ。

「・・・ぐっ！」

もう片方の拳でウィングナイトの腹部に叩き込む。  
ウィングナイトは仰け反りながらも大きく距離を置く。

いつの間に現れたのかトルクの傍に黄緑色の仮面ライダーが立っていた。

全身がカメレオンに酷似していて、腹部のアドベントデッキもカメレオンを模した紋章。

「仮面ライダーキヤモ・・・か」

「・・・倒すぞ」

「ああ」

キヤモの言葉にトルクは頷いてアドベントカードをバイザーにベントインする。

『SHOOTVENT』

トルクの肩に巨大なギガキヤノンが装備される。

装備されると同時に二つの砲弾が飛んできた。

ウィングナイトは飛んでくる砲弾を前にして大きく前に踏み出す。

爆風に煽られながらウィングナイトは二人の前に飛び出した。

『SWORDVENT』

ウィングランスを構えて二人の間を裂くように攻撃を振るう。

二人は横にとびウィングナイトを包囲するように動く。

ウィングランスを構えてすぐに攻撃できるように構えるウィングナ

イトに対して最初に動いたのはキヤモだった。  
キヤモは自身が得意としている俊敏性を生かしてスピードで翻弄するかのよう動いて拳を繰り出してくる。  
繰り出された拳を右へ左へと受け流しながらカウンターを叩き込む。仰け反ったキヤモにウィングランスを突き出す。

「ぐわっ！」

突き出されたウィングランスをキヤモはよける事が出来ず攻撃を受けて壁に体を叩きつける。

「っ、このー！」

「させるか」

こちらへ砲弾を放とうとしているトルクにはウィングランスを投擲するように投げた。

ウィングランスが体にぶつかり、トルクの攻撃は大きく外れる。ブラックバイザーを引き抜いてそのままトルクへ切りかかるうとした。

「があああああ！」

しかし、真上から何かが振り下ろされ、ウィングナイトの体から火花が散る。

「なっ……」

いつの間にかカードをいれたのかわからないがキヤモのアドベンティブ

「スト、バイオグリーザがウィングナイトの額に拳を叩き込んだのだ。」

仰け反ったウィングナイトに起き上がったキャモが拳のラッシュを叩き込み、キャモが離れると同時にトルクのギガキャノンが火を噴いてウィングナイトの体に命中する。

バチバチと火花を散らしてウィングナイトは近くの機材の上に倒れ込む。

倒れたウィングナイトを囲むようにしてトルク、キャモ、バイオグリーザが囲むようにしてゆっくりと近づいてくる。

「く……く……」

「これまでだ」

「……これで」

二人のライダーはアドベントデッキから一枚のカードを引き抜き、各々のバイザーにベントインしようとした。

『グオオオオオオオオ！』

しかし、そんな彼らを蹴散らすように一体のアドベントビーストが割り込んでなぎ払う。

「なあ!?!」

「ぐおっ!?!」

「!?!」

アドベントビーストに驚いている間にウィングナイトはふらふらと起き上がる。

「っ！逃がすか！」

トルクが銃口を向けようとするがそれよりも早くウィングナイトがカードをベントインする。

『NASTYVENT』

ブラックウィングが現れて二人と一体にソニックムーブを放つ。あまりの音に二人は耳を押さえ込む。バイオグリーザは平気な様子を見せるが、ボルキヤンサーに殴り飛ばされた。その間にウィングナイトはそこから逃げる。

吉井明久は停電の中、何かがかつちに近づいてくる事に気づいた。

「（何かが……くる！）」

身構えていると、壁を壊して何かが入ってくる。

「危ない！」

明久は射線上にいた少女を抱きかかえるようにして横に突き飛ばす。

ごろごろと転がり何かが着地した。

『サあ、大人しく来て貰おう』

現れたドーパントは両手にカサブランカの花束を如月千早に向かって投げ飛ばした。

「えっ・・・!？」

驚いている如月に向かってドーパントは羽を広げて彼女に飛び掛る。

「やめろお!」

明久は起き上がってドーパントの腰にしがみつく。

ドーパントの軌道が変わって二人は近くの窓を壊して落ちていった。腰にしがみついていた明久は手を離して近くの車に落下する。

車のボンネットが凹み、明久は大きく咳き込む。

ドーパントは起き上がり明久に向けて殺気を放つ。

『邪魔すル奴は・・・皆殺しダ』

ドーパントは叫んで口を開く。

『KAMENRIER!』

デッキを前にかざして叫ぶ。

攻撃が当たる直前に赤い円形のスパークが発生して攻撃が阻まれて辺りへ拡散する。

「振り切るぜ!」



「アア」

ドーパントがぱっと口を開けるが、その口に向かってトルクがマグナバイザーの銃口を突きつけてトリガーを引く。

眼前で緑色の光弾が炸裂してドーパントはそのまま仰け反り、追い討ちをかけるようにしてトルクがキックとパンチを何度も叩き込んだ。

「これで終わらせる」

トルクはマグナバイザーにアドベントカードをベントインした。

『FINAL EVENT』

アドベントビースト、マグナギガがトルクの前に現れる。

トルクはマグナバイザーをマグナギガの背中中のジョイント部分に差し込む。

マグナギガの両手、胸部、両足の部分から武器という武器が姿を見せる。

マグナバイザーの引き金を引くとトルクの必殺技『エンド・オブ・ワールド』がドーパントを包み込む。

「うわっ!」

強烈な爆風にドラゴンナイトは後ろへ下がる。

少しして爆風が収まって小さなクレーターの中に一人の男が倒れていた。

「……あれ?」

ドラゴンナイトはクレーターの中心に倒れている男の方へ駆け寄っていく。

「男……?」

ドサツと近くで何かが座り込むような音がしてドラゴンナイトが顔を上げるとトルクの体がガタガタと震えていた。一体、どうしたんだ?と思っっていると。

「人間……人間だったのか?……僕は人間と知らずに撃ったのか?」

「え……ドーパントを知らない?」

ドラゴンナイトが不思議に思っているとトルクの体から緑色のスパークが走り変身が解除された。

「え!?!」

トルクの変身が解除された場所に立っていたのは明久が良く知る人物。

明久も変身を解除する。

そこには久保利光が座り込んでいた。

「久保君、キミが仮面ライダーだったんだね」

「吉井君……キミが、ドラゴンナイトだったのか?」

久保利光は愕然とした表情で明久を見ていた。だが、明久は気づいていなかった。

この間にも事態は進行しているという事に。

暗闇の中“P”のメモリを持った一人の人間が高らかに笑っていた。

「駒が使えなくなってしまったのは残念だけど、目当てのものが手に入ったからよしとするわ・・・」

人物は手の中で砕け散った“B”のメモリをゴミ箱に投げ捨てる。

ゴミ箱の近くにはソファアールがあり、そこに。

如月千早が眠っていた。

EPISODE 16 (後書き)

さてさて、アイドルマスター登場編、終わりが見えてきました。

さてと、お知らせが二つ？

前に真剣で私に恋しなさいとウルトラマンネクサスのクロスオーバーを考えていたのですが、ウルトラセブンに変更しました。理由は特になし。

仮面ライダーファイズのキャラクターデータみたいなのが出来上がりました。

見たい人はメッセージで送ってください。

但し、ネタバレ含むのでよく考えてください。

あと、最後にドラゴンナイトの方でアンケートです。

一応、なのはを話の設定として入れていますが、JS事件を入れるかどうか悩んでいます。

入れてしまうとファイズの話の時系列が一気に数年くらい飛ぶんですよね。

入れなかったらJS事件に入るまで？をファイズの方でかけるんですよ。

EPISODE 17 (前書き)

今回でアイマス編は終了となります。

最後にいいます。千早の性格が理解できていない!!!

春風蓮司が意識を取り戻すと心配そうにこちらを覗きこんでいる須藤星の表情があった。

「……………星……？」

「まだ起き上がらないでください」

起き上がるうとした蓮司を無理やり星は押し戻す。

顔を横にずらすと公園のベンチのようで、遠くからは楽しげに遊んでいる子どもの声が聞こえてくる。

「ここは……………あれ、俺は」

蓮司の記憶が正しければ仮面ライダーキャモ、仮面ライダートルクによる襲撃を受けて……………そこからの記憶が曖昧で思い出せない。

「レンがここで寝ていると連絡を受けたんです、それよりも一体、どうしたんですか、この傷！すぐに治療を施したから良かったものの、放置していたらとんでもないことになっていましたよ」

「別に、皮膚切ったくらいで」

「頭蓋骨に亀裂入っていたと聞いても同じ事がいえますか？」

「……………マジ？」

「マジです、大方つばでもつけておけば大丈夫とか思っていたみたいですね、さ、帰りますよ」

「いや、俺はまだやらないといけないことがあるから星だけ帰ってくれ」

そういつて蓮司はベンチから起き上がり去ろうとするが、その手を星が掴む。

「何ふざけたこといつているんですか、その怪我で動き回っていたら本当に倒れてしまいます、帰りますよ」

「だから、大丈夫だって」

「レンのいう事は聞きません。さあ、帰りますよ!」

有無を言わせぬ態度で星は蓮司を引っ張っていこうとする。しかし、蓮司はその手を払う。

「……先に帰っていてくれ。やらないといけないことがある。傷治してくれてありがとな」

「っ!？」

そういつて蓮司は駆け出す。星は慌てて後を追いかける。

蓮司が角を曲がり、少しして曲がると、そこに彼の姿はなかった。

もし、星がすぐ近くにあるミラーに目を向けたらそこには走り去っていく蓮司の姿が見えたかもしれないが、それに気づく事はない。

星はぎゅっと拳を握り締めた。

「…………レン…………」

吉井明久は久保利光と一緒にベントラから出てくる。

久保はドーパントが人間であった事がよほどショックなのか、今までに見た事がないくらい青ざめた表情をしていた。

「はい……」

明久は近くの自販機で買ってきたコーヒーを久保に渡す。

「あ、ありがとう……」

「久保君……………キミはどうして」

どこまでも弱々しい表情をしている久保に明久はゆっくりと尋ねる。

どうして、キミは仮面ライダーになったのかと、

「……守る力がほしかった」

「守る力？」

怪訝に思っていると、久保がゆっくりと語り始める。

数日前、弟が怪物に襲われた。怪我を負ってしまい、治るのにかなりの時間を有してしまうにはいたらなかった。

しかし、モンスターに対する恐怖でいろいろな事に怯えてしまう事が多くなってしまった。

あの時、自分がちゃんと弟を守っていればあんなことにはならなかった、その後悔している自分の前に男が現れる。

『守るための力がほしくないかい？』

男からトルクのデッキを貰い、久保はモンスターを倒し始める。

これ以上、弟のような被害者を増やさないために。

そんなある日、デッキをくれた男がある事実を告げる。

『キミの弟君に危害を加えた怪物を操っている存在がいる。その名前はウイングナイト。キミの願いを叶えるためにはウイングナイトを倒すしかない』

「それで、ウイングナイトを狙ったの？」

「ああ……他の仮面ライダーと協力して……だが、倒せなかった。やっと弟を救えると思っていたのに」

「……それは違うよ久保君」

「……違う。何が違うっていうんだ！ウイングナイトが元凶だと聞いた。その何が違うというんだ！」

「……久保君は騙されている。君にデツキを渡した人こそが、モンスターをけしかけている人だよ」

珍しく激昂した久保に明久が冷静に答える。

「ウイングナイトはみんなを守るために戦っている。キミと同じだよ。キミと同じで大切な人達が傷ついてほしくないから一人でも戦おうとする。だから、僕はなにがあっても一緒に戦うって決めた」

明久の纏う空気のようなものに何かを感じ取ったのか久保は黙り込む。

「久保君、お願いだからキミにデツキを渡した人の言葉だけじゃない。僕の話もちゃんと聞いてから判断してほしい」

明久はゆっくりと語りだす。

「……それじゃ、僕は行くね」

「………吉井君、僕はどうしたら」

「それを決めるのは僕じゃないよ。久保君だ。久保君自身が自分で考えてどうするか考えるんだ」

「……もしかしたら僕は敵になるかもしれない。それでもいいのかい？」

「久保君が決めた事なら僕は気にしないよ。敵として現れるなら僕はそれを全力で止めるよ」

微笑んで明久も駆け出した。

“もしかしたら敵になる”と言う言葉に明久は笑って答える。その言葉の意味がどれくらい重みを持っているのかわかっているのだろうか。

久保はそんなことを思いながら明久を見上げる。  
明久は背を向けて走り出した。

走っている明久の元に連絡がきた。  
相手はスカリエッティ。

「あれ、ドクター、どうしたの？」

『少し気になる情報が手に入ってね・・・一応、蓮司君にも伝えただが』

「お願いします」

話の内容を聞いて明久はさらに速度を上げる。

如月千早が目を開けると、そこは薄暗い部屋で人の生活感らしきものが感じられないそんな場所だった。

「JJJJ・・・JJJJ」

動こうとして全身が締め付けられるような痛みに襲われて下を見ると、自身の体がぐるぐるとロープで拘束されていた。

普通、ここでなら悲鳴とか混乱したりするのだが、如月千早という少女は慌てることなく冷静になんとかしようとしてロープの状態を確認する。

「しっかり縛られていて動けない……ここどこなの？」

「お目覚めかしら？」

聞こえてきた声に顔を上げると、そこには一人の女性がいた。

スーツを着こなして働く女性というイメージを相手に与えそうな感じがするが、少し違う、と千早は否定する。

なぜなら、彼女の目は。

「あなたは……」

「私が誰かなんでどうでもいいのよ。さあ、これから貴方は一生私のものよ。私の描く作品のキャラとして一生を過ごしてもらっわ」

にやりと笑う女性の言葉を千早はどこか他人のような感覚で受けていた。

非日常なことだから？それとも周囲にあるマネキンがどこか自分に似ているからそんな感覚に支配されているのだろうか？それとも恐怖で感覚が？

「……誰？」

「ああ、申し訳ありません。お邪魔でしたか？」

暗闇の向こうから女性とは違う声が聞こえてくる。年齢は自分より上くらいなの。

「何か用かしら？」

「いえ、メモリをどうするか気になりましたね。このまま使用しますか？それとも僕に返しますか？」

「まだ使用させてもらっわ。これはまだまだ役に立つ」

「そうですか・・・では、くれぐれも注意してください（もう終わりだな。こいつも）」

声が聞こえなくなった途端、女性はゆっくりとこちらに近づいてくる。

「さあ、今からレッスンを始めましょうか」

「一ついいですか」

「なにかしら？」

「なんで・・・私なんですか？」

千早はさっきから気になっていた。

どうして自分が誘拐されたのだろう。自分よりも技術力や可愛い子などは大勢いたのに。その中からどうして自分だけが。

「そんなことを知る必要はないわ。あなたは私の言いつとおりだ」

「死んだ娘さんに似ているから誘拐したんですよね？」

「誰よ！」

女性が叫ぶと、ドアが開いて一人の人間が現れる。茶色のような癖のある髪。

2日ほど前から事務所にボディガードとしてやってきた同じ年くらいの男の子。

けれど、今目の前にいる彼は強い意志を秘めた目で女性を見ている。なんだか、とても頼り甲斐のありそうな。

「アンタ……どうやって……」

「死んだ娘さんはアイドルになってあなたの手助けをしてあげたい

と考えていたそうですね・・・でも、その子は事故にあって若くしてこの世からいなくなってしまった」

「・・・そうよ」

女性が小さく呟く。

「あの子はいなくなってしまった！でも、これさえあればあの子のような・・・あの子のようなアイドルをいくらでも作る事が」

「そんなことをして、あなたの娘さんが喜ぶと思っているんですか！？」

明久が真剣な表情で叫んだのを見て千早は驚いた。

今まで吉井明久という人物は千早が見ていた限り、怒るなんていうことはないと思っていた。しかし、目の前にいる吉井明久は本気で怒っている。

何に対してか、それは目の前にいる女性にだろう。まるで自分のことのように本気で怒っている。

「うるさい！あなたたちに関係ない！」

触れたくない部分を刺激されたのか女性は取り乱して懐からPと書かれたメモリを取り出す。

「そうか、それがあなたのメモリですか」

『PUPPETEER』

メモリをうなじに差し込んで女性はパペティアードーパントへ変身

する。

変身したパペティアドーパントの指から糸のようなものが複数飛び出して周囲にあった騎士甲冑、証書のような外見をしたマネキンといった様々な人の形をしたものが動きだす。その数10。

『土足で私の中に踏み込んだんだ。ただでは帰さない!』

「・・・奇遇ですね。僕も少し怒っているんですよ」

静かに、けれど、強い意志を秘めて明久は呟きポケットからアドベントデッキを取り出して構えようとする。

しかし、傍にいた騎士甲冑から振り下ろされた剣によりデッキが地面に落ちて千早の方へと転がっていく。

『何をするかわからないけど、やらせはしない!』

パペティアドーパントの手が動いて傍の人形達が一斉に襲い掛かってくる。

それに対して明久は攻撃をかいくぐって人形を蹴り飛ばしたりしてデッキへ近づこうとするが騎士甲冑が大きく拳を振るったがために後ろに叩きつけられた。

「ぐあっ!」

肺の中の空気が一気になくなり意識が飛びそうになるのを必死に堪えて明久はゆっくりと立ち上がる。

『あら、まだ立つの?』

「当然ですよ。僕は探偵であり仮面ライダーなんですから」

『わけわかんないこといってないで、さっさと』

「ボデイガードさん！」

人形達の間を潜り抜けるようにしてドラゴンナイトのアドベントデ  
ツキが明久のすぐ横に飛んでくる。  
投げたのは千早だった。

見ると彼女のロープは切れていた。

『一つ貸しだぞ、吉井明久』

千早の傍にはゼロワンが立っている。

「ありがとう。如月さん………ゼロワン」

明久は微笑んでアドベントデツキを構える。  
デツキから赤い光が発生して腹部からVバツクルが形成された。

『KAMEN RIDER!』

叫んでバツクルにいれ、明久はドラゴンナイトへ変身する。

「さあ、行くぜ！」

ドラゴンナイトは接近してくる人形を次々と蹴散らす。

人間の時は苦戦したが、仮面ライダーになると話は別だ。

繰り出される拳や剣を拳で壊していく。

攻撃を受けたマネキンや騎士甲冑は一撃を受けてバラバラになる。

「うりゃ！」

最後の人形を潰すと残りはドーパントだけになった。

「残りは貴方だけですよ」

『うるさい……うるさいうるさいうるさい……』

パペティアードーパントはクラリネットを取り出す。

クラリネットから見えない音撃破が周囲へ飛んでいく。  
そのうちのひとつが千早へと迫る。

「っ！」

恐怖に目をつぶる。

しかし。

「がつ！」

暖かい何かに包まれているような気がして千早が顔を上げるとドラゴンナイトの仮面があった。

「……大丈夫？」

「え……あ……はい」

戸惑う千早に背を向けてドラゴンナイトはデッキから一枚のアドベントカードを引き抜く。

「これで振り切るぜ！」

『FINALVENT』

『こんのおおおおおおおおおおおお！』

クラリネットから放つ音波攻撃を現れたドラグレッダーが受け止める。

千早にも当たるであろう衝撃もだ。

「うおおおおおおおおおおおおおお！」

ドラゴンライダーキックがパペティアードーパントを貫く。

着地すると同時にパペティアードーパントが爆発して、爆煙の中から一個のメモリが飛んでくる。それを掴み。

「絶望が……貴方のゴールです」

パキヤリとメモリを砕いた。

その頃、蓮司の前に須川が現れた。

「……春風、俺と戦え」

「……何故だ？」

「お前を倒せば俺の友達が帰ってくる！お前さえ……倒せばよお  
！」

「……」

デッキを突き出す須川に対して蓮司は無言でアドベントデッキを突き出して二人は同時にベントラに飛び込む。

『STRIKE EVENT』

「うおおおおお！」

インサイザーピッチをウィングナイトはブラックバイザーで受け止めてバイザーの柄をインサイザーの腹部に叩き込む。

「うぐっ！」

「どうした、この程度か？」

「なめんなあ！」

叫んだインサイザーはインサイザーピッチを乱暴に振る。滅茶苦茶でただ暴力に甘んじているような攻撃。

それに対してウィングナイトは冷静に動きを見切って攻撃を受け流

す。

「須川……何を迷っている？」

「あ……誰が迷ってなんか」

「お前の攻撃には何か複雑な感情が入り交ざっている」

「わかったような口癖だな！おい！！」

「感情の籠ったストレートな一撃を受けたことがあるからな、そういうのには敏感なんだよ。俺とあいつは」

「ウィングナイトのいう“あいつ”というのが誰なのかわかりインサイザーは仮面の中で不適に笑い。  
インサイザーピッチを振り下ろす。

「お前ら二人で他のライダーに勝てるのかよ！」

「勝てる勝てないじゃない。やるんだ！」

「どうしてそこまで動く！自分のことじゃない赤の他人のことだろ  
！」

「須川……お前は大勢の人の悲しみっていつのを見た事があるか  
？」

「あ……？」

「俺はある……目の前でなく大勢の人達を、その人達の涙を無

くす事ができない自分自身の無力さを」

そして、なによりその人達を作る原因となった自分を許せない。  
言葉が須川に届いたのかはわからない。けれど、ウイングナイト〃  
春風蓮司は伝える。

「俺は明久と誓った！なにがあっても大勢の人達を悲しませるような出来事を阻止する。大勢の敵が俺の前に立ちはだかつて叩き伏せる！ただ・・・それだけ」

ウイングナイトの言葉にインサイザーは自身の武器を振り下ろす。

「俺よりも強そうなライダーをそれだけで片付けるって、吉井以上のバカなんじゃないのか？」

「さあな」

「はっ・・・」

インサイザーは背を向けてそのまま去っていく。  
しかし、去り際に。

「俺は俺の好きにやらさせてもらう。お前らとつるむつもりはないからな」

それだけいって去っていった。  
だが、蓮司は変身を解除した須川がどこか生き生きしている表情を見ているのを見て喜んだ。

「無事、事件が解決してよかったね」

「そうだな。けれど、事件が終わって用済みの俺達に765プロさんは何の用事なんだろうな？」

事件から数日後、吉井明久と春風蓮司の二人は765プロへの道を歩いていた。

あの後、自宅に戻った蓮司は星からお説教を受け、明久は無茶をしたもんだ、と立花藤兵衛に呆れられてしまう。

色々不幸な出来事に巻き込まれた二人は突然の765プロの呼び出しに戸惑っている。

それでも、いくかと話し合って二人は765プロの事務所のドアを開けた。

「あ、ボディガードさん！いらっしやい！」

「待っていました！」

「あ、天海さん、こんにちは」

「こんにちは」

二人を出迎えたのは天海春香と菊池真で奥のソファーへと通される。そこには765プロの社長高木順二郎が待っていた。

「やあ、さすがAmigoのマスターが紹介してくれた探偵さんだ！助かったよ」

「あ……いえ」

「あの……それでご用件とは？」

「そのことなんだがね、まずは座りたまえ」

「はい……」

二人が座ると音無小鳥がコーヒーの入ったカップを差し出す。

「あ、どうも」

「いえいえ」

「それで話というのなんだが、時々でいいのだが、うちの専属ボディガードをやってももらえないだろうか」

「ぶっ！」

「せ、専属ボディガード!？」

「Amigoのマスターさんはオーケーをくれたんだけどね。キミ

達の返事を待つだけなんだ」

「ちょ、ちょっと待ってください!」

「こんな詳しく知らない人間を雇おうというんですか!？」

相手の申し出にさすがの蓮司と明久も戸惑ってしまう。

というか、周りにいる765プロのアイドル達は不安や困惑という表情を一切していない。それどころか、こちらが絶対にOKしてくれるという目をしている。

「詳細はマスターから色々と聞いているよ。今までどんな事件を扱っていたのかもね・・・それを聞いたからこそ、私はキミ達を雇いたいと思っているんだ。もちろん、ただでとはいわない。ちゃんとした報酬を」

「いらない」

高木社長の言葉を遮り、蓮司は喋る。  
続けて明久も。

「報酬なんていりませんよ。僕達は」

「報酬なんてもらう必要はありません・・・まあ、ボディガードはこっちの空いている時間でよろしかったら引き受けてもいいですよ」

蓮司がそういうと隠れて様子を伺っていたアイドル達がだーっと、蓮司と明久の周りを囲む。

それを見て、高木社長、プロデューサー、律子、小鳥の四人はにっ

こりと微笑んでいた。

## EPISODE 17 (後書き)

お知らせが一件。

執筆中のファイズにJS事件を組み込む事を決定しました。  
なぜかというと、そのほうが色々と面白くなりそうだなあーと思  
まして。

お知らせその2

明久のヒロイン云々についてはしばらく保留というか、考察するこ  
とにして、アイマスキャラがこの話に絡むようになっていくかと思  
います。

EPISODE 18 (前書き)

新しい話突入です！

秋山澪は自宅で春風蓮司と電話で会話をしていた。

というのも、メールでやりとりするよりも蓮司は電話で会話をするほうを好んでいるからだ。

「え……明日、蓮司は休みなのか!？」

『ああ、Fクラスは補習があるんだが、俺と明久は前日の試験の成績がよかったんでな、特別にお休みをもらえた』

「へえ、明日は何か予定があるのか？」

『午前中はないけど、午後からレースに向けての特訓かな?』

「じゃあ、午前中は暇なんだな!？」

『ん……ああ』

「だったら……」

澪は手元にある雑誌をちらりと一瞥した後。

「で、デートをしよう!」

『……お、おお』

春風蓮司はそれなりに豪華なマンションに住んでいる。

一介の高校生がなんでそんな所に住めるのかというと、彼は遺産を継いでいるからだ。

まあ、その話は置いておいて、

春風蓮司の朝は不規則だ。

というもの、彼は目覚ましを六時から七時の間に設定しているのだが、ある人物のせいでそれが無駄となっている。その理由が。

「レーーーーーン！腹減ったあ！」

「………光」

蓮司の腹の上に一人の女の子が座り込んでいた。

長い青い髪に人のものとは思えない赤い瞳、彼女の名前は須藤光。大切な家族の一人だ。

ただ、この子には問題があった。

「光、いつもいつているが目を覚ましたらみなりを整える事くらいはしてくれって……いつているだろう、それとどいてくれ」

蓮司の上に乗っかっている光は青いパジャマを着ているのだが、胸元から腹までのボタンが外れていて綺麗な素肌が見えている。

仲間であり親友の明久がみたら鼻血流すだろうな」と蓮司はどうでもいいことを考えながら起き上がる。

「おなかすいたよぉ〜」

「はいはい、ご飯作るから着替えてこい……自分の部屋でな」以前、最後の部分を付け足さなかったためにこの部屋で着替えられた事を思い出した蓮司は顔をしかめて部屋の外を出た。

「あ、レン。おはようございます!」

「おはよう、星」

キッチンには既に星が私服の上にエプロンを着た状態で朝食の準備をしていた。

蓮司もおいてあるエプロン（星達三人によるプレゼント）をつけてキッチンに立つ。

「はやいな」

「そうですか？私は普通だと思うのですが？」

「長時間勉強して四時間ほどくらいしか寝ていないのにか？」

「……知っていたんですか？」

「そりゃ、家族の事だからな」

「……」

蓮司と星はここ数日、まともに話をしていなかった。

というのも、蓮司が怪我をしていたのに病院にも行かず勝手にどこかへ向かってしまったからである。

その後、蓮司は謝罪したのだが、星は怒っていて許してくれたのかどうかわからない。

「おい……包丁コッチ向けて何する気だ？」

「……いえ、気の迷いです。気にしないでください」

そういつてサラダの盛り付けを始める星を見て、蓮司は皿を机の上においていく。

少しして着替えを済ませた光がやってくる……のだが。

「星、頼む」

「はい……光、髪が乱れていますよ」

「あ、ありがとー」

蓮司が食器を並び終わると一番最後に起きてくる夜がドアを開けてやってきた。

「むー、朝の食事が出来たのか」

「ああ……、まだ眠そうだな」

「うむ、体の調子もいまいちでな……やはり、一昨日食べた饅頭の影響が続いているのか……」

「それは、辛いな。まあ、星がちゃんと消化の良い食事作っているから美味しく食べる」

「当然だ、星の料理は天下一品だ」

「そうだな」

『あれー、星の顔。赤いよ？』

『そ、そんなことないですよ！』

朝食の時は騒がしかったり静かだったりする。

光が昨日どんなことがあったかを語り、一緒にいる事が多い夜が思い出して顔をしかめたり、アレは良かったなどと感想を漏らす。

「そういえば、召喚大会優勝したのって吉井君と坂本君でしたね」

「ああ、白金の腕輪を手に入れたな」

「くっ、腹を壊しさえしなければ・・・我々が優勝できたのに・・・」

「でもでも、学校がお休みっていいよね！今日どこか行こうよ」

「！」

「そうですね。夜は何か予定がありますか？」

「いや、ないな。レンは」

「悪い、用事がある」

ピキッと空間に亀裂が入る。

夜は持つている箸を強く握り締めて蓮司に尋ねた。

「その用事とは一体なんだ？我々より優先すべきことなのか？」

「お前たちと比較すると・・・同じくらいだとしかいいえないが、悪い。先約だからどうしても優先しないとイケない。なにより、午後からレースに向けての特訓がある」

「あ、そうでしたね」

「あ！ならば、特訓見に行ってもいいかな！？」

「ん、ああ。そうだな」

「やったー！」

嬉しそうに手を挙げる光。

光を見ながら星は微笑むが、蓮司は少し顔をしかめていた。

「おい、光」

「なーにー？」

「お前が手を挙げた拍子に持っていたバターが俺の顔についたんだが？」

蓮司はいつも着ている普段着の上に大切にしているソフト帽をかぶり、マンションを出る。

蓮司が向かったのはこの町で一番の規模を持つショッピングモールだ。

様々な雑貨や食材が揃っており、この町に住んでいる人達でここを利用しない人は少ない。

その後ろをちよろちよるとついてくる三つの姿があった。

「……怪しい」

「夜の言つとおりです。あんなにおめかししていくなんて」

「そうかなあ？」

上から夜、星、光の順番で彼女達は蓮司のあとをつけていた。

その頃、秋山澪の緊張は最高潮に達しようとしていた。

「（どうしよう・・・）」

漣は何度も何度もチェックした私服に何か問題がないかの確認をする。

一応、いっておくと、今の漣は周りの男達が見惚れるほど可愛い容姿をしていた。

「（もし、蓮司の趣味にあっていなかったら？もし、蓮司が似合っていないっていわれたらどうしよう・・・）」

「・・・・・・・・」

「（もし、私服が気に入らないからって帰ろうっていったらどうしよう、もしもしもし）」

たかが、その程度のことでは何を思っているのだろうと考えるかもしれない。

しかし、秋山漣と春風蓮司の間には数年間の決定的な溝があるのだ。片方は自分の意思というものを表に出すことなく隠して、相手の意思を拒絶していた。

片方は自分の意思を相手に伝えたけれど、その返事を一度拒絶に近い状態で答えてもらっていない。

それが数年間続いているのだ。不安に思うのは仕方ないだろう。

「漣さん？聞こえてるか？」

「れ、蓮司！？い、いつからきていたんだ！」

「数分前からだ。何度も呼んでいたのだが返事がなかった」

「そ、それはごめん！」

「いや、気にしなくていいよ？」

「そ、そうか・・・それよりも蓮司」

「なんだ？」

「わ、私の服・・・変じゃないか？」

「全然、綺麗でいいと思うけど？」

蓮司の発言に漣の顔が真っ赤になり、慌てだす。

その様子を見て遠くで悲鳴のようなものが聞こえてきたが二人は気にしない。

「そういえば、今日は何の買い物に来たんだ？」

「え・・・ああ・・・、大切にしていたマグカップが壊れたからそれを買おうと思って」

「そうか・・・でも、俺は漣の好みがわからないから役に立つかわからないぞ？」

「いや、大丈夫だ！蓮司なら信頼できる」

「わ、わかった・・・」

漣の勢いに戸惑いつつも蓮司は頷いて目的の店の方へと歩いていく。

吉井明久は不幸だった。

何がどう不幸なのかというと、Amigoで働いていると柄の悪い客がやってきて、お店にいちやもんをつけてきたので、追い払った時に携帯電話がポケットから落ちて踏まれてしまったのである。

「あ~~~~。どうしよう!？」

明久は真つ二つに壊れた携帯電話を見る。

すぐにお店に持っていけば交換してもらえるだろうけれど、困った事に今の明久にお金がない。

少し前に765プロの天海春香から電話が掛かってきて、オーディションの護衛についての打ち合わせがあつて電話をしていると、運悪くその会話を姫路瑞希と島田美波の二人に聞かれてしまって。理由を説明するためと“罰”といわれて、いきなりクレープをおごらされてしまい（姫路さんは少し申し訳なさそうな表情をしていたけれど）明久の財布はすつからかんに近い状態であつた。

「ん・・・どうしたんだい？明久君」

秘密の研究施設から出てきたスカリエッツィが明久の様子を見て尋ねる。

「実は・・・携帯電話が」

半分に壊れた携帯電話をスカリエッツィに見せた。

スカリエッツィは壊れた携帯を覗き込んで、ふむ。といって。

「それなら、フォンブレイバーに機種変更をするかい？」

「え……でも、フォンブレイバーって。まだ調整中なんじゃないの？」

スカリエッティによると、フォンブレイバーは彼が記憶を失った後に出会った師匠と呼べる人物によりデータを提供してもらい開発しているので、様々な部分で問題が生じたりと色々が悪戦苦闘しているらしい。

そのためか、フォンブレイバー第一号であるゼロワンの性格が少々歪んでいる。

『失礼な事を考えていないか？吉井明久』

「あれ……ゼロワン？蓮司と一緒にいるんじゃないの？」

『……聞くな。あんな空間に長居していると俺のAIが崩壊する』

よくわからないが、何かあったんだね。と明久は納得した後、スカリエッティの方を見る。

今話しても聞かれないとわかっていたスカリエッティは続きを言う。

「調整中だったフォンブレイバーの一機のAIの調整がようやく終わってね。ボディを見つけれただけなんだよ」

「でも、僕なんかに勤まるのかな？フォンブレイバーのボディなんて……」

「明久君。そこまで自分を卑下する必要はないよ。それにゼロワンは特殊だからね。まあ、キミのボディになるフォンブレイバー“セ

カンド”も、少し特殊ではあるけれどね

「へえ・・・」

「どうだい？セカンドのボディになってくれるかな？」

「やってみます。どこまでボディとして行動できるかわからないけど」

スカリエツティは微笑み、後で下に来てくれと行って戻っていく。

## EPISODE 18 (後書き)

2、3話ほど、短めの話になる予定なので、更新早くなる可能性があります。

そして、明久にとうとうフォンブレイバーが！

本来なら合宿編をいれてそこでケータイが壊れてからにしようと思つたのですが、オリジナル展開にしたほうが面白いなーと考えて、こういう展開にしました。

次回、須川のヒロイン(?)が現れるかも・・・！

あと、できたらポイント評価可能だったらしてもらいたいなー、変動ないと人気がないと思ってちょっとへこむので。

EPISODE 19 (前書き)

話短いですか・・・またすぐ投稿するつもりです。

「う〜ん、どっちがいいんだろう」

場所はショッピングモールの雑貨店、そこで漣は二つのカップを見て悩んでいる。

それを横で蓮司は眺めていた。

「漣の好みとしてはどっちなんだ？」

「ああ。この黒猫のマグカップは可愛いんだけど、こっちのひよこのカップも捨てがたいんだ」

漣は自身の前にあるカップを見ながら悩む。

「なら、両方買うというの？」

「手持ちが少ないんだ・・・」

「そうか・・・なら」

「あ」

蓮司は漣の手の中にあっただひよこのカップを手にとる。

「これは俺が買うから漣は猫のカップを買うといい。後でこれは俺がプレゼントするからさ」

「え……でも」

「気にするなよ。俺はこっちがいいと思うから買っつていっているんだ」

「……う、うん」

漣は少し複雑そうな表情をしつつ、了承する。

二人が会計を終えると時間は昼になりつつあった。

「悪い、そろそろ行かないと……」

「そういえば、昼までとっていたけど。蓮司は何かの競技でもしているのか？」

「ああ、モトクロスの大会が近いんだ」

「モトクロス？」

「バイクに乗って競い合うレースだ。その大会が近いのと、外国で知り合ったライバルが今回参加するみたいで負けるわけには行かないんだ」

「ライバル？」

「ああ、かなりの腕を持つレーサーだ」

蓮司はどこか懐かしむような表情をしているのを見て漣は少し興味を持っていた。

なにより、蓮司がやっているという競技に興味が出てくる。

「なあ、蓮司」

「ん？」

「わ、私もレースの見学に行ってもいいかな？」

「別にいいけど……俺の家族も来るぞ？」

「か、家族!？」

「ああ……といっても家族みたいな奴らだけど」

「そ、そうなんだ(びっくりした)」

漣は驚きつつ、蓮司の返事を待つ。

「来てもいいけど。つまらないぞ？」

「う、うん!」

その頃、茂みの向こうで星、夜の不機嫌は頂点に達しようとしていた。

「(何故、何故レンはあの塵芥に優しく接するといふのだ!?)」

「(あの人は、前に学園祭に来ていた人ですね……友達かなにかでしょうか?それにしても、レンはなんであんなに嬉しそうなんでしょうか……とても苛々します)」

「・・・おなかすいたなあ」

二人の少女が嫉妬という炎を燃やしている中で一人だけなんとも思っていない少女、それが光だ。

その頃、須川亮は特にする事がないので近くの公園のベンチでのんびりと昼寝を楽しみながら昼食を取る・・・はずだった。

「・・・・・・・・」

須川はこれまでにないくらいの不機嫌な表情をして目の前でこつちを真っ直ぐに見ている犬を睨んでいた。

「おい・・・・なにしゃがるてめえ」

須川の足元には彼が食べようとしていた昼ごはんのサンドイッチが地面に落ちてている。

このサンドイッチかなりの人気商品で朝から並ばないと買えないといわれている代物で、須川は苦労して並びようやく手に入れる事ができた。

そして、それを食べようとした所で犬が飛び掛ってきてサンドイッチが全部地面に落ちてしまったのである。

「おい、犬、人間の言葉を理解できるか知らないが、これがいくらすると思っている？そしてこれを買うのにどれだけの時間を費やすかわかっているか？」

犬は須川の言葉に何か反応を示すことなく、それどころか地面に落ちているサンドイッチを食べようと顔を近づけていく。

「なっ！？おいくら！」

それに慌てたのは須川だ。

食べたかったものを台無しにされた上、それを目の前で食べられてしまうなんていう惨めな事があってなるものか！

「俺のサンドイッチに手を出すなあ！」

食べようとしている犬の鼻を掴んでそのまま持ち上げようとする。  
キュイン！と犬が悲鳴を上げたその時。

「ナンクルナイサ~~~~~！！」

どこか地方の言葉らしきものが響いて少女の両足によるキックが須川の顔を打ち抜いた。  
須川は漫画のように宙を舞い地面に叩きつけられる。

「いぬ美い！心配したぞ！無事だったか！？」

蹴り飛ばした少女、我那覇響はいぬ美という犬に駆け寄った。  
いぬ美は地面に落ちているサンドイッチをぱくぱくと食べ始める。

「てんめえ！なにしゃがる！？」

顔を蹴り飛ばされて服が砂まみれになった須川が立ち上がり我那覇響のほうへ近づいていく。  
響は須川を睨む。

「自分は見えていたぞ！お前いぬ美をいじめようとしていたな！」

「誰がこんな犬をいじめるか、そもそもこの犬が俺の貴重な昼ごはんを台無しにしたのがそもそも始まりで！」

「いぬ美がそんなことするわけないだろ！あんたが何かしたんだ！」

「こんのお、人の話を聞け！」

「無理だ！自分が見た限り、あんたは悪い人の部類だ！」

その一言で須川の堪忍袋の尾がちぎれる。

「ふざけん！」

最後まで言う前に近くの鏡からモンスターが飛び出してくる。

「あぶねっ！」

須川は狙われていた響を抱きかかえるようにして地面に伏せた。

「なっ！自分から離れろお！」

響はいきなり自分に飛び掛ってきた須川から離れようともがく。須川はモンスターが鏡の中に入り込んだのを見てから響や弁当の事を無視して、近くの鏡に近づいた。

周りに誰もいない事を確認してからポケットからアドベントデッキを取り出す。

デッキからオレンジ色のスパークが発生して腹部にVバツクルを形成する。

『KAMENRIDER!』

叫んでバツクルにデッキを入れ、インサイザーに変身してベントラへ突入した。

モトクロス会場は自然といったものがほとんどない更地のようなものだった。

けれど、そこで繰り広げられているレースは白熱するようなものではないだろうか？と秋山漣はレーサーとして走っている蓮司を見て思っていた。

「カッコイイ……」

「そうでしょ！ミオはわかるから嬉しいよ！」

呟いた漣の言葉に反応したのは隣にいる光だ。

先刻、会場にやってきた漣と星、夜、光たちの三人は出会ったのだが、星と夜は漣に対して警戒心を滅茶苦茶出していて漣が親しく話せる事ができたのは始めから親しげな態度をとってくれた光だった。こういう時は星も親しげな態度をとるのだが、蓮司との喧嘩のせいですごくこのところに余裕がないようだ。

「あれ……あのバイクなんだろ？」

光は走っている蓮司の横に割り込む形で飛んできたバイクに疑問の表情をする。

「おそらく、挑戦者ですね」

星が呟く。

実際彼女の言うとおり割り込んできたレーザーは蓮司を追い越そうとしているかのような動きを何度もとっている。

「あんなことって、何度もあるの？」

「ううん。滅多にないよ。一回だけかなあ？」

「二回はあったぞ、光」

「あれ？そうだったかなあ？」

しかし、蓮司は相手の動きを予想しているようでその行く手を遮っていた。

それを繰り返している間にゴール地点にたどり着く。

「ふう……」

バイクを止めて蓮司はヘルメットを脱ぐ。

少し遅れて到着したライダーも同じようにヘルメットを脱いだ。

「おお！ロードニーじゃないか！」

タイムを計っていた立花藤兵衛は驚きの声を漏らす。

「お久しぶりです。タチバナさん、そしてレンジ」

「相変わらず凄い腕前だな」

バイクから下りて蓮司とロドニーの二人は握手をする。

この二人はアメリカで行なわれたモトクロスのレースで競い合った仲だ。

「あなたが着ているという事はあいつも来ているんだよね？」

蓮司が尋ねる“あいつ”というのは何度競い合っても決着のつくことがなかった相手。

「いや・・・あいつは参加しない・・・少し前にレーサーとしての資格を失った」

「・・・どういふことだ？」

ベントラ

「ぐおおっ!?!」

インサイザーは鋭い攻撃を受けて壁に叩きつけられる。

「くそつたれ!」

『中々腕が立つようだが、生憎私のほうが上だ!』

目の前にゆっくりと現れた鋼色の姿をした仮面ライダーがゆっくりと現れた。

左肩に赤い角のようなものがついていて、仮面の部分はサイを連想するかのような作りになっている。

「くっ!」

『STRIKEVENT』

インサイザーピッチを振り下ろして攻撃を仕掛けるが、新たな仮面ライダーはその攻撃をかわしてそのままインサイザーの背後に周り背中を蹴り飛ばす。

「ぐおおっ!」

受け身も取ることができずインサイザーは地面に転がり込む。

『このまま白熱した戦いをしたいと思っっている私がいる……残念だが悪いが私には時間がないのだ。ここで倒させてもらおう』

ベルトのデッキからアドベントカードを引き抜く。

それを見てインサイザーはなんとかしようとするが、体のダメージが大きくて動けない。

『SHOOTVENT』

『ぬぐっ！』

突如、砲弾が飛んできて敵が吹き飛んだ。

トルクは倒れているインサイザーをつれてその場所から撤退する。

『ちっ……逃げられたか……時間がないというのに……』

「将軍、新しいライダーを投入したようですね」

「うむ、仮面ライダートラスト。中々こっちに呼び寄せられること

ができなかったのだけれど、キミのおかげでなんとかなったよ」

「こっついう時のために私は行動しているのです。勿論、こっちの方もそろそろ動き出すけどね」

そういつて青年はにこりと微笑む。

青年を横目で見ながらゼイビアックスは人間の姿をとる。

「次の駒を投入する準備をしてくる。それまで他のライダーの監視は任せたまよ」

「仰せのままに」

ゼイビアックスがいなくなった後、青年は三日月のような笑みを浮かべて。

「私だ。時が来た。ゴッド野口に伝える」

「これが・・・フォンブレイバーセカンド」

地下の秘密研究室、その一室で明久はスカリエッティから二番目のフォンブレイバーを受け取る。  
ゼロワンが黒色に対してセカンドは金色。

「もう、起動しているの？」

「変形コード502を入力するんだ。そうすればセカンドは起動する」

「わかりました」

明久は緊張しながらセカンドの変形コードを入力する。  
ピロリロリという音と共にセカンドが起動して立ち上がった。

『・・・初めましてバディ、私の名前はセカンドよ』

「よろしくセカンド、僕の名前は吉井明久だよ」

『アキヒサね。登録したわ・・・これからよろしくね』

「うん！」

ここに新たなバディが誕生した。  
それをスカリエッティはどこか嬉しげに眺めている。

## EPISODE 19 (後書き)

響が須川と絡む事になりました。

アイマスのキャラの中でなんとというか、喧嘩するほど仲が良いみたいなキャラを考えていたら響きが浮かびました。伊織というのも考えたのですが、須川がロリコンになってしまう・・・。と思いません。



関係ない話ですけど、ゴジラ×メカゴジラ面白いですね。  
特生自衛隊出したいと思うほどに。

「悪かったな。久しぶりに再会したライバルに会えたのが嬉しくてつい話し込んでしまった」

ロドニーが去り、モトクロス用のバイクを押しながら蓮司は戻ってくる。

立花藤兵衛も少し遅れてやってくるが、目の前にいる星と夜の表情が不機嫌なため、関わったら絶対ろくでもない事になると思っても言わない。

「そうですね」

「うむ」

「……なんで二人は機嫌が悪いんだ？光」

「ううん、なんでかな？」

「私もわからない」

漣と光は首をかしげる。

そういえば、と星は気になる事があったので蓮司に尋ねた。

「先ほど、ロドニーというレーサーの方と話していたとき、誰かの名前が出ましたけど。その人も知り合いなんですか？」

「ああ。何度もレースでぶちかりあったんだけど、一度も決着がつくことのなかった相手が一人だけいるんだ」

「永遠のライバルというヤツか？中々に燃えるような相手だな」

「ああ・・・でも、今回のレースには参加しないらしいんだ」

「えっ！？なんでえ？」

「何か怪我でもしたとか？」

「いや・・・それが俺も詳しい話を聞こうと思ったんだが、教えてもらえなかった」

「そうなんだ・・・」

「気になるのか？蓮司」

夜が蓮司の顔を覗き込むようにして尋ねる。

実際の所蓮司は気になっていた。

あのだこまでも決着をつけることに炎を燃やしていた男がレースに出場しないという事に。

あの、自分と戦って勝つことを試練としていた男が。

「（一体、お前になにがあったんだ？ブラット）」

「はあ……はあ……はあ」

「大丈夫かい？」

トルク・久保利光は荒い息を吐いているインサイザー・須川亮に尋ねる。

「くそっ、このタイミングで新しいライダーってなんだよ……」

体に残るダメージにふらつきながら須川は久保と面と向かい合う。

「それにしても、どういう風の吹き回しだよ？お前が俺を助けるとは……しかも、Aクラスのあんたがトルクだったとは驚きだ」

「別に、キミも吉井君たちとの仲間だと聞いていたからね。倒されそうになったら助けるに決まっているよ」

「はっ……てめえもあいつらと関わって変化したクチか」

「そうだね……キミと同じだよ」

「はっ……」

須川と久保は互いに笑うしかなかった。

お互い、二人の人間によって目を覚まされたようなものなのだから。

「・・・似ている」

A T A S H I ジャーナルにおいてあるパソコンに届いたメールを見て佐伯風華は顔をしかめた。メールには画像が添付されていた。それをクリックして確認してみると、画像が荒く紅色の鎧らしきものを纏ったヒーローのようなものが映っている。

「（送り主はJTC・・・海外で有名なハッカーよね。確か・・・そんな人物がなんでこんなものをこんな会社に？しかも『こいつは空夢町という場所にいる。こいつを追え。こいつを追えば行方不明事件の真相をつかむ事ができるだろう』って言うメッセージまで・・・）」

佐伯風華は送り主に疑いを持ちながらもこの情報を確認するために空夢町に向かう事を決意する。

「（もしかしたらもう一度、仮面ライダーに会えるかもしれない）」  
数ヶ月前に佐伯風華はレッド・ミニオンに誘拐されてベントラへと連れていかれそうになった。  
その時、サングラスをかけた長身の男が自分を助けてくれたのである。

自分を助けた男『レン』は佐伯にすぐに逃げろといって鏡の中に突

入した。

その時から、どういわけか佐伯は鏡の向こうの戦いが見えるようになったのである。時々、その戦いらしきものが見えるのだが、カメラに収めようとチャレンジしたのだが不可能だった。それからというものの、佐伯はある都市伝説に遭遇した。

誰も知らないところで異形の姿で同じく異形の人々を襲う怪物から人々を守る存在『仮面ライダー』

仮面ライダーは決して素顔を人にさらすことなく表の舞台に出てくる事もなく。名誉も地位も欲さず人のため、正義のために戦うという。

もしかしたら自分を助けてくれたのもその仮面ライダーと関係するものではないかと調べていた。

そして、今回のJTCと名乗る人物によるメッセージ。何か関係があるかもしれない。

佐伯は大久保編集長に許可を得るためにデスクから立ち上がる。

EPISODE 21 (前書き)

たあ、今回

「ああ〜、重たいよ」

「そういうな。これも観察処分者としての仕事だから頑張るしかないだろ？俺も手伝っているんだからあまり文句いうな」

蓮司と明久はグラウンドに置かれている機材を屋上に運んでいた。

「にしても、この器材なんなんだろうね？」

「さあ？放送器材とかそういうものなんじゃないのか・・・というか、あの業者さん大丈夫か？ダイブふらついているぞ」

明久と蓮司の前を歩いている職員は階段を上がっているのだが、右へ左へとふらついていていつ、倒れるんじゃないだろうかという不安がある。

「っ！明久、あぶない！」

「わっ！」

蓮司は器材を咄嗟に投げ捨てて明久を抱きかかえるようにして階段に伏せる。

少しして大量の器材が階段から落ちてきた。

二人は無事に避けるが運悪く。

「きゃあっ!」

階段を上っていた一人の女子生徒はそれに気づいたのが遅くよける事ができない。

「しまっ!」

「危ない!」

蓮司達が間に合わず女子生徒が器材で怪我を負ってしまったと思われる時、一人の男子生徒が飛んできた器材を拳で弾き飛ばした。勿論、ただ弾き飛ばしたわけではない。どこかの格闘技みたいな動きをして飛んできた器材の衝撃を受け流すようにして軌道を変えたに過ぎない。

「(あいつ……できる)」

「だ、大丈夫ですか!？」

明久と蓮司は階段を下りて地面に座り込んでいる女子生徒に尋ねている男子生徒の方へ駆け寄る。

「あの、怪我とかありませんか？」

「ええ……大丈夫です」

よく見ると地面に座り込んでいる女子生徒は三年生で、どこか大人の女性のような雰囲気をかもし出していた。

“大人の女性に弱い” 明久は女性を見て少し頬を赤くしている。

「小暮さん、大丈夫？怪我とかないですか？」

「博永さん・・・助かりました」

博永と呼ばれた男子生徒はよかった、といってかけているメガネを持ち直す。

小暮という女子生徒はありがとうございます、といって歩いていく。

「本当にすみません。手に怪我とかないですか？」

「ええ・・・それにしても吉井君も大変ですね。観察処分者なんて」

「あれ・・・僕の事を知っているんですか？」

「・・・え・・・うん、まあ」

明久が尋ねると、博永という人物は気まずそうというか少しショックを受けたような表情になった。

「あ、僕はもう行くね」

「はい、ご迷惑かけて申し訳ありませんでした」

ぺこりと明久と一緒に頭を下げた。

「ねえ、あの博永とか言う人なんで僕を知っていたのかな？」

「そういう時はこの学園の情報通に話を聞いたほうが早いだろう」  
そう言うと蓮司はポケットからブーストフォン・スピーカーを取り出す。

「ゼロワン、頼むぞ」

『任せろ、スピーカー！着身だ！』

蓮司が投げると同時にスピーカーが複数のパーツとなり、ゼロワンが蓮司の肩から飛んで空中でスピーカーのパーツを自身に装着していく。

装着し終わると華麗に地面に着地しポーズを取る。

『スピーカー、着身完了！』

「というわけで、あの音出してくれ」

『仕方あるまい』

ゼロワンはスピーカーから女性のあえぎ声のような音を流す。すると、ズザザザという音と共に土屋康太が現れる。カメラを構えて目が血走ったような表情をしていた。

「……友達としてこれはどうなんだろうな……」

「ははは……さあ？」

ゼロワンを見つからないようにリトラクトフォームで元に戻した後

明久はムツツリー二に事情を説明する。

「……三年生Aクラスの博永羽翠先輩」

「そんなに有名なのか？」

「……（フルフル）」

ムツツリー二は首を横に振った。  
どつやら有名ではないらしい。

「……逆に影が薄い。一度会った人も覚えていないくらい」

「もしかして、僕も面識アリ？」

「……（コクリ）」

「あ、そうなんだ」

そこまで影が薄いのかと蓮司と明久は何もいえなくなった。

「・・・作戦に協力？何のために？」

『将軍に協力するのがキミの存在意義のよなものなのだろう？これは将軍も承諾している事だ。ぜひキミにも協力してもらいたいんだ』

「・・・それは将軍も望んでいることなのか？」

『そつだよ・・・？』

その日、ドラゴンナイトは仮面ライダーステイングと遭遇した。  
現れたレッド・ミニオンを倒し終えた所に遅れる形でステイングが  
姿を見せる。

「……新しいライダー？」

「……」

ステイングは地面に倒れて粒子化を起こしているレッド・ミニオン  
を一瞥してからドラゴン内を見据える。

『キミを合衆国の命令により逮捕する！』

「えっ！？ちよつと待って！」

エビルウィップを構えて襲い掛かってくるステイングにドラゴンナ  
イトは慌てて距離を置く。

『逃がすか！』

追撃してくるステイングに対してドラゴンナイトはただ逃げの一手  
だった。

どんな目的でこのライダーが戦っているのかわからなかったという  
のと、先ほどの戦闘でアドベントカードを消費しているので分が悪  
いからというのがある。

エビルウィップの攻撃を避けながら明久は逃げるためのルートを探そうとしていた。

『バディ、こっちよ!』

「セカンド!？」

視界の隅に変形して歩行状態となっているセカンドがドラゴンナイトを誘導しようとしていた。

『早くしないと気づかれるわ』

「うん!」

ドラゴンナイトはスティングの懐に入り込んで拳を叩き込み、仰け反った隙を見てセカンドの後を着いていく。

「ふう……助かったよ。セカンド」

『バディを助けるのは当然の事よ。けれど、あそこがベントラなのね。情報として知ってはいるけれど……無人というのは寂しいわね』

「人はいないけれど、モンスターはうじゃうじゃいるけれどね」

「明久君、誰と話しているんですか?」

「っ!？」

明久は慌てて振り返るとそこにはきよとんした表情でコツチを見ている姫路瑞希がいた。

「いや、誰とも話していないよ？勘違いじゃないかな・・・」

「でも、誰かと話しているのが聞こえたような気がしたんですけど」

「気のせいだと思うよ？はは・・・」

明久は必死にウソをつく。

もし、ここでフォンブレイバーが見つかってしまつと色々やややしくなってしまう。

「そう・・・ですか」

まだ気にしていますという表情をしているけれど、姫路はこれ以上追求する事はなく自分の席に戻る。

「おつ、明久。携帯変えたのか？」

「・・・見たことない機種」

「えっ！？そうかなあ？蓮司と同じ機種なんだけど？」

「へえ・・・にしてもまあ、羨ましいな」

「なんで？雄二はそれなりにお金持っているんじゃないの？」

「・・・とうとう通帳まで翔子におさえられちゃった」

「うわぁ・・・」

「・・・災難」

明久とムツツリーニは雄二の不幸具合に何もいう事ができなかった。

## EPISODE 21 (後書き)

次回から・・・急展開です。

次回予告。

町の人々の時が止まる。

突然の事態に戸惑う蓮司達。

そのタイミングを狙うかのように現れる仮面ライダーキヤモ、仮面ライダーラスト。

襲撃してくる仮面ライダーとは異なる謎の人物の襲来。

その標的はなんと・・・。

本来の時間から切り離された街の中でライダー同士による戦いが始まる。

そこで彼らが得られるのは・・・。

第三章 真実を知る者達。

彼らが目にするもの・・・それは敗者の辿る末路。

## EPISODE 22 (前書き)

TPPで色々騒いでいますが、とりあえず本編は更新していきます。  
規制されるまでは続けていきます。

見てもらいたいですので。感想とポイント評価お願いしやす。

薄暗い部屋で一人の人間が目の中のパソコンにメッセージを打ち込んでいた。

『いよいよだね・・・』

その言葉にいくつかのコメントが目の中のパソコンに表示される。並んでいる言葉を見てその人物はにこりと微笑む。

見た者が気を緩めてしまいそんな笑顔だが、内容がないようなだけにそのまま笑う事ができない。

『楽しいショーの始まりだよ』

「明久も大変じゃのう」

「そうだな。彼女とかできればおさまるかもしれないが・・・まずFクラスをなんとかしないとイケないよな、それをしない限り平穩って文字とはどんどん疎遠となるだろうな」

秀吉と蓮司の二人は教室の隅で集まっている覆面の集団を見る。

額にFとかかかれていた頭巾をかぶっている彼らは異端審問会。

学園の秩序を守るとかほざいてはいるけれど、実際の所モてている男子に嫉妬しているただのダメなやつらだ。

その中に須川の姿はない。

自身の席に座って眠っている。

「…………平和じゃのう」

「そうだと……いいな」

Aクラス。

「え、シヨウコ今日坂本と一緒に登校したの！？楽しかった？」

「…………とても」

「あの光景を見ていない光は羨ましそうにしていますが……」

「あれは一緒に登校していたというより、腕を拘束しての登校に見えたな」

「代表…………」

「あはははっ。それよりさ。星ちゃん達は春風君とは何の進展もないの？」

「な、なんのことでしょう!?!」

「わ、我は別にレンのことなど!?!」

「?」

星と夜は沸騰しそうなほど顔を赤くし。

光だけ聞いていなかったので頭上に？マークを浮かべる。

その様子を見て工藤愛子はにしし、と笑い。木下優子はやれやれと

いう表情をしていた。

ある場所で複数の機械が同時に作動した。  
その機械は周囲を囲むようにして黒いフィールドが展開される。  
さあ、楽しい楽しいパーティーの始まりだ。

ドアを開けて西村先生がドアに入ろうとしたところ  
から黒い霧のようなものが噴き出して教室内を包み込む。  
唐突に起きた出来事にFクラス内部にいた蓮司、明久、須川の三人  
は驚き警戒した。

「なんだこりゃ!？」

「みんな……止まってる」

「……息はしているようだから死んではないようだな」

蓮司は近くにいる生徒の呼吸を確認して、警戒する。

「一体、どうして真っ黒になっているんだ……それと俺達はなん  
で動けるんだ？」

須川が周囲の生徒を見ていて疑問の声を漏らす。  
周囲の人はどういうわけか真っ黒に染まっていて石像になってし  
まったのかカチンコチンに堅い。動く気配がまるでない。

「でも、なんで僕達は動けるんだろう？」

明久の疑問に二人も気になっていた。

『バディ、貴方のポケットが光っているわ』

「え？」

「今の声どこからだ!？」

フォンブレイバーセカンドのことを知らない須川は戸惑いの声をあげる中、蓮司と明久はポケットからアドベントデツキを取り出す。アドベントデツキは仮面ライダーになるときと同じ輝きを放っている。

「これのおかげで僕達無事だったんだね・・・」

「そうみたいだが、これが起動するってことは」

『ベントラ絡みだろうな。バディ』

「うおう!?!?デビルK!?!?」

突如現れたゼロワンに須川は腰を抜かしそうになった。

ゼロワンはルールルルと歌いながら歩いていく。

『文月学園だけではない、この街ほとんどの時間が止まっているぞ』

「なんだと?」

蓮司達三人は窓から外の景色を見る。

「なんだ……こりゃ？」

外は黒いドーム状のようなものに街全体が包まれていて、その中にいる人達全てが制止していた。

人だけではない、鳥、猫といった生き物全てが活動を停止している。

「こりゃ……ただ事じゃないな」

「学園の中も調べてみた方がいいかもしれない」

「後、トルクの野郎がここにこねえのも変だな。調べに行くか」

「「え!？」」

「な……なんだよ!？」

蓮司と明久が驚いた目をして須川を見る。

見られている当人は何故驚いたような表情をしているのかわからず戸惑う。

「須川、なんでトルクの正体知っているんだ？」

「え……ああ、その事が少し前にアイツと面と向かって会う機会があつてな、別に戦いあう事はしねえよ。その……仲間みたいなもんだからな」

「そうか……」

「なら、安心だね」

二人の態度に須川は恥ずかしいのを隠すためにダツと立ち上がり。

「とにかく！今はAクラスに行くぞ。何かあったら大」

大変、といおうとしたところで大きな爆発音が学園を揺らした。

「今の音って!?!」

「Aクラスのほうからだぞ！」

「行くぞ。ゼロワン！」

『おう！』

蓮司の差し出した手に向かってゼロワンは飛び。空中で変形して携帯電話モードとなり、手の中に納まる。

## EPISODE 22 (後書き)

一次創作の場合。

今のところ考えているのはさっき見た真仮面ライダー序章みたいな感じで細胞改造された主人公一人が謎の組織と戦っていく感じのものになるかもしれません。  
服は・・・やぶけませんよ？

EPISODE 23 (前書き)

オリジナル展開に突入しています。

この先の展開、誰が予測できるだろうか？

爆発が起こる数分前、久保利光も異変を察知していた。

「これは・・・一体」

システムデスクで勉強していた彼だが、突如、周りから音が聞こえなくなつた事に気づく。

勿論、Aクラスは授業中は騒ぐものはいない。音もペンがカリカリと物を書いている音が聞こえるだけだ。

しかし、その音すら聞こえなくなってしまうたら様子がおかしいと気づく。

「みんな・・・固まっているけれど、死んでいるわけではない。どういうことだ？」

「あれえ、みんな固まってるよ？」

「光、授業中だ。静かにしろ」

「ちょっと待ってください夜。様子がおかしいです」

「須藤さん達は無事なのかい？」

少し離れた席で仲良く勉強していた星、光、夜の三人と自分を除く生徒達全員が固まっていた。

これは何かある、そう警戒していると、教室の扉が大きな音を立て

て吹き飛ばす。

「っ！」

「久保君下がっててください」

「うわっ、ロボットだあ！」

「確かに、だがデザインが些か無骨であるような気がするぞ。こっ、もつとテレビでやっているようなカツコイイデザインを・・・」

久保を守るようにして星、光、夜の三人が前に出る。

彼らの前に現れたのは人の骨格を模倣して作ったようなロボットで、無骨といえば無骨であった。

「キミ達、危険だ。一旦、教室から」

「っ！きます」

銀色と青のデザインをしたロボットはガチャガチャと音を立ててこちらに突き進もうとしてくる。

「ダメだ！みんな外に逃げるんだ！」

久保は星達二人の手を引いてもうひとつのドアを蹴り飛ばして廊下へ飛び出す。

「邪魔をするな！塵芥。あの程度の鉄くず我らならすぐにでも」

「何をするのかは知らないけれど、アレが教室で暴れたら周りの人

達が被害を受ける。クラスメイト達は動く事ができないんだ」

「その通り、流石だね。Aクラス次席久保利光」

「……………キミは」

廊下から現れたのはレッド・ミニオンを引き連れたキャモだった。まずい、と久保は内心思っている。

自分の隣には同じクラスメイト達がいて、無闇に仮面ライダーに変身することができない。

もし、仮面ライダーだということがばれてしまったら狙われる危険性もあるからだ。

「裏切り者を將軍は許さない……………貴様をベントしてやる」

キャモが合図を送るとレッド・ミニオン達が襲いかかるうとしてくる。

「パイロシューター！」

久保の横を光り輝くものが通過してレッド・ミニオン達がなぎ払われた。

な、に、と飛んできた方向を見ると須藤星が杖のようなものを構えている。

「今のうちです。逃げますよ」

「おー！」

「仕方あるまい！」

久保は周りを見渡すが、逃げるしか手がなく、走り出す。その後をロボットが追いかけていく。

「なんだこりゃ……台風でも通過したのか？」

「何かがあつたみたいだな」

「教室の中を見ただけれど、久保君はいないよ……後、須藤さん達もいないよ」

「星達も動けたのか？」

「おいおい、デッキ持っていないヤツで動けるやつがいるってどういうことだよ？」

三人がAクラスに駆けつけたとき、教室のドアは壊れ、中の机は散らかっているという状態だった。

幸いけが人はいなかったもので、安心する。

「とにかく、久保達を探さないといけない」

「そうしたいのは山々だけどよ。敵さんは捜して欲しくないみたいだぜ？」

須川の視線の先には行く手を遮るようにレッド・ミニオン達とメガセル、アビスハンマーが現れる。

「足止め・・・か？」

「よほど、俺達が星のところに行くのを望まないヤツがいるようだ」

「蓮司、ここは僕に任せて先に行つてよ！」

明久と須川が前に出る。

「・・・任せて大丈夫なのか？」

「へっ、吉井だけじゃ心配だから俺も付き合っぜ」

「二人ならまだ大丈夫だよ。だから安心して行つてきて」

「・・・わかった」

この場を二人に任せて蓮司は四人を探すために走り出す。残った二人はポケットからアドベントデッキを取り出して構える。デッキからパークが発生して二人の腹部にVバツクルが形成された。

『KAMEN RIDER!』

『KAMEN RIDER!』

赤とオレンジのスパークに包まれてドラゴンナイトとインサイザーになって、襲い掛かってくるレッド・ミニオン達に殴りかかる。

「ねえねえ！あのロボットまだ追いかけてくるんだけど！」

「喋る暇があったらとっと走らぬか！くそっ、速度があがってきているぞ！」

「久保君、大丈夫ですか？」

「すまない……（もう少し体を鍛えておくべきだった）」

久保は仮面ライダーになって超人的な力を得ている。しかし、あくまで仮面ライダーになったとしても肉体が強くなければ、強敵と戦っても勝てるかはわからない。

そもそも。久保は行動派ではなくインテリ派よりなので。戦闘能力が高いわけではない。  
ある程度。体力はあるけれども追いかけてくる相手が超常的過ぎて、自身の体力だけでは対応しきれない。

「変身できないとは辛いな・・・」

無力さを感じているのは久保だけではなかった。

星、夜の二人も追尾してくる敵をたたけない事に無力を感じていた。

「（あの程度の塵芥、私の攻撃ですぐに滅ぼせるというのに!）」

「（確かに可能ですが、久保君がいるという事を忘れないください。それに貴方の攻撃は威力が高すぎます）」

「（わかっている!しかし・・・あの後ろの鉄くずは一体どっちを狙っているのだ!）」

「（おそらく私たちでしょう。この学園に魔力資質を持った人間はいません。狙われるとしたら私たちくらいでしょう）」

「（・・・あの組織だろうか?）」

「（ありえますね・・・私たちの存在は貴重ですから、捕まったら研究素材として何をされるか想像できません）」

「（我らはただ平凡に生活をしたいだけなのに。何故、あのような屑共に壊されなければならない?）」

「（私と光も気持ちは同じです。とにかく久保君を安全な所につれてからです）」

「果たして安全な場所なんてあるもんかねえ？」

同時に殺気のようなものを感じて星と夜は久保と光を横に突き飛ばしてシールドを展開する。

バチイと強力な衝撃が二人に襲い掛かるがなんとか持ちこたえる。

「ほお・・・中々やるみたいじゃん」

「・・・・・・・・え？」

「どういうことだ・・・」

星と夜は目の前に現れた襲撃者に対して驚きの声を漏らす。それと同時に二人の体がびくつと震えだす。

「覚えているかわからねえがまた会えたな。闇の書のマテリアルウ！オレの任務はてめえらの回収なんだよ。だからとつとと捕まれ」

その人物を見て、どういう訳か星と夜の動きが鈍くなっている事に久保は気づいた。

ちなみに光は地面に突っ伏した際に思いっきり鼻を打ちつけてしまつてノックダウン状態。

これなら変身できるかもしれない、と久保は二人に気づかれないように場所を移動する。

「・・・・・・・・・・」

星と夜が身構えているとその後ろにいたロボットはゆっくりと手を前に出す。

手が形を変えて砲口のようなものへと変化した。そして、その砲口は星と夜へと向けられている。

ウオオオオオオオン

しかし、近くの窓から巨大な鮫の口のようなものが現れて、ロボットを飲み込んだ。

『STRIKEVENT』

『ATTACKVENT』

「いまだ吉井！」

「くらえええええええ！」

ボルキャンサーがレッド・ミニオン達の相手をしている間にドラグクローを装着したドラゴンナイトがメガセルとアビスハンマーに向けてドラグクロー・ファイヤーを放つ。

火球の余りの速さに二体は逃げる事ができず炎を受けて爆発した。

「ふう・・・かなり足止めされたね」

「くそつたれ、二人掛かりで苦勞されるような相手じゃねえはずなんだけどなあ」

二人が悪態をついていたが近づいてくる気配に気づく。

「なに・・・？」

「っ！」

現れたのは仮面ライダートラスト。その姿を見てインサイザーは仮面の中で表情を堅くした。

『学校が戦いの舞台とは気乗りしないが私には時間がない。二対一でも構わないぞ、かかって来い』

「仮面ライダーがここにくるなんて・・・」

「吉井、ここは俺に任せて先に行け」

「え・・・でも」

「あの鉄仮面とはすこしOHANASHIしたい気分なんだよ・・・ていうか、時間稼ぎしておくからすぐにウィングナイト追いかける。この調子だとどこで足止めくらっているかわからねえ」

「うん・・・わかったよ！」

ドラゴンナイトは頷いて走っていく。

トラストは横を通過して行くドラゴンナイトに対して何かする素振

りは見せなかった。

ギイン！

ドラゴンナイトがいなくなった後、インサイザーピンチとメタルホーンのぶつかり合う音が響く。

「あっさり通してくれるんだな。邪魔してくるかと思ったぜ？」

「私は戦士である前に紳士でありレーザーでありたい！人でなくなるようなことに手を染めるつもりはない！」

「成る程、まだマシな部類みたいだなあんた！（自覚がないだけややくしすぎるぜ）」

トラストが人としてまだ良い方だという事に気づいたインサイザーだが、そんなことよりもこの前の雪辱戦をすることを優先としていて、インサイザーピンチでトラストを圧そうとする。しかし、パワータイプの部類にあたるトラストにそれは無謀に近い。

ドゴオンと廊下の一角から爆発音が響く。

煙の中、星と夜は転がるようにして大きく廊下の上にバウントする。

「くっ、夜。無事ですか？」

「ああ・・・くそっ、あの塵芥どうなっているんだ？」

煙の中ゆっくりと青い戦闘スーツのようなものに身を包んだ男が現れる。

星と夜はゆっくりと起き上がり自身のデバイス・ルシフェリオンとエルシニアクロイツを構えた。

「おいおいおい、なんですか？この程度の実力ですか？つまんねえよ。もっとパワー見せてくれよ。でないとさあ……………殺しちゃうよ？」

最後の言葉で二人が身構える。

男の姿が掻き消えたと同時に二人の眼前に拳が放たれようとしていた。

だが、横から飛んできた砲弾が男の体を抉る。

「ぐはあ！」

横から受けた砲弾の衝撃で男の体は壁にのめり込む。

「二人とも無事ですか！」

トルクに変身した久保利光が駆け寄ってくる。

といつても、久保がトルクであることを知らない夜は身構えた。

「何だお前は！」

「あ……………僕は久保利光です……………わかるかな？」

「声なら……………久保君、光は？」

「気絶してしまったから安全な所に寝かせてある、とにかくここは

僕に」

「任せるからさっさと安全な所に逃げろっていうんだろ？あめえよ  
お」

「ぐあっ！」

壁にめり込んだはずの男がいつの間にかトルクの背後に回りこんでいた。

さらにトルクにキックを繰り出そうとしている。

「くっ！」

咄嗟に両手でガード体制に入るが間に合わない。

しかし、拳とトルクの間に見えない壁のようなものが展開されて拳がとおることはなかった。

「なんだ・・・これ・・・」

トルクが驚いていると入れ替わるように星と夜が前に出る。

「下がってる。こいつの狙いは我らだ」

「久保君では相手になりません」

「そんなこと！」

「それならこっちの相手してもらおうか」

トルクの首にキャモの武器バイオウィンダーが絡み付いて二人から

引き離される。

キヤモは指を鳴らしてから男の方を見た。

「……へいへい、こっちは引き受けますから俺はとっとと仕事を済ませろってことですね。わかりましたよ」

男の表情から笑みというものが消え、冷徹な雰囲気が見れる。

「どうやら相手は本気を出すみたいだな……（星、勝てると思うか？）」

「そうみたいです（今の状態の私たちでは難しいです。得意のスタイルで戦えていない状態に加えてバリアジャケットが展開できていない状況です。距離を置いてヒットアンドウェイを狙うしかないですね）」

「（それしかないか……くそっ！塵芥の分際でここまでてこずらされるとは！）」

エルシニアクロイツを構えて夜は目の前で殺気を放っている男を睨む。

男はブツブツと何か呟いていると思っていたら地面を蹴って夜に襲い掛かる。

「くっ！」

咄嗟に幾何学的な模様が描かれているシールドのようなものを手の前に展開して攻撃を受け止めた。

しかし、先ほどと異なり男の拳はシールドを粉々に打つ砕く。

「なに!？」

シールドを砕いた拳はそのまま夜の腹部にめり込む。

「ぐふっ！」

「夜！」

星が夜へ駆け寄ろうとした。しかし男が星と夜の間で強制的に割り込んで腕からレーザーのようなものを放つ。

「きやつ！」

咄嗟にルシフェリオンで防ごうとするが間に合わずレーザーは星の肩を抉る。

「キサマあああああああああああ！」

星の体から飛び出る血を見て、夜の抑えていた怒りが爆発する。エルシニアクロイツを持っていない片方の手に茶色い分厚い本のようなものが現れた。

それと同時に周囲が大きく歪むほどの“何か”が渦巻く。

「喜べよ塵芥。キサマは塵一つ残すことなく我が消し去ってくれ。我の大事なものを傷つけた罪は重いぞ」

「ほおう、その実力をを見せてもらおうか。闇統べる王！」

「一体どうなっておるんだ!? 誰も動いていないぞ!？」

喫茶 Amigo の店長、立花藤兵衛は外の異変に驚いていた。何かあると察知して藤兵衛は出て行こうとするが。

「おやっさん、今出て行くのは危険だよ」

そういつて、スカリエッティが手に持っていたビスケットを店の外に放り投げた。

すると、ビスケットは地面に落下する途中で黒く染まり空中で静止する。

「お、おい! こりゃどうなってんだ!？」

「誰が作ったのかはわからないが、あの黒いモノに当たった途端、動きを完全に止められてしまうようだ」

「わしらは無事みたいだが・・・何故だ?」

「この店は様々な侵入者対策として僕の知識のほとんどを使用して特殊フィールドを展開しているから被害を受けることがない」

「くそっ、これじゃあ。外へいけないじゃないか!・・・あいつら無事だといいが」

「ええ・・・(この結界。この世界の技術で作られているものじゃない・・・だが、どこかで見た覚えがある気がするのは何故だろう

か？  
「

## EPISODE 23 (後書き)

あれですね。真仮面ライダー序章を見て思いましたが・・・テレビで放映しなくてよかったかなと思います。

あまりに凄すぎて、子どもの頃見ていたら怖くて泣いていたかもしれません。

ていうか、夜見ても怖いんですけどね。

さて、次回の話をする前にかーい、お知らせが？

そろそろ、ファイズの話の一話を投稿しようかと思っています。

さて、次回の話を軽くまとめなくてもいいかな？次回も楽しみにしていただくさい。

あ、一個忘れていました。  
ファイズのイメージソング決まりました。  
見たい人は連絡ください。

「くそつ、早く星達を追いかけないといけないというのに、こんな時に！」

「逃げるな！大人しく捕まるんだ！」

ウイングナイトのすぐ後ろをエビルウィップを構えて追いかけてくる仮面ライダーステイングの姿があった。

久保を追いかけていたウイングナイトだが、予想通りレッド・ミニオン・ミニオンの襲撃にあい、撃退していると同じようにレッド・ミニオンと戦っていたステイングと遭遇し、逮捕する！といわれて攻撃をされたのである。

余計な事でアドベントカード消費を避けようというのと、周りへ被害を出さないために場所を変える事にした。



「キサマああああああああああああああああああああ！」

須藤夜が無数の魔方陣らしきものを描くと魔法陣から砲撃に近い魔法を無数に放った。

周囲に対する配慮など関係ない。

ただ、目の前の肩を破壊する。

怒りに支配された夜の攻撃を男は笑いながら避けていく。

中には直撃したこともあるが、ダメージを気にした様子もなく突き進んでいった。

「消してやる！キサマのような塵芥は我が直接！」

「アハハハハ！そんな状態じゃ俺を倒すなんて何年も先のことだぜえ？」

「失せろおおおおおおおおおおお！」

「須藤さん……彼女はいつたい」

「よそ見している余裕はないよ？」

殴りかかってきたキャモの攻撃を手で弾きながら段々と夜と男が戦っている場所から切り離されている事に焦るトルク。

トルク得意の遠距離戦を行なおうにもキャモは近接格闘タイプ、一回でも間合いを詰められてしまつたら逃げる事も抜け出す事もできない。

それにさっきからトルクに向けてキャモの武器バイオウィンダーが不規則な動きで飛んでくるのだ。

この状態ではアドベントカードをベントインすることもマグナバイザーで牽制をする事もできない。

八方塞りの状態だった。

そして、ちらりと暴走している須藤夜を見る。

どういう原理かわからないが大量の光る弾丸やら、細長いレールガンのような攻撃を放っている。一体彼女は何者なのだろうか？

「考えている余裕が有るのかい？」

「しまっ！」

少し考えていたのが命取りとなり、キャモの接近を許してしまった。

「おらおらおらぁ！」

腹部に連続パンチを叩き込まれる。

「ぐっ！」

「もういっちょ！」

膝を突いたトルクの顔目掛けてキャモの強力なキックが炸裂した。

「ぐああああああっ!」

脳みそがグアングアン揺れて視界が歪むトルクは声をあげながら横の壁に顔がめり込む。

「はっ、このてい」

この程度といおうとした所で何かがキヤモの背中に命中した。アーマーを貫く事はなかったがダメージを受けて地面に倒れ込む。

「くそっ、ここまで戦闘が広がってきているのか？あの男、調子乗りすぎて厄介な事を起こさなければいいけど」

そういつてキヤモが起き上がるとそこにいたはずのトルクの姿がない。

逃げたようだ。

「ま、こっちも楽しませてもらうけど……裏切り者を狩るのが仕事だし」

仮面ライダーウィングナイトと仮面ライダーステイキングは自身の得物を使いながら文月学園から離れた街中で激戦を繰り広げている。

「なんだこれは・・・？」

周囲の異変に仮面ライダーステイキングは戸惑いながら目の前の敵を倒すために意識を向けていた。

仮面ライダーステイキング・クリス・ラミエルは合衆国海兵隊の一員として将来を捧げるつもりだった。彼の家は代々軍人として国のために身を捧げていた。

そして、その家で育っていたクリスもいつかは父たちと同じように軍人となって国とそこに住む人々を守るために働くつもりでいたのだが、その夢は唐突に崩れ去る。

気管の疾患が検査により発覚して、海兵隊として働く事ができない。

そう医師に告げられた時、クリスはなんともいえない絶望に叩き落されてしまう。

父親の望みも叶えられなかった彼の前にコナーズ捜査官が現れてスティングのアドベントデッキを渡して、クリスに告げる。

『モンスターから人々を守るために戦ってもらえないか？』

その一言にクリスの心は大きく揺さぶられた。

海兵隊として国家のために戦う事はできない、しかし、仮面ライダーとしてなら国家のために人を守る事ができる。

クリスはそれが悪魔の囁きとは知らず、アドベントデッキを手にとつて仮面ライダースティングとなり、モンスターを操っているライダーの一人と戦っていた。

一旦距離を置いてスティングはデッキから一枚のカードを取り出して、左腕のバイザーエビルバイザーにカードをベントインする。

『FINALVENT』

スティングのアドベントビースト、エビルダイバーが水しぶきを上げながら現れる。

エビルダイバーの上にスティングが飛び乗り必殺技ハイドロベノンがウイングナイトに炸裂した。

「がっ！」

ハイドロベノンの体当たりが命中してウイングナイトは壁に叩きつけられる。

しかし、立ち上がられないわけではない。

ウイングナイトはふらつきながらゆっくりと立ち上がり、ウイング

ランスを構えて地面を蹴る。  
そして、ステイングへ連続してウィングランスを突いてく。

「ごほっ！・・・げほっ・・・ごほっ！」

ステイングは反撃をしようとするが、持病が発動してしまい、激しく咳き込む。

ウィングナイトはデッキからアドベントカードを取り出してブラックバイザーにカードをベントインする。

『FINAL EVENT』

アドベントビースト・ブラックウィングと合体して、ウィングナイトは飛翔斬をステイングに向けて放つ。

ステイングは激しく咳き込んで動く事ができない。

このまま貫けばウィングナイトの勝利は確定である。  
だが、

「なっ・・・」

ステイングは驚きの表情を浮かべた。

そこには必殺技を解除して立っている春風蓮司の姿があったからである。

まさか、変身していた人物が学生とは思っていなかったステイングは戸惑いの表情を浮かべた。

「・・・」

蓮司は眉間に皺を寄せてそのまま背を向けて走り出した。

ステイングは激しく咳き込みながら変身を解除してその場に座り込

む。

そして、その戦いを佐伯風華は偶然目撃していた。

街を歩いていると、突如、周囲が黒く染まり。周りの人達が動かなくなってしまう。事務所に連絡も取れなくなったのである。

戸惑いつつも誰か動いている人がいないかと思っただけ周囲を歩いていると偶然、目撃してしまったのである。

JTCに送られてきた画像に映っていた仮面ライダーらしき存在と嘗て怪物に襲われた自分を助けてくれたあの仮面ライダーを。

二人のライダーがどうして戦っているのかわからなかった。

戦いを見ていて驚いた事がある。

コウモリの騎士に変身していた人物が自分を助けてくれた人と違うのだ。

まだ学生くらいの少年。

少年は眉間に皺を寄せながら戦っていた仮面ライダーに背を向けて走り出した。

私は、座り込んでいる仮面ライダーのほうへ近づいていく。

「須藤さん!？」

ドラゴンナイトは廊下に倒れ込んでいる須藤星を見つけて慌てて駆け寄る。

どこか怪我をしているのか表情が青い。

ドラゴンナイトの姿を見られるのはまずいので変身を解除して星の体を揺らす。

『落ち着いてバディ、気絶しているだけよ』

「そうなの・・・よかったあ」

セカンドの指摘に明久はぺたんと座り込む。

「セカンド、ゼロワンと連絡取れる?」

『無理ね。電波も遮断されているみたい・・・最悪ね。気持ち悪いわ』

「そっか、セカンドってケータイだもんね。電波がなかったら色々不便利か」

『それもあるけど・・・。いつもあるものがなくなるのって、とても気持ち悪いわ』

「あ、そっか・・・ここには久保君たちがいないみたいだね。須藤さん背負ってみんなを探そう」

『町に出たほうがいいんじゃないかしら？それにここら辺もなにやら騒がしいわ』

「・・・蓮司の姿も見えないし。一旦、Amigoへ向かおう。ブーストフォンとか何かあるかもしれない」

そう考えて明久は文月学園から外へ出ようとした。しかし、ある事を思い出して駐輪場の方へ向かう。

「くっそ……強え」

インサイザーは荒い息を吐きながら目の前で武器を構えて立っているトラストを睨む。

体はトラストによる攻撃で痺れていて、自分が立っているのかどうかわからないくらいヤバイ。

それに対してトラストもダメージは受けているようだが、

『中々の腕前のようだが、やはり私が上だ！さあ、私には時間がな  
いから決着を付けさせてもらおう！』

「く……」

トラストはデッキからアドベントカードを抜いて肩のバイザーにベ  
ントインする。

『FINAL EVENT』

アドベントビーストメタルゲラスが現れる。

トラストはメタルホーンを構えてジャンプする。メタルゲラスの肩  
に乗りそのまま突進して行く。

必殺技へビープレッシャーがインサイザーへ迫る。

「……くっ……たれが……ああああああああああ  
あああああああー！」

インサイザーは最後の力を振り絞って攻撃をしようとインサイザー

ピンチを振り上げようとする。  
その瞬間、どこからともなく巨大な鮫が現れてインサイザーを飲み込んだ。

「なにっ……逃げられた!？」

トラストは変身を解除して、拳を壁に叩きつけてブラット・バレットは顔をしかめる。

ブラット・バレットはモトクロスのレーサーとして優秀だった。

常に一位を取り続けて、誰にも負ける事がない。

一位を取り続けて勝つことをブラット・バレットは自身に課せられた試練を捉えている。

常にブラット・バレットは試練に打ち勝つ。

しかし、そんな彼の前に最高の強敵ライバルが現れる。

年齢は自分より低いというのに自分以上のレーサーとしての腕を持つ少年。

その少年と戦い勝つこと、そして彼とレースで競い合う事にブラットは全てを注いでいた。

ある日、あるレースでブラットが勝利した時、所属チームのオーナーに呼び出されてチームを首にされた。

「何故ですか!?!何故自分が!？」

「……こんなビデオが俺のところへ届いた」

オーナーがブラットに見せたのは自分と同じジャケットを着た男が誰かのバイクに何かをしている映像だった。そして、ブラットはそのバイクに覚えがある。

「ロドニー……のバイク？」

「そうだ、実際にロドニーは危うくレース中に死ぬ所だった」

ブラットは思い出す。

レースでロドニーが優位に立っていた時だ、突如、ロドニーが転倒したのだ。しかも場合によっては後ろから続くバイクにひき殺されるかもしれない所だったのである。

「自分では有りません！自分はそんなことをしない！」

「だが、証拠はここにあるのだ。悪いがチームをやめてもらおう。ロドニーは訴えないといていたが、俺としては見過ごすわけには行かない。レーサーとしてのお前の人生は終わりだ」

オーナーの言葉を頭の中で反響しながらブラットはふらふらと歩いていた。

レーサーとしての人生が終わる。もう、彼と戦える事ができない。

「今日は勝てたかな。ブラット君？」

彼の前に一人の男が現れる。どうやら記者のようだ。

「悪いが取材に応じるつもりはない」

「これを見てもかい？」

男はソフト帽をとってある物を見せる。それはカメラで中にはロード  
二丁のバイクに細工をしている映像の姿がある。

「これは……」

ブラットが映像を取ろうとすると、男は帽子を隠す。すると、そこ  
にあったカメラはなかった。

「謀ったな……」

「いいや。私はこれを手に入れたに過ぎない。さて、商談と行こう  
か」

「何が目的だ……」

「様々な選手が出場するバトルファイト。それに出場してほしいの  
だよ。会場は日本。参加資格はこれ」

男はトラストのアドベントデッキを見せる。

ブラットが受け取るとデッキは白銀色に輝くと同時に力を感じた。

「なっ！」

ブラットの周囲を囲むようにしてレッド・ミニオンが現れる。

身構えるが隣の男は全く動じない。

なぜなら。

「ハッ！」

紫色の鎧のようなものを纏った仮面ライダーストライクが現れる。ストライクは手に持っているベノバイザーや拳でレッド・ミニオンを蹴散らした。

「このような姿で相手を倒す。キミがすべての敵に勝利した時、この映像を協会に見せて君のレーサー人生を取り戻してあげよう」

「……………」

「なにより、あの子ともう一度戦いたいのではないかね？」

男の言葉はブラットの心を大きく揺さぶった。

今のままでは確実に彼と戦う事ができない。

さらにチャンスといえるのが戦う舞台が日本。

日本には彼がいる。

勝ち続けばレーサーとして復帰できるばかりでなく、彼との決着もつけることができる。

日本で始まるモトクロスの大会。それまでに勝利すれば……。ブラットはアドベントデッキをしまい、日本へ行く決意をした。

「くそつ……………甘い俺も」

喫茶Amigoへ向かって歩きながら蓮司は先ほどのことを考えていた。

ステイングを倒そうとしていた時。躊躇った。もちろん、敵を倒す時に躊躇ってはいけない。そう、教えてもらったのに……。

「笑われるな……自分に」

『バディ！危ないぞ！』

「っ！」

ゼロワンの叫びにぴたっ、と止まる。それが救う事となった。

ズギウウウウウウウン

強力な“魔力の塊”がすぐ目の前を通過した。

「これは……」

巨大な魔力は地面を抉り、周りの建物を破壊する。

『バディ、あそこに夜がいるぞ』

蓮司が視線を向けると、黒い翼のようなものを生やした夜が杖を男に向けている。

男は笑いながら攻撃を避けていた。

「ちっ……狙いは夜達か」

『どっどっするっ』

「俺はアイツをなんとかする。ゼロワンはシーカーを使って、このふざけた空間を形成している原因を探してくれ」

『わかった・・・バディ、無茶はするなよ』

「お前も壊れたら許さないからな」

蓮司はウイングナイトに変身して走り出す。

ゼロワンもブーストフォンを取りに行くためにAmigoに向かって駆けて行く。

ウイングナイトはブラックウイングと合体して空へと羽ばたいて行く。

コウモリのような羽を広げて夜のほうへ向かう。

夜は我を忘れているのか男を狙って攻撃しているが、いくつか建物も狙っている。

「夜！やめろ！」

ウイングナイトの叫びに返答はナイフのようなものの攻撃だった。

「くっ、一発殴らないとダメか」

家族を殴る事に抵抗を覚えながらもウイングナイトは夜へと接近して行く。

「彼らが……悪い子に見える？」

座り込んでいるクリス・ラミエルに佐伯風華はゆっくりと近づいて

尋ねる。

「わからない……何もかもが……」

「あなたは どうしてその力を得たの？」

「人を……怪物から守りたかった」

「たかった？」

「何を信じていいのかわからない……何を信じて戦ったらいいのかもわからない」

クリスは純粹に迷っていた。

今までどおり祖国のために戦おうと思ってデッキを手に取るうとすると、先ほど戦ったウィングナイトの少年の表情が蘇るだけでなく、周りの……この街の動かない人達の表情が蘇ってしまうのだ。

後者においてはクリスは全くの無関係であるが、そのことに関与しているかもしれないと思うだけでこれ以上戦うとより自分の信念とかけ離れてしまうのではないだろうか？と。

「それは……自分も？」

「え……？」

クリスが驚いた表情をして佐伯風華を見つめる。

風華は微笑みながら尋ねた。

「貴方が今までどんなことをしてきたのかは私は知らないけれど。

あなたは多くの人を助けてきたのでしょうか？ だったらこれからも人

を助けようと動いてきた自分を信じて戦えばいいんじゃないのかな  
・・・と思うのだけど」

「でも・・・」

「じゃあ、彼らと話し合ってみるといいんじゃない？そうすれば・  
・貴方の求めている答えが見つかるかもしれない」

「そんなこと・・・」

「昔、ある人に言われたの。人は些細な事で誤解して相手を信じる  
事ができなくなってしまうてはダメだつて。人の心から争う心がな  
くなれば、世界は少しはマシになるつて」

「相手を信じる事・・・」

「それで裏切られたとしても、何百回人を騙した人より、騙された  
人のほうが私は好きだし・・・なにより・・・貴方は悪者でいる  
よりヒーローでいる方が似合つてる」

佐伯風華の言葉にクリスは目を見開いて、ゆっくりと立ち上がる。  
表情に先ほどのような深い悩みはない。

かといって悩みがすべて消えたわけではない。悩みを解決するため  
に会いに行つて彼らと話をしなければ。

クリスはアドベントデッキをポケットに仕舞い、近くに停車させて  
いたバイクに乗り込む。



何もかもが停止した空間の中でそれぞれの想いを抱いた者達が動き始める。

誰かを救うために動く者とする者。

大切な家族を止めようとする者。

守るために戦う者。

友との決着をつけるために戦おうとする者。

無力を味わいながらも戦おうとする者。

答えを得るために向かう者。

ただ、必要とされるから戦う者。

楽しむために暗躍する者。

様々な意思が止まった空間の中でぶつかり合い始める。

そして、もう一人。

ある世界を救うためにいくつもの世界を回って、解決策を捜し求める一人の男が現れる。

異世界から来たからか、彼は黒く濁った空間の中でも普通に動いていた。

「……あるだろうか？」

城戸真司は制止した街を歩き始める。

EPISODE 24 (後書き)

今回から、龍騎鯖威武さんの仮面ライダー龍騎EPISODE K  
annonから城戸真司君が参入する事になりました。

この作品、とても面白いので読んでみる事をおススメします。

上手く書けるかかなり不安ですけどね。

EPISODE 25 (前書き)

今回、新しいライダーが！



むくりと一人が動いて叫ぶ。

「っ~~~~~! レン! キ  
サマア! 我の柔らかい頬になにをする!」

「夜……正気に戻ったか」

「もう一度問うぞ、キサマ、我に……っ!?!」

怒り心頭だった夜だが、現在の状況を見て顔が真っ赤になる。

現在の状況。倒れている夜の上に蓮司が覆いかぶさっている状況、  
場所が場所なら嬉しい展開だが、怒りで我を忘れていた彼女の思考  
回路は混乱を始めた。

「ん……すまない。重たかったか?」

この状況をそういう方向に微塵も考えない蓮司は普通に夜から退く。

「期待した我が……っ!」

「少し痛いかもしれないが許せ」

わき腹を押さえて顔をしかめる夜に蓮司は手をどけて優しくわき腹  
に触れる。

「骨に輝が入っているかもしれない……Amigoに行くぞ。  
あそこなら治療道具もある」

「しかし、レン」

「おいおいおいおい、こつちの事忘れていませんかい？」

男の言葉が響くと同時に背後から蓮司を殺そうと拳が迫る。  
ガシッ、と蓮司はあっさりとその拳を受け止めて投げ飛ばす。  
正確に言うとは少し違う。

頭を狙った拳に対して、頭を少し傾けて攻撃を避けて伸びていった手を掴んでそのまま投げ飛ばした。

「なっ……にっ!？」

男は戸惑ったような表情をしつつも空中で回転して着地した。  
そして、顔を上げた時に眼前に立つのはウィングナイト。

「お前に構っている余裕はない。失せる」

強烈な拳が轟音を上げて男を打ち抜く。

男はごろごろと地面を転がって動かなくなった。

「行くぞ……どうした？」

「なんでもない……自分の暴走した意味があるのかと問いたくなっただけだ」

「……」

「ぬあっ!?!? な、なにを!?!？」

ウィングナイトは夜を大切にしているかのように抱きしめる。  
抱きしめられた夜は顔を真っ赤にして慌てた。

「別に……お前が大切だからこうしただけだ。大切な家族のため  
に怒ったお前を」

「……（全く、変なところで鋭いやつだ）」

ウィングナイトは夜を抱きかかえるようにして空へと飛んでいく。

ベントラでインサイザーは巨大な鯨の口から放り出される。  
インサイザーを放り出した後、鯨は空を飛びながらどこかへ飛び去っていく。

「いてっ！？うええ、唾液でべたべただぜ」

インサイザーは悪態をついていたが目の前に現れた存在に表情を陰しくする。

「その様子だと無事みたいだね？仮面ライダーインサイザー」

「あんだ……誰だ？」

目の前に現れたライダーは鯨を模した仮面に全身が銀色のアーマーで、Vバックルに嵌っているアドベントデッキすら銀色。  
全てが銀色の仮面ライダー。

「僕の名前は仮面ライダーオーシャンファング。ベントラの仮面ライダーだよ」

「その仮面ライダーさんが、俺に何の用事だ？デッキを返せとかいいにきたか？」

「デッキを返せなんていうつもりはないよ。ただね？」

「っ！」

インサイザーは息を呑む。

会話の最中に一瞬で間合いを詰められてしまったのである。

「君の戦い方じゃ、インサイザーとしての力を引き出すどころかマインサスの要因となってしまうている」

「インサイザーとしての……力？」

「そう、だから僕がキミに教えてあげるためにやってきたんだ。『インサイザーとしての戦い方』を」

「なんでそんなこと」

「これからもつと戦いが激しくなる……けれど、君を含め、何人かのライダーは自身の使っているライダーシステムの戦い方、使用方法を把握していない。そんなことでは將軍に勝つどころか、敵兵であるライダーにすら勝てない。だから僕は教えるためにやってきた。さあ、教えよう。インサイザーの戦い方を」

オーシャンファングの槍がインサイザーに向かって放たれる。

「大丈夫？」

「うっ……須藤さん。助かりました」

久保はふらつく頭を手で押さえながら須藤光と一緒に文月学園を離

れて“もしもの時”のためにと指定されていた喫茶店へと向かっている。

どうして、光と一緒にいるのかというと、床に顔を打ち付けて気絶していた彼女だが、久保がトルクとして戦っているときに意識を取り戻して、トルクの危機に自身のデバイス・バルニフィカスを起動させて得意のスピードでトルクを安全圏まで避難させた。

「しかし、須藤星さんを置いてきてしまった……」

「大丈夫だよ。星はあの程度じゃ負けないし、ましてや捕まる事もないよ」

「彼女といい須藤夜さんといい、キミより強いのか？」

「うーん……どうなんだろう？ぶつかりあったことないからわからない」

首をかしげる光に、久保は苦笑する事しかできなかった。

明久は文月学園に隠しておいたバイクにまたがり叫ぶ。

『KAMEN RIDER!』

叫ぶと同時に赤いスパークがバイクごとに包まれて形が変わる。  
怪我をしている星を抱きかかえてドラゴンナイトの乗っていたバイクが大型により赤くなった“ドラゴンサイクル”に乗ってAmigoへと向かう。

「あそこなら須藤さんの怪我を治せる！」

「ったく……、どいつもこいつもよお……計画総狂いだし」

不気味な機械の前に立っている青年は悪態をついて地面を蹴る。  
怒っているはずなのにその表情は笑っていた。  
醜悪といえるほどに。

「まあいい……こっちの計画は狂ってるからもうやめるとして、あっちの計画を傍観させてもらうとするかね」

そういうと、青年の前に映像パネルのようなものが現れる。

城戸真司はぴたっと、立ち止まった。

「あれは……」

喫茶 Amigo

「くそっ！こいつら人が動けないからってこんな大勢で！」

「ぐっ……」

立花藤兵衛とジェル・スカリエツィの二人は入口や窓を机や椅子などで封鎖して必死に押さえ込んでいる。

扉の向こうではレッド・ミニオン達が突破しようと足掻いていた。

この喫茶店はスカリエツィによって様々な処置が施されているが、あくまで防御的手段だけで、攻撃手段は講じていない。

「このままでは……！」

「大丈夫だ！必ずライダーは来る！」

「無理だと思いますよ！この状況で……！」

「いいや必ず来る。ライダーは！」

藤兵衛は仮面ライダーを信じていた。

必ず仮面ライダーなら来てくれる。

絶対的な信頼を立花藤兵衛は持っていた。

そして、その祈りは通じる。

『SHOOTVENT』

『FINALVENT』

ギガランチャーの砲撃でレッド・ミニオン達は吹き飛ばされ、宙に舞った所をドラゴンライダーキックが全てを包み込み破壊した。

「ほらな……仮面ライダーは来てくれる」

「はっははは……すごいですね」

あまりのタイミングの良さにスカリエッツィは座り込んで笑った。

「久保君！？大丈夫！」

「吉井君……すまない」

ふらふらのトルクを抱えるようにしてドラゴンナイトへ店内へと入り込む。

二人は店内で変身を解除すると藤兵衛が駆け寄る。

「明久！とお前さんも無事か？」

「すみません、ドクター。彼ら診てもらえますか？」

「わかった・・・しかし、僕達は外に出られないんだ」

「え？」

「あの、この子達を中に入れたいんですか？」

「「え？」」

入口には一人の男が立っていて意識を失っている星と光を店内へと招きいれていた。

「あの・・・あなた平気なんですか？」

明久は戸惑いながら男に尋ねる。

「多分、この世界の人間だけを限定にしているからだと思う。この街全体を覆っている黒い結界みたいなのは・・・」

「“この世界の人”・・・限定って・・・まさか」

明久の言葉に男はにっこりと微笑む。

「初めまして、俺は城戸真司、この世界とは異なる世界からある目的のためにやってきました」

蓮司は変身を解除してAmiigoの中へと入っていく。

「これは……どういう状況だ？」

中に入ると明久、久保、藤兵衛、スカリエッティ、光、星、そして見知らぬ男。

「初めまして、キミがウイングナイトだね？僕の名前は城戸真司。異世界から来た」

「異世界？」

城戸真司は頷く。

嘗て、春風蓮司と吉井明久が風都で鳴海探偵事務所で色々と話をして聞いていたとき、聞いたことがあった。

「異世界のライダー？」

「そう、こことは違う。けれど、よく似た平行世界には俺らとは異

なる仮面ライダーが全く異なる世界で戦っているというのがあってな」

「その時、僕達も遭遇したんだ。異世界を旅する仮面ライダーに」

「へえ・・・」

「だから、もし、お前らの前に異世界だ云々いうヤツがいたらまずは信じてやれ。すべてはそっからだぜ？」

「はい・・・」

「・・・」

城戸真司という異世界の来訪者出現に戸惑っているみんなの前に須川亮が転がるようにして出てきた。

「す、須川君!？」

「大丈夫かい？」

明久と久保が慌てて駆け寄る。

倒れていた須川はむくりと起き上がり鏡を睨む。

しかし、既にオーシャンファングの姿はない。

「あの野郎……」

「とりあえず、揃ったか。現在の状況を説明しようか」

スカリエッティの言葉に蓮司と明久が頷こうとすると、カランカランとAmigoのドアが開く。

「あ……その」

全員の視線の先にはクリス・ラミエルと佐伯風華が立っていた。

「……誰だこいつ？」

「あ、僕は」

「初めまして、私はATASHIジャーナルに所属している記者の佐伯風華といます。そして、こちらは貴方達と同じ仮面ライダーのクリスよ」

どうして、クリスと佐伯がここにいたかという。夜の放った強力な魔法のような光の柱により、何かがあると向かっている途中に空を飛ぶウィングナイトを発見。  
追いかけていると、店の中に入るウィングナイトを見つけた。  
佐伯もスクーターでクリスのあとを追いかけていたので同じように入ってきたのである。  
そして、今に至る。

「あ……えつと、何か用かな？」

営業スマイル？みたいなものを浮かべながら明久が尋ねる。

「ウィングナイトと話がしたい」

クリスが真剣な表情で尋ねる。

「お呼びだぜ？春風」

「……わかった、場所を変えよう。クリスだったか？ついてきてくれ」

「ああ……」

クリスは頷いて蓮司と一緒に外に出た。

残った佐伯風華はにこりと微笑んで椅子に座っていいかと尋ねる。

「あ、どうぞ」

藤兵衛が了承して椅子に座った後、佐伯風華はある物を彼らに見せ

る。

「これは？」

佐伯が置いたのはデジタルカメラと印刷された写真。

写真を手にとって尋ねたのはスカリエッティだ。

手の中にある写真には写りが悪いがスティングと不気味な機械らしきものが見える。

「一枚目は私宛に送られてきた写真です。この写真はこの街で撮られたものだから、真実が知りたかったらここへこいとありました。もうひとつはこの街に入るときに見つけた機械なんです。勝手に起動して、ついカメラのシャッター押しちゃったんですよ」

「これは・・・」

『・・・・・・・・の・・・・・・・・あ・・・』

『

』

「グッ・・・あああああああああああああああああああ  
あ！」

「ど、どうした!？」

頭を抑えて座り込むスカリエッティ。

「大丈夫ですか？」

城戸真司が抱きかえるようにして近くの椅子に座らせた。

スカリエツティは荒い息を吐きながらゆっくりとカメラの映像を見る。

手が震えるがスカリエツティは気にしない。

「・・・・・・・・る・・・・・・・・」

スカリエツティの脳裏に機械の構造、詳細、どのような形の配線が接続されているのかなど、まるで自身が作成したかのようにわかる。

「この機械はどこにあったかな？」

「え・・・・・・・・ええっと、この街と隣町の境目のところにあったと思います」

「そうか・・・・・・・・ありがとう。おやっさん。すまないんだけど地図を出してくれないか」

「おう！」

藤兵衛は机の上に地図を広げる。

スカリエツティは白衣のポケットから赤いマーカーを取り出していくつかのポイントにキュツキュツと をしていく。

「この付近に例の機械があると思う。それらの機械全てを破壊すれば町は元通りになるだろう」

「ほ・・・・・・・・」

「なあ・・・・・・・・なんでそんなことわかるんだよ？」

「彼のいうとおりだ。どうしてわかったんですか？」

久保と須川の言葉にスカリエッティはどこか悪党が浮かべるような笑みをして二人へ告げた。

「僕がああ機械の製造に関わっていたからだよ」

「キミ達はなんのために戦うんだ？」

店から少し離れた所でクリスが尋ねる。

「……人や正義のためというところだろうけれど、俺の戦う理由にはつきりいって自分のためだ」

「自分の……ため？」

「そうだ。どんな理由で着飾ったとしても結局は……自分が、俺がやりたいから仮面ライダーとして戦っている。それが俺の戦う理由だ」

「僕とは違うな」

「一緒の理由を持つ奴なんていうのは同じ境遇の人間か、同じもの

を体験して偶然同じ事を考えたヤツだけだ。俺とアンタは育ちも生まれも違う。同じ考えになる事はまずないだろ？」

「口が悪いつていわれるだろ？」

「まあな。初対面の相手にはこうだ。悪いな」

「いや・・・今の会話だけで、キミがどういう人物かというのがよくわかったよ」

「キミ達の知っている。これの真実を教えてほしい」

そういつてクリスが見せるのはステイングのアドベントデッキ。

つまり、自分の知っている事と蓮司達が知っている事の違いを知りたいという事だった。

「・・・いいが、自分が辛くなるかもしれないぞ？」

「覚悟は出来ている。それに僕自身が本当に“仮面ライダー”として始めるために必要な事だから」

「わかった」

蓮司は話す、自身の知っている事を。

「あなたが……作った？」

「どうして？」

須川と久保はスカリエツティに尋ねる。

「……覚えていない」

「「は？」」

須川と久保の二人はポカンとした表情を浮かべる。

「おいおいおいおい！？覚えていないってなんだよ！この展開なら

重要な事実を話すとかそういう流れじゃねえの！」

「ふふふ、そうしたいのは山々なんだが、あの機械の構造がわかっただけで自分の記憶に関しては何もわからないんだ」

「……バカみたいな話ですね」

「仕方ないだろ！？こっちだって思い出したくても思い出せないんだから！」

「こつちに逆切れする理由がわかんねえよ！！」

「ああもう、喧嘩しとる場合じゃないだろう！」

「この人のいうとおりよ。一旦落ちつきましよう！」

「騒がしいけど楽しそうだね」

「まあそうかもしれないですけど……」

城戸と明久はそこそこ親しげに会話をしていた。

佐伯と立花の二人掛かりで一旦、会話を打ち切る。そこで蓮司とクリスが戻ってきた。

「どういう状況だ？」

クリスと一緒に戻ってきた蓮司は口元をひきつらせる。

その頃、ゼロワンはブーストフォンシーカーを使って町を探索しようとしていたのだが、スカリエッティに止められ、現在メンテナン

スを受けていた。

『オレにこんな不要だ』

「どうして？」

逃げないように見張りとしている光にゼロワンは愚痴る。

『こんなメンテなどしなくても常にオレは最高の状態であり続ける。バディのためにも』

「もしかしてさ。ゼロワンって病院とか嫌い？」

『………そんなことはない』

光の指摘にゼロワンは内心びくびくだが、表に出すことなく平然と答える。

既に光と目を合わせていない時点でバレバレなのだが、そこは光なので気づいていない。

「僕も病院とか嫌いだよ。あの白い空間とか臭いとか」

『オレには嗅覚がないからわからないが……光が嫌いならよほど不快なものだろうな』

「さて、色々あったけれど。作戦を話そうか」

全員が集まり（フォンブレイバーも含む）スカリエッティが地図を広げる。

あの後、メンテナンスを終えたゼロワンとセカンドの協力によりスカリエッティが予測した部分をシーカーで調べてもらった所、見事的中しており不気味な機械が置かれていた。

「機械は全部で6つ。全部を破壊する事ができなくても半分以上破壊する事が出来れば機能停止を起こすことになる……欠点を言つと停止までに少し時間がかかってしまう事なんだけどね」

「残った機械自体はどうすんだよ？邪魔だろ？」

「まず優先する事は町の機能を復帰させる事だよ。このままだと街をモンスターが徘徊したままになるし、僕達も満足に戦えない。実際の話……キャモに僕はまともに戦えなかったし」

「最悪、人質を取られる可能性もある。」

「久保やクリスのいう事も一理ある。俺達がまともな分。向こうは

非倫理的なことを行なう危険性もある。なにより」

「夜さん達を襲撃したっていう男のことだよな？生身で夜さん達とやりあえるって……何者なんだろ？」

明久の疑問に全員が悩む。

そう、久保の話に出てきた男が何者なのかわからない。ゼロワンやセカンドも目撃していない。目撃したのは蓮司、治療中の夜、星、久保という大勢がいるのに、詳しい特徴を述べる事が出来なかった。

「とにかく、その男は遭遇した時に考えるところか……でも、俺達が動いている間、ここが襲撃されるかもしれないぞ。そのときはどうするんだ？」

「時間稼ぎくらいならこれを使う」

スカリエツティがあるものをバン！と机の上に置く。

「これって……」

「紋章がないがアドベントデッキか？」

「正確に言うとベンタラの技術をコピーして作ったレプリカデッキかな。変身することはできるけれど、アドベントカードは一枚もない。倒せる相手は雑魚の戦闘員くらいだよ。今のところ」

「でも、こんなの作れるなんてドクターは凄いよ」

「これを城戸さん、申し訳ないが貴方が使ってくれないだろうか？」

スカリエッツィはデッキを城戸真司へと渡す。

「俺に？」

「可能なら自分で使いたいところなのだが、変身時に体が耐えられなくてね・・・それにここにいる人間の中でそれなりに戦えそうだと思うのが君なんだ・・・こんな事に巻き込んでしまっただけじゃないんだが」

「いいですよ」

城戸真司はスカリエッツィからデッキを受け取る。

「俺もある目的のためにこの世界に来ましたけど、目の前で苦しんでいる人をほうっておく事なんて出来ません。なにより、人を助けるために動くこうとしている人達に協力するのは当然の事ですよ」

「Amigoのことは城戸さんに任せるとして機械の破壊だが、ツーマンセルで行動してもらおう」

蓮司はいくつかの部分ペンで指差していく。

「この地点を久保と須川、この地点を明久とクリスの二人が向かってくれ」

「俺と・・・久保？」

「僕と須川君？」

「クリスと？」

「彼と？」

それぞれが、互いの顔を見る。

この組み合わせで行動することに戸惑いがあるようだ。

「一人で行動すると何が起こるかわからないからな。それに須川はともかく久保はまだ戦いに不慣れな部分があるからな。二人で行動してもらおう。クリスに関しては監視という意味も込めて明久に任す」

「……ああ」

「とはいっているけれど、蓮司はクリスが裏切り者として狙われる可能性があるから、一緒に行動してもらおうって考えているんだよ」  
疑われている事にショックを受けた様子のクリスに明久がそれとなくフォローを入れる。

「だが、蓮司。お前さんはどうするつもりだ？」

「俺は俺で少しやらないといけないことがある」

「とにかく、この作戦はキミ達仮面ライダー達初の共同戦線となる。色々と不慣れなことがあるかもしれないがキミ達ならきつと乗り越えられる。だから必ずこの作戦を成し遂げよう」

「「「「「おうー！」「」「」「」

スカリエツティの言葉にライダーである者達が叫ぶ、藤兵衛は苦笑して、佐伯に至ってはカメラのシャッターを押したほどに輝かしい場面に見えた。

EPISODE 25 (後書き)

現在、活動報告にも書いていますが蓮司のヒロインで悩んでいます。一人は秋山澪、もう一人は須藤星です。

いや、ホントに誤算に近いんですよこれに関しては。

星はただの妹キャラとして蓮司と絡ませていくつもりでした。それがどういうわけか、自分の頭の中でどういうわけか星がヒロイン格に上昇してきているのです。

澪と星ヒロインにするならどっちがいいのだろうか……。

明久も決まっていけないのに、こっちも決まっていけないなんて……前途多難な気がしてきた……。

EPISODE 26 (前書き)

ふう……やりすぎた。

Amigoの入口に三台のバイクと一台のジープが停車していた。バイクには明久、クリス、蓮司の三人が。そして、ジープには須川と久保、そして。

「なあ……これなんだ？」

珍しく須川が顔を引きつらせて尋ねる。

彼の視線の先はジープの運転席。

念のためいっておくが久保と須川は免許を所持してはいない。

運転席にはハンドルがなく、どういわけか待機状態のゼロワンと不思議な機械が運転席に置かれていた。

『本来ならオレはバディの傍にいないといけないのだが、余計な体力を消耗されては作戦に支障が出るからな。光栄に思え、オレの運転を味わえる事を』

「そのセリフやめろお！すんげえ死亡フラグに聞こえるから！」

「ぜ、ゼロワン君だったかい？運転をした経験というのはあるんだよね？」

『勿論だ』

ゼロワンの言葉に二人は安堵の息を。

『シミュレーションなら三回ほど行なった。どれも最後は悲惨な結



「うん、オーケー、行こう！」

二人もバイクに乗って目的地へ向かう。  
それぞれの戦いをするために。

「……………」

蓮司が向かうのは隣町を繋ぐ鉄橋。

しかし、鉄橋の前で蓮司はバイクを止めて立ち止まる。  
なぜなら、そこには一人の男がバイクに乗って待ち構えていたから。

「キミが私の次の対戦相手だな！時間が惜しい、すぐに始めよう」

ヘルメットを外して、ブラット・バレットの素顔が現れる。

蓮司は特に驚かなかった。

偶然、本当に偶然としか言いようがないタイミングでゼロワンがインサイザーとトラストの戦いを録音していた。

最後にブラットだとわかったときはとても驚いた。

だから、自分自身の手で止めたい。

話をしたいと望んだ。

「……………どうした？何もしないというならこっちから」

「ブラット」

蓮司はヘルメットを外して素顔を見せる。

「なん……だと」

「久しぶりだな」

ブラットは目の前の相手が蓮司だったことにショックが大きかった  
ように目を見開いていた。

「春風……蓮司」

「ぎゃああああああああああああああああ死ぬ！マジ  
死ぬ！百パーセント死ぬ！」

「れ、列車が止まっているから安全だけど、走っていたら確実に激  
突していたんじゃないかい……？」

ゼロワン、久保、須川の三人組？は現在、空夢町と他の街を繋ぐレ  
ールの上を走っていた。

ジープはありえない速度を出していて停車している列車に激突する  
かもしれないという恐怖がある。

「そ、それにしても……不思議だ」

「なにがあ！？俺は冷静に物事を判断できるお前がすげええよ！？」

「電車というのは全ての路線が繋がっているはずだ。それはこの街も例外じゃないのにどういいうわけか一台も電車が来ない」

『おそらく、連絡の来ない列車を調査してきた者達もこの結界の中に閉じ込められてしまい、手も足も出せない状況だろうな。急がないと厄介な事になるな』

「や、や、厄介な事？」

『………自衛隊介入だ』

空夢町から離れた街ではゼロワンの予想通り自衛隊が街を包囲していた。

ただ、その自衛隊は普通の自衛隊とは異なる。

ある出来事により対特殊生物対策部隊として組織された自衛隊、名を特生自衛隊という。

特生自衛隊の隊員の家城茜と葉山進は特生自衛隊の所有する特殊戦闘機“しらすぎ”で黒いドームのようなものに包まれている空夢町を見下ろしていた。

「葉山、もう少し近づけない？」

「危険すぎる。これでもかなりギリギリのところまで止まっているんだぞ。これ以上近づいたらあのドームの中で固まっている鳥の仲間

入りだ」

悪態をつきながらも葉山は機体の高度を下げている。  
この事態を解決するためのデータを取るためだ。多少の危険は承知の上だ。

『しらすぎ、データを取り次第すぐに戻れ』

「こちらしらすぎ、了解」

通信機から特生自衛隊隊長、富樫に返事をする。

「これって、怪人とかの仕業なのでしょうか？」

現場の集合テントの前でドームを見ている富樫に関根健二が尋ねる。

「調査中だが……どうやら何かが起こっているようだ。我々の把握できていない何かがある」

富樫の言葉どおり、結界の中では戦いが起ころうとしていた。

「これが結界の装置」

「もっと大きいものだと思っていた」

クリスと明久は設置されている黒い機械を見てぼつりと呟く。  
近づこうとして二人は立ち止まる。

「……男？」

「この空間に動いている人がいるっていうことは・・・」

「・・・・・・・・」

明久とクリスの前に現れたのは二人の男、患者が着る様な白い服のようなものを身に纏い、手には黄・青のメモリを持っていた。

「ガイアメモリ!?!」

驚いている明久の前で二人の男はメモリを体に差し込む。

『LUNA!』

『TORRIGER!』

「到着したけど、難敵登場っていうパターンかな?」

「上等!車酔いで苛々してんだ。発散相手になってもらおうじゃねえか!」

久保と須川の前にも同じように男と女が現れていた。

二人とも無表情のままMとHと書かれたメモリのウィスパーを起動させて体に差し込む。

『HEAT!』

『METAL!』

「なっ！・・・人がモンスターに！？」

『落ち着け、それはドーパントという存在だ。モンスターと違い、必殺技をあてたとしても死ぬ事はない。衰弱して人間に戻るだけだ』

「なら、遠慮する必要ねえ！」

須川、久保、明久、クリスはそれぞれデッキを前に出して構える。デッキからオレンジ、緑、赤、紅色のスパークが発生して腹部にVバツクルを形成して行く。

『KAMENRIDER！』

「よし！行くぞ。アキヒサ！」

「うん！クリス！」

「後方で援護する！いけるね？」

「当然！任せろ！」

それぞれの場所で戦いが幕を開ける。

EPISODE 26 (後書き)

かなり短いですが、投稿したのには理由があります。

なぜかというところ、この話を投稿する事でようやく……ようやく  
アイズが投稿可能になるからであります！

話は出来上がっているのですが……投稿できますが……どうしよう？

EPISODE 27 (前書き)

今回、タイトルつけるなら、友情かそれぞれの戦いかなあ・・・。

「何故、キミはここで動ける・・・」

「それは俺がこれを持っているからだ」

動揺しているブラットに向けて蓮司はウィングナイトのアドベントデッキを見せる。

デッキを見て、ブラットの目が大きく開かれた。

「何故キミがバトルファイトに参加している!？」

「そんなものは存在しない」

ブラットの質問に対して蓮司は淡々と答える。

「これは異世界で作られたエイリアンから人を守るために作られたものであって、お前の言うバトルファイトに使用するための道具じゃない」

「なん・・・だと」

「そして、お前はエイリアンの操り人形として俺の前に立っている。常に紳士的でありながらレースでは容赦なかったブラット・バレットが！自分が認めた相手は戦友ともといっていた男が！常に試練に打ち勝ってきたブラット・バレットが悪の手先とはな！」

「だったらどうしろというのだ!？」

ブラット・バレットにしては珍しく弱音を吐き出す。

「今のままではレーサーとして復帰する事もできない。証拠の映像を手に入れなければ私はレーサーとしての人生を失ってしまうのだ！モトクロスが私にとってすべてなのだ！それを失ったら私に何が残るといえる！答えろ！春風蓮司！」

「レーサーとしての人生を取り戻したいなら俺が協力してやる！お前のレーサー人生を取り戻す事くらい造作もない……だが、“今の”お前のために俺は協力することは出来ない」

「……どういうことだ！」

「お前にとつてレーサーとしてのブラット・バレットが全てなのか？落ち着いて周りを見渡してみる。本当にレーサーとしてのお前しかいないのか？」

「何を……」

「よく考えろ！」

蓮司に言われてブラット・バレットはレースとしての事以外を考え始める。

すると、どういいうわけかレーサーとしての自分以外にもあった……。

『それはおいしいのか？』

アメリカのとあるレース場、

ブラットは会場の外で白い塊を食べている少年を見つけて尋ねる。  
少年はもぐもぐと塊を口の中に放り込んでから口を開く。

『おにぎりを知らないのか？』

『ONIGIRI?』

『JAPANの伝統的食事だ。俺の大切な友人が握ってくれたものだがあんたも食べるか？』

『大切な友人の作ってくれたものなのだろう？私が食べてもいいのか？』

『別にいい、と俺の親友なら言うさ。それに腹減っていたから負けましたなんていうセリフは同じレーサーとして聞きたくないしな』

『レーサー……キミがか？』

『この年齢でレーサーをやっちゃいけないなんていう事はないだろう？それに油断するなよ。油断したから負けましたなんてことも聞きたくないしな』

『……いただきます』

ブラットは残っていた二つのうち一つを手に取り、口の中へと放り込む。

すると口元を縮めるようにしてブラットは置いてある水を飲んだ。

『な、なんだこれは!』

『……あ、梅干入りを食べたのか。でも、上手いだろう?』

『……ああ……最初は酷かったが、確かに上手い』

『そういえば、自己紹介がまだだったな。俺の名前は春風蓮司だ』

『私の名前はブラット・バレットだ』

これが彼との出会い。

しかし、もう一つ続があった。

あるレースで優勝してその帰宅途中、ブラットは強盗に襲撃されてしまった。

強盗の動きが稚拙だったから、あっさりと撃退できると思っていたのだが、あるうことか近くを通りかかった女性を人質にとった。

人質をとられてはどうしようも出来ない。

焦っていると彼は突然現れた。

『お前の罪を数えろ』

日本語でなにかをいい、背後から強盗のナイフを叩きとして意識を刈り取る。

『何故、キミがここにいる?』

『偶然、後はレースに優勝したって聞いたからこれを届けに、粗品だけ』

彼が差し出したのはラッピングされた箱。

強盗に襲撃された後にプレゼントを渡すのか?とブラットは笑って

しまった。

そして、現在。

自分お前に立ちほだかつている友は悲しそうな表情で真っ直ぐにコ  
ツチを見ている。

悪の手先となっている自分を。

レーザーとしての人生を取り戻すために他者を蹴り落とそうとして  
いる自分を。

「もう一度聞く………。このまま悪の手先のままにいるつも  
りか？」

「……………」

「なんか、大事な話している所悪いけどさあ？俺あんたに用事があ  
るからとつと消えてくんない？」

「なっ!？」

ブラットを投げ飛ばして男が現れる。

星と夜の二人をまるで赤子みたいに相手をして、蓮司に一撃で倒さ  
れた男が現れる。

その手には緑色の骨が埋め込まれたガイアメモリが握られていた。

「さあ、殺し合いという名の祭りを始めようか！」

『CYCLON-!』

サイクロンメモリを体に差し込んで男はサイクロンドーパントに変身した。

「……どこまでも人の邪魔をするヤツだな」

蓮司は眉間に皺を寄せながらアドベントデッキを取り出して構える。デッキから青いスパークが発生して腹部にVバツクルが形成され、叫んでデッキをバツクルにセットした。

『KAMEN RIDER!』

青いスパークに包まれてバイクごと蓮司はウイングナイトへ変身する。

変身が終えると同時にバイクも形を変えてウイングサイクルへと姿を変えた。

アクセルを回してサイクロンドーパントへ突き進む。

サイクロンドーパントは掌から風の塊をウイングナイトに向かって放つ。

「……………」

しかし、ウイングサイクルを右へ左へと動かすようにして風の塊を回避して行く。

風の塊が見えているわけではない。

ただ、レーサーとして腕や経験をつんでいる彼は風の中を突き進んでいると不思議とわかってしまうのだ。

おかしな風がこっちへ飛んでくると。

『これでも……………くらってるおおおお!』

サイクロンドーパントは掌から大量の風の塊を放つ。飛んでくる風の塊に対してウイングサイクルのブレーキを押す。後輪が白い煙をあげてドリフトして回転していく中、飛んできた風の塊を腰のブラックバイザーで叩き伏せる。バイクの車輪が白い煙を噴き上げている中でウイングナイトはさらに速度をあげた。そして、

『ぐおおおおおおお！？』

ウイングサイクルの前輪にサイクロンドーパントが激突する。激突したサイクロンドーパントだが、そのまま空中を舞うことなくウイングサイクルにゴリゴリと押される形で後退していき、黒い機械に叩きつけられた。

『が……………は……………』

ドーパントとして超人的な耐久力を持つようになったわけだが、この一撃はよほどきつかったのだろう体のいくつかの部分が痙攣をしている。

「……………悪いな」

仮面の向こうから普段の春風蓮司とは思えない低く重たい声が響いた。

「俺はまだ師匠達と違って人間がそこまで出来ていない。だから」

大事な家族を傷つけたお前を許すわけには行かない。

『ふ……ざけるなああああああ！』

両手に風をまとってウィングサイクルを一気に押し戻す。

しかし、ウィングナイトはバイクから飛んで上空に舞い上がりブラックバイザーにアドベントカードをベントインし、ウィングランスをそのままサイクロンドーパントへと突き刺す。

『がつ！』

「けれど、復讐に身を任せるなんてことはしない……あなたは“復讐者”としてじゃなく“仮面ライダー”として倒す！」

『FINAL EVENT』

『ふざけるなあ！たかが人間ごときが俺を倒すだとお！』

風の弾丸を大量に放っていくが飛翔斬の状態になっているウィングナイトには当たっても跳ね返るばかりだ。

さすがにヤバイと判断した時には既に手遅れ。

漆黒の刃に包まれてサイクロンドーパントは爆発して橋のほうへおちていった。

着地すると同時に上空からサイクロンメモリが落下してくる。

「……ふん」

キャッチしてメモリを手の中で握りつぶした。

「いやあ、おめでとう」

「っ！」

背後から聞こえた声に振り返ると、ギンという音が響き渡る。

「あつちいいいいいいいいいいいいいいいいいい！！？」

その頃、インサイザーとトルクは目の前のドーパントに苦戦？をしていた。

「すまない……まさか射線上にキミがくるとは思っていないくて」

「気をつける！……っ」と

ヒートドーパントの繰り出す拳をシェルディフェンスで受け止めてインサイザーは距離を置く。

そこにすかさずトルクがギガキャノンで攻撃を放つ。

攻撃をよける事ができずヒートドーパントは後ろへ吹き飛ぶ。

ヒートドーパントと入れ替わるようにしてメタルドーパントの拳がインサイザーを狙おうとするが、ギガキャノンの砲撃がメタルドーパントの胸板を撃ち抜く。

中々のコンビネーションが発揮されていて二体のドーパントは苦戦をしている。

「須川君！止めだ！」

「わあってるよー！」

『FINAL EVENT』

インサイザーのの前にボルキャンサーが現れ、インサイザーを投げ飛ばす。

ヒートドーパントは攻撃するために掌に炎を集めて放とうとした。しかし、インサイザーピンチのたたきつけた一撃が早かった。悲鳴を上げることなく地面に大きくバウントする。

「久保オ！」

インサイザーは地面に着地すると同時に大きく横に飛んだ。

『FINAL EVENT』

横に飛びのいた先にはインサイザーに攻撃を仕掛けようとしたメタルドーパントの姿があり、メタルドーパントの視線の向こうにはマグナギガにマグナバイザーを差込み、必殺技を放てる状態にいるトルクがいた。

メタルドーパントが何かの仕草をするまえにトルクの手が引き金を压した。

マグナギガの胸、頭部、足、手から大量のミサイルや光弾が放たれメタルドーパントを包み込む。

二つの爆発が響き渡る。

爆発が収まる頃には二人の人間が地面に倒れ込み、赤と銀のメモリが砕け散った。

「うわっ！」

その頃、ドラゴンナイトとステイングの二人はルナドーパントとトリガードーパントの猛攻に必殺技を放てないでいた。

「アキヒサ、大丈夫か？」

「なんとかね……にしてもルナとトリガーかぁ……特性しているから慌てる必要ないんだけど、敵として出てくるとは思わなかったなあ」

尊敬する師匠達が使用するものと同じ名前に戸惑ったがすぐに思考を戦闘に戻し、顔を上げるとルナドーパントの手の鞭が飛んできてドラゴンナイトの腹部を掴んで空高く持ち上げる。

「アキヒサ!？」

ステイングがエビルウィップで助けにいかうとするが、それより早くドラゴンナイトは動く。

『ATTACKVENT』

『グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!』

ドラグレッダーが現れて、巨大な口でルナドーパントを噛み砕くように捉えて地面に何度も叩きつける。

「よっ……」

「あ、アキヒサ……大丈夫？」

「うん……」

デッキからアドベントカードを取り出してドラグバイザーにベント

インする。

ソレを見て、トリガードーパントの攻撃を防いでいたステイングもエビルバイザーにアドベントカードをベントインした。

『STRIKEVENT』

『COPYVENT』

トリガードーパントは腕の銃で攻撃をしているが、まだ慣れていないのか命中率が悪い。

弾丸が飛んでくる中、ドラゴンナイトの右腕にドラグクローが装備されると同時にコピーされたドラグクローがステイングの右腕に装備された。

「行くよ。クリス」

「ああ」

二人は同時にドラグクロー・ファイヤーを放つ。

二つの火球は地面に叩きつけられていたルナドーパント・トリガードーパントの二人を包み込んだ。

爆発の後、上空でTとLのメモリが粉々に砕け散る。

「っ！」

いきなり目の前に刃が現れたことにウィングナイトは戸惑いつつもウィングランスで弾き飛ばす。

何時現れたのだろうか、目の前には一人の女性が立っていた。

ショートに髪に全身をピッタリと包み込むような青いスーツを纏い、手には刃のようなものが装備されている。

女性の足元には先ほどサイクロンドーパントに変身した男が倒れていた。

「いやあ、中々に面白いもんを見せてもらったよ」

パチパチと手を叩きながら白衣を着た中年男性が現れる。

「成る程、成る程、人間にしては中々の強さのようだね。解剖してみたいよ」

「何者だ。お前」

ウイングナイトが尋ねるが白衣の男は答えず女性の足元で意識を失っている男の頭を蹴り飛ばす。

「貴様っ」

駆け寄ろうとするウイングナイトに目の前にいた女性が武器を構える。

『STRIKEVENT』

「ふん！」

いきなり背後からトラストがメタルホーンを地面に叩きつけた。

何を、と振り返ると何時の間にそこにいたのか、円筒形の機械に蜘蛛の足を付け足したようなロボットがバチバチと火花を散らしている。

「ちつ、仲間のおかげで命拾いしましたか、まあいい。今回はコレの回収のために足を運んだので失礼しますよ。三番さん。お願いします」

「はい。ミスター」

女性は男と白衣の男の手を掴むと姿が消えた。

敵のいなくなった場所、そこにはウイングナイトとトラスト。春風蓮司とブラット・バレットの二人。

「ブラット……」

「何が真実なのか……わからない」

ブラットが仮面の中で静かに呟く。

だが、蓮司は何も言わずに続きを待つ。

「だが、友を傷つけてまで栄光を追い求めるような男にブラット・バレットはなりたくはない。今いえるのはこれだけだ」

「……お前らしいな」

ウイングナイトは……蓮司は仮面の中で笑った。

EPISODE 27 (後書き)

書いていて改めて思った。

キャラの性格がダイブ・・・変わってしまったている！

ブラットの場合は僕の個人的印象がしみこんでいるし、須川に至っては・・・不良になっているよ・・・。

さて、この章で脱落者が出る云々いつていましたが、なくなるかもしれません。

色々面白いネタが浮かび上がってきているので、

やばいよ、ネタ仕込みすぎた。

明久達が奮闘している頃、喫茶Amigoの近くで城戸真司は立っていた。佐伯達には外に出ないようにいっておいた。なぜなら敵が近づいているから。

城戸真司の前にストライクが現れる。

「王蛇!？」

「王蛇ア？俺の名前はストライク。仮面ライダーストライクだ。どうして人間が動いているのか知らないが、そこを退け」

「ダメだ」

ストライクが威嚇でベノバイザーを突きつけるが城戸真司は下がることなくそれどころか前へ進んで拒否をした。

「ほう……なら痛い目を見る」

一撃で終わらせるつもりだったのだろう。

ストライクの拳は普通の人に捉えられない速度だった。

そう、普通の人には。

「なに!？」

「悪いけど、ここから先には絶対に行かせない!」

ストライクにけりを入れて城戸は青いデッキを構える。

デッキから水色のスパークが発生して腹部にVバツクルが形成され

た。

「変身！」

叫んでデッキをバツクルに入れる。

デッキが高速回転して、変身した。

その姿を見てストライクは声をあげて笑う。

「ふ・・・はははははは！なんだその姿！そうかぁ・・・その姿からして契約モンスターがいないのか！」

思い出していただく、このデッキはベントラで製作されたというわけではない。

ジェイル・スカリエッティがウイングナイトとドラゴンナイトのデッキの技術を模倣して作成されたものだ。

しかし、いくらスカリエッティが優秀だとしてもデッキのすべてを把握できたわけではなく。特にアドベントカードにおいてはどのような技術が使われたのかとても解明できず、デッキの中にカードは一枚もない。

それにデッキ自体も謎の部分があったため、スカリエッティの知識をフルに導入しても完全にコピーするに至らなかった。

「確かに、これは契約されていないからキミ達と比べたら弱いかもしれない」

でも、と城戸真司は呟く。

「今戦っている彼らのことを思って、心配して自分も力になりたいと望んだ一人の人間が作ったものだ。その気持ちをバカにする事は

許さないし、あつていいわけがない！」

ライダーの手に炎が収束し、アドベントカードが形成された。アドベントカードを左手のバイザーにベントインする。さらにデッキが上から上書きされたかのように龍の紋章を刻んだ、ドラゴンナイトと酷似したモノへと姿を変えた。

『SURVIVE』

体を炎が包み込んでブランク体の姿がドラゴンナイトへと変わる。否、ドラゴンナイトではない。

この世界とは違う世界、13人のライダーが自身の願いをかなえるために最後の一人として生き残るために起こった戦いの中で誕生した仮面ライダー。

そして、今はある世界の大切な子を救うために、彼を救うための手段を探すために戦っている仮面ライダー。

名を龍騎。

そして、今の龍騎は“サバイブ(烈火)”のカードにより強化された姿。

仮面ライダー龍騎サバイブ。

「っしやー！」

叫んで龍騎サバイブはストライクにキックを入れる。

キックを受けながらもストライクはベノバイザーで攻撃を仕掛けた。ベノバイザーを手で弾きながらドラグバイザーツヴァイにアドベントカードをベントインする。

『SWORDVENT』

ドラグバイザーツヴァイをソードモードに切り替えてストライクへ攻撃していく。

ストライクはベノバイザーで弾いたりするが龍騎サバイブのパワーが桁違いすぎて次第に押される。

しかし、ストライクは仮面の中でにやりと笑う。

気づかれないように背後からキャモが襲いかかるうとする。

龍騎サバイブはドラグバイザーツヴァイにカードをベントイン。

『ADVENT』

「ぐおおおお！？」

ドラグランザーがキャモに体当たりをする。

攻撃を受けたキャモは地面に叩きつけられた。

「ちっ……ん」

ストライクの前に映像パネルが現れて何かよくわからない文字が表示されていた。

「どうやら撤退するしかないようだ……くそっ、折角楽しめる相手を見つけたというのに」

悪態をつきながらストライクは撤退した。

キャモもふらつきながらクリアーベントで姿を消す。

変身を解除して、城戸真司はデツキを見る。

たった一回、たった一回だけサバイブのカードを使用しただけというのに彼の手の中にあるアドベントデツキは亀裂が入っていた。

「……もう少し、あの人の想いに答えられるように」

デッキに淡い光が集まる。

「さて、後はこのふざけた機械を壊すだけか」

「僕が壊すよ」

倒れた二人を隅に寝かせてインサイザーとトルクの二人は機械を見る。

『その機械は今のお前たちなら簡単に壊せる。すぐに壊せ。不愉快だ』

「よし、僕がやるよ」

「任せた」

そういつてインサイザーはジープのほうへ歩いていく。  
トルクはマグナイザーを機械に向けて連射する。

光弾が複数の穴を空けるとズウウウンと機能を停止した。

「ドーパントを倒すと同時に……機械壊しちゃったね？」

「ああ……無我夢中だったし」

ドラゴンナイトとステイングの前には壊れた機械の成れの果てがあり、ぷすぷすと煙を上げている。

ウイングナイトはブラックバイザーを機械に突き刺した。  
バチバチと火花を上げて機械は壊れる。

「その機械が原因だったのか？」

「ああ、これで元……ん？」

結界がまるでガラスが割れたかのように崩壊して行く中、ウイングナイトは上空から大量のヘリが飛んでくる。  
民間ヘリではなく、軍事ヘリだ。

「なっ！」

「なんだ!？」

ヘリから大量のロープが投下されて、そこから銃を持った自衛隊がウイングナイトとトラストを囲む。

『大人しく武器を捨てて投稿しろ!』

銃をこちらに向けながら自衛隊員の一人が叫ぶ。

「どうする……? 普通の人間相手に戦うわけにはいかないぞ?」

「かといって捕まるわけにも行かない……わけで、ちょっと手を貸してもらつぞ」

「ああ」

ひそひそと話しながらウイングナイトはアドベントカードをトラストに渡してベントインしろという。

「いくぞ!」

ブラックバイザーにカードをベントインした。

『NASTYVENT』

『TRICKVENT』

ブラックウイングのソニックウェーブに自衛隊員達は耳を抑えて苦

しむ。

その間に、分身したウィングナイト達が四散していく。追いかけていく自衛隊員達は鏡の中に入っていくトラストとウィングナイトに気づかない。

「クリス！しつかり捕まってる！」

「あ・・・ああ！」

ドラゴンサイクルに乗ってステイングとドラゴンナイトは追跡してくる自衛隊の装甲車から逃げていた。

装甲車の窓からライフルを構えて威嚇する隊員達、ドラゴンサイクルを降りるように叫ぶが、そんな言葉を聞くつもりはない。

「曲がるよ！」

角を曲がって、ドラゴンナイト達の姿が消える。

装甲車が角を曲がった時にはドラゴンナイトとステイングの姿はない。

しかし、予測していなかった事が次の瞬間起こる。

「なっ・・・ぐああああ！」

装甲車が転倒して大きな音を立てた。

「な、なにが・・・」

自衛隊員の一人が車から這い出て激突した相手を見る。そこにあっただのは無人バイク。

車輪が炎を纏っていた。

バイクはエンジンを蒸かしながら装甲車へ突っ込んでいく。このままでは、と目をつぶるが衝撃が来ない。

不思議に思っただけ顔を上げると無人バイクの姿がなかった。

「アキヒサ！無茶だ！」

後ろでステイングが叫ぶ。

ベントラへ無人バイクを押し込んだのだが、馬力は相手のほうが上らしくドラゴンサイクルが悲鳴を上げている。

「でも、あのままじゃ。あの人達が危ない。僕たちを追いかけてきていたけど、あの人達に悪気があったわけじゃない・・・だから僕は助ける。たとえ」

裏切られたとしても。

彼の思いに答えるかのように馬力負けしながらもドラゴンサイクルは必死に無人バイクを押しさえ込んでいた。

このままいけばなんとかると思っているとバイオグリーザがドラゴンサイクルにたち当たりする。

「わっ！」

バイクから二人は放り出され地面に落下する。

運転者がいなくなったドラゴンサイクルを無人バイクは前輪が持ち上がり、そのまま前輪をたたきつけた。

バキヤツとフレームが歪む。

追い討ちを掛けていくかのようドラゴンサイクルを壊していく。

「やめろおおおおおおおおおおお！」

『FINALVENT』

ドラゴンライダーキックを無人バイクへ放つ。

しかし、無人バイクは攻撃を避けて近くの鏡を通って姿を消す。

「……………」

「アキヒサ……………」

ドラゴンナイトは壊れたドラゴンサイクルを抱きかかえるように起こす。

「戻ろう、おやっさん達が心配してる」

「ああ……………」

「そうか、こいつは自分の人生を全うしたか」

Amigoのガレージに半壊したドラゴンサイクルを見て立花藤兵衛は呟く。

彼の前には明久と城戸真司が立っついていて同じように半壊したドラゴンサイクルを見ている。

「おやつさんでも・・・治せない？」

「無理だ・・・修理してやりたいが心臓部といえる部分が完全に死んでいる。ドラゴンサイクル自体を復活させる事は不可能だ」

「・・・・・・・・そう・・・・・・・・ですか」

「吉井君・・・」

「だが、こいつの意思を継いだバイクは作る事ができる」

「え・・・・・・・・？」

立花藤兵衛は壊れたドラゴンサイクルのフレームを触りながら微笑む。

「最近、新型エンジンが開発できてな。これから、ドラゴンサイクルと同等、それ以上のバイクをお前のために作る・・・このバイクの意思を無駄にしないために」

「・・・・・・・・おやつさん」

でも、と明久は壊れたドラゴンサイクルを見る。  
壊れてしまっってはもう使うことが出来ない。

最高のバイクを失った・・・、明久がつらそうな表情をしているのを見て城戸真司は壊れたドラゴンサイクルに触れる。  
直後、ドラゴンサイクルが輝きに包まれて普通のバイクへと形を変えた。

「え・・・？」

「吉井君。このバイク・・・俺がもらってもいいかい？」

「城戸さんが？」

「俺が使うわけじゃないんだけど、こことは違う世界で必要になると思うんだ」

城戸真司の脳裏に蘇るのは自分と同じ龍騎となってモンスターと戦う竜也。

そんな竜也を支えようとする月宮あゆ。

彼と同じ仮面ライダーとして戦う相沢祐一。川澄舞。北川潤。久瀬シユウイチ。虎水サトル。斉藤ミツル。  
仮面ライダー達を支えようとする者達。

「彼らの力になると思うんだけど・・・ダメかな？」

「いいえ、使ってください」

首を横に振って明久は微笑む。

「もう、僕が使えないけれど。誰かがこのバイクを使ってくれらるというなら・・・正しい事のために使ってくれるっていうんでしたら喜んで渡します。役立ててください」

「……ありがとう」

城戸真司は明久の手を握り、明久も彼の手を握り返す。  
その光景を立花藤兵衛は見ていた。

「・・・・・・・・あ」

須藤星が目を開けると最初に目が入ったのは白い天井。

「起きたか？」

そして、蓮司の顔だった。

「レン・・・・私は」

「無事そうで安心したぞ」

蓮司はホツとした表情をして星を見つめている。

星は申し訳なさそうな表情を浮かべていた。

「すみません。レンに迷惑をかけて」

「そんなことはないさ。どちらかというと俺が迷惑をかけてばかりだからな。お前には」

蓮司は笑みを浮かべるが、どこか無理やりな気がした。

実際の所、蓮司は無理やり笑みを浮かべている。

戦いの連続で疲れて、みんなと同じで休まないといけないのだが、蓮司は星が心配ですつと付きっ切りで見守っていた。

もし、目を覚ました時、彼女の夜と同じで星も何か思っている事があるかもしれない、また自分に迷惑をかけてしまうのではないかと

感じているなら論したいと。

しかし、星は何も思うところがないのか聞いてこない。だが、星も疲れているのかそこまで気づかない。

「そんなことないです・・・レンにはあの時からずっと助けてもらってばかりです」

「・・・そうだと・・・いいな」

レンは“あの時”からずっと、こうして手を握ってくれる。

“あの時”からずっと私のことを家族といってくれる。

“あの時”からずっと、こうして何かあったとき一番に駆けつけてくれた。そして、傍にいて手を握ってくれた。

何も理由を問い詰めるような事もせず。ただ、傍にいてくれた。

たったそれだけでどれほど救われただろうか？

どれほど、安らぎを感じただろうか？

どれほど・・・愛しいと思っただろうか？

数え切れない想いに心が一杯になっていく。

だが、その想いに彼が気づいてくれるだろうか？

出来るなら……。

「少し休むといい、まだ疲れているだろ？」

「はい……すみません……」

しっかりと蓮司の手を握ったまま、星は眠りについた。

そのまま蓮司も椅子にもたれ、深い眠りにつく。

彼女達が寝ている別の部屋では須川、久保、明久、ブラット、クリスがぐったりと床に倒れて眠っている。

そんな彼らに立花藤兵衛が毛布を被せていく。

時間からしたらほんの数時間程度の騒動なのだが、予想以上に神経をすり減らし、肉体を疲労させたのだろう。みんなは起きる気配がない。

「ご苦労さん。ゆっくり休め」

子どもを見守る父親のように藤兵衛は微笑む。

佐伯風華はまた来ますねといって店を出て行き、スカリエッツィは

夜の怪我の具合を見に行っている。

短くも長い異変がようやく解決して、全員が眠っていた。  
いくつかのモヤモヤを抱えていながらも。



そして、彼らは文月学園を無断欠席扱いとなって後日学園長室で叱られる事となった。

## EPISODE 28 (後書き)

さて、次の話ですが、漣と星、どっちかがヒロインの話になります。どっちがいいかな？

そして、城戸真司についての補足を。

今回で彼の登場は終わりです。

龍騎鯖威武さん、お返ししますね。

城戸真司が何故異世界を旅しているのか、それは龍騎鯖威武さんの作品を読んでください。

そうすれば、だいたいはわかってもらえるし、何より今回、名前だけが登場した竜也の活躍も見ることが出来ます。

どれだけ面白く構成が素晴らしいかなど述べたらキリがないので、とりあえず読んでください！そして、もう一度、今回の章である真実をくを読み直してください。

どれだけ、僕がへたくそなのかわかってしまいます………  
自分で自分を貶しても虚しいだけです。

一応情報を。ドラゴンナイトの二年後の世界を描く新・仮面ライダーファイズAB！がスタートしました。

まだ、一話しか投稿していませんが、こちらで登場したキャラが既に登場しています。

更新は亀ですが……。

それでは、次回の話でおあいしましょう。

EPISODE 29 (前書)

...

街が停止した騒動から数日後、モトクロスの大회를2日後に控えたある日。蓮司と明久の二人は須川亮、久保利光、クリス・ラミエル、ブラット・バレットの面々を呼び寄せてアドベントデッキの緊急避難システムもとい、敗者がどうなるかについて話し始める。

「ベント？」

「ああ、ライダーが他のライダーファイナルベントや一定のダメージを受けた場合に起こる現象で、アドベント空間と呼ばれる場所へ強制転送される」

「つまり死ぬ事はないというわけなのか？」

「死ぬ事はないんだけど、そこから戻る事も出来ないんだ。戻せる人が僕達にはいない」

「それは敵も同じなんだがな」

「その事を僕達に話してどうしろというんだ？」

クリスの言葉に蓮司が真剣な表情をして告げる。

「今ならまだ、仮面ライダーから一般人に戻る事ができる。敗北したら二度とこの世界に帰って来れない」

「つまり、覚悟を決めるということか」

「ブラットさんの言うとおりかな……。自分の願いをかなえる為に戦いを続けるなら僕と蓮司はみんながどうなっても止めない。もし、僕たちと同じ理由で……。ゼビアックスを倒して両方の世界を救おうというならちゃんとした覚悟で……。戦ってほしいんだ」

「なら、僕はもう決めている」

クリスはステイングのアドベントデッキを机に置く。

「僕は敵の操り人形として戦うヒーローじゃない。人を守るために・  
・両方の世界の人達を守るために」

「私も決まっている」

トラストのデッキを置く。

「私は自分のために戦うつもりだった。だが、今は友のために。友を守るためにこのブラット・バレットは戦う」

「吉井達に言われるまでもねえよ」

「僕達も気持ちちは同じだよ」

須川と久保もインサイザーとトルクのデッキを置いた。

「そっか……。ありがとう」

「聞くまでもなかったみたいだな」

蓮司と明久は笑って、同じようにアドベントデッキを置く。  
今ここに固い絆で結ばれたライダーの仲間が結成された。  
しかし、誰が予測できようか？  
これから起こる壮大な陰謀に。

夜の10時、薄暗い公園の中を残業を終えた女性が歩いていった。  
仕事で長引いて早く帰りたいという理由で近道である公園を通って  
いる。

さすがにこの時間帯に公園にいる人はいない。人気のない公園ほど  
不気味なものはないあんなと思いつながら女性は速度を上げて公園を  
出ようとしていた。

パキッ

背後から枝が折れる音が聞こえる。

ビクウ！と女性の体が大きく震えて後ろを振り返った。

しかし、後ろには何もいない。誰もいない。

気のせいだったようだ。

そういえば、と女性はこの付近で発生している事件のことを思い出

す。

女性だけを狙った連続殺人事件。

狙われているのはすべて女性らしく、マスコミは近代のジャック・ザ・リッパーと騒いでいる。

まさか、自分の前に？現れたのかもしれない。

考えたらきりのない恐怖に体が支配されて女性は公園を出て行こうと駆け出そうとして命を失った。

そう、死んだのである。

突然、目の前で体を切り裂かれて。

服が破けてブラが見えるが女性は何もいう事ができない。

喉も切り裂かれて声を出す事も出来ないから。

斬られた箇所から大量の血が噴水のようにあふれ出ていく中、女性は目の前にいる殺人気を見て思う。

こんなの、警察が捕まえるなんて……無理だ。と。

そこで女性は意識を手放した。

手放した後、女性が目を開けることは二度となかった。

最後に聞こえたのは呪詛。

何度も繰り返される呪詛。

死ぬ直前まで彼女に刻み付けてやろうとする呪詛。







EPISODE 29 (後書き)

まあ、身に覚えのある人がいるかもしれませんが、ある話に入ります。

今回は日常的な部分の会話になる……と思います。

「・・・・・・・・ストーカー・・・・・・・・？」

ある晴れた日の喫茶 Amigo で春風蓮司は聞いた言葉を繰り返す。

「・・・・・・・・うん」

頷いたのは長い髪と大人しげの姿が印象の桜ヶ丘女子高等学校に通っている“友達”の秋山澪。

「ストーカーか、それなら暗い夜道とかにならない前に友達と一緒に人が多い通りを歩いた方がいいな。それと、盗聴器とか変なものが仕掛けられていないのか・・・っ!？」

真面目にストーカー対策を口に出した蓮司は目の前で泣き出した澪を見て慌てだす。

「お、おい？どうした・・・・・・・・俺は何か変な事でもいったか!？」

「い、いや・・・・・・・・真面目に話を聞いてくれたのが・・・・・・・・嬉しくて」

「・・・・・・・・どういうことだ？」

「律達に相談したら・・・・・・・・全然信じてくれなくて、クラスメイトの和に話しても」またあの人がつけているのかしら？釘刺してくる

わ』って人の話を聞いてくれなくて……」

苦労しているんだなと思いつつ、一体どんな学園生活を送っているのだろうか？と蓮司は疑問に思ったが聞かないことにした。

自分もあまり人に言えるような学校に通っていないからだが……。

「とりあえず。真剣な話をするが人の視線とかそういうのを最近感じるんだな？」

「うん。最初は気のせいだと思ったんだけど……日に日に視線を感じる事が多くて」

「それだけだと警察に駆け込むのは無理だし……。護衛と称して傍にいても女子校に入るわけには行かないからな……」

「う、護衛!？」

「落ち着け、単に提案として出しただけでそこまで酷い状態というわけじゃない……が」

「蓮司君。ちよつといいかい？」

対策を考えていた彼のところにスカリエッティがある物を持ってやっってきた。

「ドクター、それは？」

「ん……ああ。コレの事で相談があつてね。大事な話の途中かな？」

「ドクター、それはもしかして新しいやつか？」

「うん・・・ようやく4番までのロールアウトが出来てね。それで相談というのがこの子を所持者を早急に決めてほしいという事なんだ。完成したけれど、セカンドと違って個性豊かだから可能なら女の子だといいいという話を」

「丁度良かった」

バシン！と蓮司はスカリエッティの肩を叩いて澪にコツチにきてくれという。

「？」

頭上に？マークを浮かべながら澪はスタッフルームという名の部屋へと連れて行く。

「蓮司？一体何か・・・」

「俺が女子校に入る事はできない。そこで学校内での異変などに対処できるキミの相棒を渡そうと思う」

「・・・・・・相棒？」

「これだ」

蓮司が見せたのはリライアブルピンクのケータイ電話。

しかし、澪もケータイ電話は持っているので相棒といわれても困るという表情をしているのに蓮司は気づいて説明を付け足す。

「漣がケータイを持っているのはわかってる。このケータイはあくまで護身用として持っておいてほしい。それとこの子と普通に接してやってほしい」

「えっと・・・ケータイと接しろって」

『ほう、四番目がロールアウトされたのか』

「・・・・・・・・・・・・・・・・っ!？」

「ゼロワン、いきなり現れるな」

蓮司はいきなり現れたゼロワンに驚きつつも掌に乗せてスカリエツティの手にある四番目のフォンブレイバーフォースを見る。

「ここにいるゼロワンと同じでこのフォースも・・・・あれ漣？」

漣が全く返事をしない事に不思議に思った蓮司が視線を向けるとフリーズしていた。

クリスは明久と一緒に765プロへと足を運んでいた。

どうしてかというのと、知り合いのライダーの中で仕事がないのがクリスだったからというのが一番の大きい理由かもしれない。

クリスは軍人として働いているつもりで、日本に来るまではゼイビックスの配下として何も疑うことなく働いていた（実際に給料も

貰っていたので疑う事もしなかった)のだが、給料がストップされたので新しい働き口?として蓮司と共にこれない時の護衛としてクリスを765プロで雇ってもらおうという話になったのである。

「というわけなんですけど・・・プロデューサーさん。返答を」

「いや・・・断る要素がまるでないんだけど。吉井君達が大丈夫っていつているし、何より経歴が凄くて否定する要素がないんだけど」

プロデューサーはクリスの履歴(日本語)を見て顔を引きつらせていた。

「あの・・・もし、迷惑でしたら」

「い、いや!迷惑じゃないんだ。むしろ頼もしい!」

プロデューサーの言葉に明久とクリスは安堵の表情をする。

「・・・すいません。喉が渴いたから水を飲みにしてもよろしいですか?」

「あつちに給湯室があるんで、どうぞ」

「はい」

クリスは立ち上がって給湯室のほうへと歩いていく。しかし、プロデューサー達は失念していた。給湯室に誰がいるのかを。

「……ん？」

クリスは給湯室の入口で女の子がスコップを持って身構えているのを発見して一体、どうしたのだろうか？と思って声をかける。

「あの……どうしました？」

「え……あ、あの……」

振り返らず手がぶるぶると震えて給湯室を指差しているのを見てもしかしてと思う。

「わかりました。任せてください」

クリスは横をすり抜けて机におかれていた新聞を丸めて集中した。

「そこだ！」

バチンと給湯室で何かが潰れる音がする。

「よし」

新聞を置いて、ティッシュで“潰れたモノ”を包み込んでゴミ箱の奥底に放り込んでから丸めた新聞を放り投げた。

「もう大丈夫ですよ」

「あ、ありがとう……」

「どうしました？」

クリスは目の前で顔を引きつらせている少女、萩原雪歩に首をかしげる。

雪歩はすぐに悲鳴をあげようとして、あれ、と気づいた。

「（なんで……背後から話しかけられて男の人って気づかなかつたんだろう？）」

そう、雪歩は昔から男の声を聞くだけで“男”と判断できて体が拒絶反応を起こしていたのにどういふ訳か目の前にいる男の人にそれを感じる事がなかったから戸惑っている。

「あの……どうしました？」

「いえ、あの……ごめんなさい」

「驚かせたのは僕のほうみたいですから謝らないでください……えっと」

「雪歩です。萩原雪歩」

「クリス・ラミエルです。よろしく、雪歩さん」

初対面で名前呼び！？と雪歩は内心驚いたけれど、さらに彼が何のためらいもなく手を差し出してきた事に、つい、条件反射で雪歩はその手を握り締める。

「クリスさん？どうしまし・・・」

プロデューサーは目の前の光景に驚いて口が半開きになった。

なぜなら、男性が苦手（プロデューサーに閉してはようやく慣れた）な雪歩が進んで？男性と握手なんてしていたら驚く以外にどうすればいいのだろう？と思いつつ居た場所に戻る。

「そういえば、律子さん見ませんね。どうしたんですか？」

「律子は色々と忙しくて今いないんだ。それにみんなも近々文月が」

「はい？」

「え、ああ！いやなんでもない！」

慌てて口ごもるプロデューサーに明久はただ首をかしげた。

「漣、落ち着いたか？」

「うん・・・」

『全く、ケータイが動くからといってそこまで驚かれるとはこちら

も傷ついてしまうぞ』

「うう……ごめん、えっと」

『フォンブレイバー・ゼロワンだ』

「秋山澪だ。よろしくゼロワン」

『ところでバディ。新しいフォンブレイバーをこの少女に持たせるのか？』

「ああ、女性タイプのフォンブレイバーらしいから澪に持たせた方がいいと思ってな」

『そうか……。なら、オレは深くは言つまい……。頑張れバディ』

「は？」

『というわけで選手交代だ。ホシよ』

「選手交代ありがとうございます。ゼロワン。さて……。レン。何かいう事がありますか？」

いつの間に現れたのか、ウェイトレスの格好をした星が笑顔で立っていた。

笑顔なのだが、どこか怒っているように思つのは錯覚だと信じたい。

「いや、まるでない……。というか星はフォンブレイバーが欲しいのか？」

「……………そういうわけではありません」

「あの……………蓮司」

「ん？」

澪が少し表情を固くして蓮司に尋ねる。

「その子、文月学園の学園祭の時にもいたけど」

「あの時も紹介したけど、彼女は」

「須藤星です。ここにいる蓮司の家族みたいなものです」

「えっと……………二人は付き合っているの？」

「ああ、すまない」

ようやく蓮司は澪のいいたいことの意味がわかった。  
つまり。

「星は色々あって俺がもらう事を拒否した苗字を名乗っているんだ。  
だからというわけじゃないんだけど、彼女達は俺の家族みたいなものなんだ。別に付き合っているとかそういうわけじゃない」

蓮司が話している横で星はゲシゲシと彼の足を蹴っていた。  
逆に澪は安堵の表情を浮かべている。

『やはり……………人間というのは面白いものだな』

須川亮は珍しく困っていた。

家においてあるゲームはすべてやり終えていて暇で暇で仕方のないなか  
った彼はゲームセンターで一日を過ごし、すぐに家に帰るのも嫌  
だからどこかでなにか食べるかと歩いている途中にハムスターが  
何かを探しているのを目撃してしまったのである。

飼い主とはぐれたのか？と思っているとハムスターと目が合い。  
手を動かして何かのリアクションをしている。

普通の人なら可愛いとか何をやっているんだ？と思うだろう。

しかし、

「成る程、いぬ美とかいう犬を探していたら自分がどこにいるのか  
わからなくなってしまったと」

「!!!」

ハムスター、はむ蔵はまさか理解されるとは思っていなかったらし  
く助かったーと須川に訴えて助けてくれと泣きついてきたのである。  
そのため、須川は仕方なくはむ蔵を連れて街を歩いていたのだが。  
彼の前に現れたいぬ美の存在に顔を引きつらせている。

「おい・・・はむ蔵。お前の言ういぬ美って、こいつなのか？」

はむ蔵はこくこく、と頷いた。

最悪だ。と須川は呟く。

何故ならこのいぬ美、彼が購入したサンドイッチを台無しにしてく

れた張本人で、その後に見れた少女により喧嘩へと発展したのである。

「俺がこのいぬ美ってヤツに関わったら絶対」

「いぬ美〜。自分が悪かったあ〜。お願いだから出てきてくれ〜」

「あの小娘と遭遇するような気がした……がそうなりそうだ」

「ああ！お前はまたいぬ美に悪戯しようとしたな！」

我那覇響は須川の姿を見つけるととび蹴りしそうな勢いで近づいて叫ぶ。

今回は問答無用で飛び蹴りという展開にはならなかったので内心安心する。

本当ならすぐにも蹴りかかろうとした響なのだが、彼の掌にいるはむ蔵が訴えている事に気づいた。

「はむ蔵……？」

必死に手振りで訴えるはむ蔵の話を聞いていた響は段々と表情を変えらる。

「すまなかった！！」

ぺこりと響は須川に謝った。

「はむ蔵から事情を聞いた……自分の勘違いで怪我を負わせてしまつてすまなかつた」

「え……あ……いや、あの時は自分も大人気ない？ことをしてしまつてすまん」

まさか謝られるとは思っていなかったので須川は呆然としたがすぐにはつ、となつて響に謝る。

「いや！自分が悪かつた！自分がすべて悪いんだ」

「いや！俺も大人気なかつたつて！」

「いや、自分が！」

「だから俺が！」

二人はギャーギャーと同じ事を繰り返していたが、少しして。

「……お互いが悪かつたつてことで終わりにしないか？」

「うん」

二人はゼーゼーといいながらベンチに座る。

「俺の名前は須川亮。学生だ」

「自分是我那霸響！アイドルだ」

「へえ〜〜」

「む、信じていないな！」

「いや、信じているよ。へ〜。アイドルかぁ・・・どこのプロ？」

「聞いて驚くさ！765プロさ！」

「765って・・・ああ、最近竜宮小町とかいうユニットがいるあそこか。え、なに竜宮小町の人？」

「違うさ！でも、自分もアイドルなんだから頑張るさ！」

「そうか。まあ、あんたみたいに元気で可愛い子ならすぐにでも人気取れるだろ」

須川からしたらただ何気ない一言だったのだが、“可愛い” “元気” という部分に響は一瞬驚く。

「自分をからかっているとかそういうのじゃないよね？」

「そんなことする必要ねえだろ？思った事しかいってないし」

「・・・」

須川の思わぬ言葉に響は呆然とした表情をしている。

Amigoの地下にあるガレージで立花藤兵衛はふうーと息を吐いて額の汗を拭う。

彼の傍には幾つもの機械が散らばっていて、壁には数台のバイクの写真が貼られてある。

貼ってあるバイクは普通のバイクと違い。彼が今まで作成や整備に関わったバイク達。

様々な悪と戦い打ち勝つために力を貸した“相棒”。

『改造サイクロン』

『新サイクロン』

『ハリケーン』

『ライダーマンマシン』

『クルーザー』

『ジャングレー』

『カブトロー』

歴代の仮面ライダー達が乗っていた相棒のバイクをベースにしながら藤兵衛はドラゴンナイトが使ったための新たな相棒の作成に手を尽くしていた。

今までのライダー達の意志を継ぎながらも今までのライダー達のバ

イクを越えるモノ。

作るために藤兵衛は休みながらもバイクの調整やエンジンを選ぶといったことを繰り返している。

「おやつさん。そろそろ一休みいれよう」

『バディのいうとおりです。立花様、休憩も大事です』

コーヒを持ってやってきたスカリエッティと彼の肩に乗っているフォンブレイバーサードが注意する。

「まあ、そろそろ一区切りつけんなあ……明日にはコースの下見もせんといけんし」

「様々なレーサーが集うモトクロス……蓮司がどこまでやれるか楽しみだ!」

「春風君は優秀なレーサーだからね。ブラット君も中々に優秀なレーサーだからどうなるか楽しみだね」

「お、お前もそういうことがわかるようになったか?」

「まだまだです」

二人は楽しげに話をしている。サードはそれを眺めていた。

EPISODE 30 (後書き)

どうせなので、少しばかり日常やってから新しい話突入に行こうと思います。

EPISODE 31 (前書き)

MOVIE大戦MEGAMAX見てきました。とても面白かったです。

とりあえず見た人に一言、切り札の話広めるのだけはやめましょう。

気になる人は映画みてください。そうすれば納得しますよ。

「とうとうこの日が来たな……お前とレースで競い合えるのを楽しみにしていたぞ」

「俺もだよ。今回のレースは俺が勝つ」

「それは私のセリフだ。ブラット・バレットは試練に打ち勝つ」

モトクロス大会の日。

「おっ、走り出したぞ」

「レンとブラットどっちが勝つかない?」

「光、身乗り出すと危ないですよ」

「星のいうとおりだ、気をつけないと泥まみれになるぞ。吉井のよし」

「待つて!? 僕は泥まみれになっていないよ! バイクのメンテを手伝っていたら油まみれになっただけだよ!」

「うるさい、近寄るな。臭いぞ」

ひどおい！と明久は叫ぶ。

実際の所、藤兵衛と明久は少し油の臭いが漂ってきている。

光はこういう臭いが大好きで蓮司のバイクの整備に付き合ったりしていて気にしていないが、敏感な部分がある夜は臭いにうるさい。星はというと、今日は風邪気味なので鼻が利かないのであまり気にしていないとのこと。

「それにしてもみんな残念ですね。用事でこれないなんて」

「まあ、みんな色々な予定があるからね。それに比べて僕なんて・

・・・」

「まあまあ」

光がよしよしと明久の頭を撫でる。

実際の所、久保は知らないが、クリスと須川は女の子に会いに行くという用事で今回欠席となっていた。

ブラットと蓮司はともかくこの二人が女の子に会うという理由になんとなーくシヨックが大きい明久。

『バディ、私たちがいるのにそういう態度はよくないわよ』

「そうですねよ、そんな態度だと女の子には好かれませんか？」

「・・・そうだね。飲み物でも買ってくるよ」

列を離れて明久は売店へと歩いていく。

大会開始までまだまだ時間はある。

「あれ・・・ボディガードさん！」

「あ……」

売店でドリンクを買って戻っている途中に明久は一人の女の子に出会う。

「天海さん、どうしてここに？」

「ボディーガードさんこそどうしてここに？」

「僕は蓮司がモトクロスに出るからその応援に、天海さんは？」

「私は仕事できたんですよ」

春香がいうには今回のモトクロスの優勝者と準優勝者に花束を渡すという仕事を765プロが行なう事となって、春香は何かがあったときの補欠として待機しているのだ。

「そうなんだ。大変なんだね……アイドルって」

「そうでもないよ。私はアイドルになりたくてこの仕事をしているから」

「へえ……凄いね」

「ボディーガードさんも」

「吉井でいいよ？」

「はい？」

「ボディーガードって長くて呼びにくいでしょ？吉井でいいよ」

「じゃあ、吉井君はどうしてこの仕事を？」

「……うーん。なんていったらいいのかな……」

考え込む僕の脳裏にはあの人が見える。

赤いジャケットを着てどこまでも強い人。

今の自分では届きそうにないあの……。

「目標があつて、その人みたいになりたいから……」

「そうなの？」

「多分」

今まで明久は目標に追いつきたくて戦っていたのだけれど、何故だろう？

最近是不思議とそれだけでないような気がする。

「どうしたの？」

「あ、ううん。なんでもないよ……あ、そろそろ始まるみたいだから戻るね」

春香と明久はそろそろレース開始時間が近づきつつあるのでそれぞれ場所へと戻っていく。

「遅かったですね」

「うん、知り合いに偶然会ってね。話し込んだ」

「あ！レンとブラットだよ！！」

光が一直線に並んでいるバイクの中に両隣に並んでいるブラットと蓮司の姿を見つける。

「二人とも～～！頑張れ～～！」

星が手に持っている小さな旗をぶんぶんと振って応援をした。直後、バイクが一斉にスタートする。

誰か一人が優勝者となるために。

EPISODE 31 (後書き)

モトクロスの大会は僕が詳しく知らないのでこれで終わりとします。

話が短いので次の話をすぐに投稿するつもりなので楽しみにして  
てください。

いやぁ・・・MOVIE大戦もう一回見に行きたい・・・。

秋山澪は自身の手の中にあるフォースを覗き込む。

「私の……相棒」

ぼつりと呟いてフォースを開いてゆつくりと起動ボタンを押す。

朝、蓮司は欠伸をして通学路を歩いていた。

「眠そうだね？どうしたの」

「昨日……ケータイで澪と話し込んでいたら時間の過ぎるのが早くてな。あまり寝ていないんだ」

「女の子と話す余裕があつて羨ましいです」

「須藤さん……機嫌悪いね」

「吉井君が悪いというわけではないですよ。隣で欠伸をしている私の『家族』が悪いんです」

うわっ、機嫌悪そうだな。と明久が思っていると蓮司が眠たげな表情で口を開く。

「星」

「なんですか？」

「最近、やけに俺の女性関係にグチグチいつてくるけど、何かあったのか？」

「別になにもありません」

「なら……いいけど」

蓮司はどこか引つかかっているような表情をしながら前を向く。

「あれ？」

「あ？」

文月学園の下駄箱で蓮司と明久は同じ声を漏らす。

「ん？」

蓮司と明久は互いの顔を見て下駄箱の中に入っているものを同時に取り出して眺める。

「白い封筒。形が一緒……字も同一のところからして出したヤツは同一犯と見たほうがいいだろうな」

「でも……誰が僕達に出したんだらうか？」

「どうしました？二人とも」

「あ、いや、なんでもないよ」

蓮司と話し合つて、とりあえず教室に到着してから中身を開封しようという話になり教室に向かって歩いていく。

「そういえば、レン」

「なんだ？」

「明日。予定はありますか？」

「……今の所、ないな」

「でしたら……放課後、買い物に付き合ってもらえますか？」

「いいけど、なにを買うんだ？米か？」

「違いますよ」

星は苦笑しながら答える。

「強化合宿に必要なものをいくつか買いに行きたいんです」

「そういえば、そろそろだね。強化合宿」

「ああ……そうだな」

文月学園では例年、勉強の意欲を上げるといった理由により旅館と借りて強化合宿を行なっている。

これによりクラスごとの勉強意欲を引き立てようと計画しているがそれがFクラスに影響を与えているという事実はいまのところない。

「ダメ……ですか？」

「今の所、予定がないからいいぞ」

「そうですね！ありがとうございます」

嬉しそうな表情をして星はAクラスに入っていく。

Fクラス。

「さて……中身を拝見するか」

「そうですね」

蓮司と明久は小声でせーのっといって封筒を開ける。

『身近の異性からすぐに手を引け。でないとこの写真を学校にばらす』

「脅迫か！」

「ど、どうしたのじゃー!?」

叫んだと同時に傍にいた秀吉（ナース服ver）は慌てて駆け寄ってくる。

「あ、いや・・・って、秀吉！？どうしたのその格好！」

「うむ、演劇の都合で急遽、着る事になったのじゃがどうも胸の部分がすかすかして気持ち悪いのじゃ」

「・・・・・・・・！（ブハア~~~~~）」

「・・・今の一言で何を想像したんだろうな。このムツツリスケベは」

畳の上に鮮血を撒き散らしたムツツリーニを見て蓮司は呆れた表情をする。

「アキ、どうしたのよ？」

「島田さん？別になにもないよ」

「じゃあ、その封筒なによ？」

「別に僕宛に送られてきたものだよ」

「怪しいわね。見せなさいよ」

「何故そんなことをする必要がある？」

蓮司が鬱陶しそうな表情をして見せる事を拒否する。

「見られたら困るものなの？」

「察しろ」

島田はむっとした表情で明久から手紙を奪おうと手を伸ばすがそれよりも早く蓮司が島田の手を叩く。

「いつ！」

「察しろといったんだ。これ以上迷惑かけるなら」

蓮司はひょいと体を動かす。

直後、大量の文具が畳みに突き刺さった。

「お姉様から離れなさい！この豚野郎！」

大量の文房具を構えて清水美春が現れる。

「汚らわしい豚の分際でお姉様の柔肌を叩くとは万死に値します！死ぬ覚悟はよろしいですね！」

「……………っ！」

彼女は何気ない一言だったのかもしれないがその中の“一言”に蓮司は過剰に反応する。

「死になさい！」

叫んで繰り出された文具を蓮司は片手で掴み、もう片方の拳が吸い込まれるように清水の顔へ。

「ストップ！」

清水の顔面を砕く寸前で蓮司の拳は止まる。

横から明久が掴んで引き止めた。

もし、止めなかったらこの教室でスプラッタな展開が起こっただろう。

「……………な……………」

蓮司は震える声で清水を睨みつける。

あまりの気迫にクラスの全員の視線が集まっていく。

「な……………なんですか……………」

清水を強く睨んで蓮司は外へと出て行く。

「あの……………明久君」

「あ、姫路さん。おはよう」

清水は蓮司がいなくなった後、おねーさまーと叫んで島田に襲い掛かったので二人の鬼ごっこが始まり、全員の視線が閑散した頃を見計らって姫路瑞希が話しかける。

「あの……………春風君は大丈夫なんですか？」

なにかあったのではなく、大丈夫なのかという事を聞く辺り、色々

と配慮してくれているのだろう。  
配慮してくれている事に明久は嬉しく思いつつも。

「大丈夫だと思うよ。ありがとう。姫路さん」

「いえ・・・それないですけど」

「悪いけど、僕様子見てくるね」

そういつて明久は蓮司を追いかける。

屋上で蓮司は空を見ていた。

「蓮司？」

「明久か・・・」

「そろそろHRが始まるよ」

「ああ・・・」

「まだ、気にするよね」

「・・・意識しないようにしているんだが・・・どうして  
も思い出してしまうあの日の出来事」

「僕と蓮司が出会い始まったあの日・・・」

「」「ビギンズナイト」「」

『バディ……限界だ』

蓮司の所にゼロワンがふらついた状態でやってくる。  
いつも余裕で明久を小ばかにしていたのにそうゆう態度がまるでない。

「我慢しろ。ストーカー撲滅のためだ」

『そのためにオレのAIがショートしてもいいというのか？』

「ドクターのメンテをサボるのが悪い」

『バディ……お前は圏外だ』

「そうか、なら助けてやる必要もないから苦しめ」

『……すまん、言い過ぎた』

「俺も言いすぎた」

「何のコントしてるのさ。二人とも」

明久が蓮司の卓袱台の前までやってきて尋ねる。

『吉井明久……お前でもいい。セカンドと代わってくれ』

『どうかしたの？ゼロワン』

「というか、ゼロワンくたくたみたいだけど。どうかしたの？」

「最近、漣がストーカー被害に悩まされているというからというのとフォンブレイバーフォースには女性が適任だと思って、対策としてフォースを渡したんだが」

『フォースのヤツはなにをどう考えたのか、事あるごとにオレにメールを送りつけてくるのだ』

「いいことじゃないの？」

『バディのいうとおりよ。私たちフォンブレイバーは兄弟や姉妹のようなものなのよ？慕われているのは良いことなんだからただかメールくらい暖かく見てあげなさい』

『数分おきにメールで送られてくることか？』

「『・・・・・・・・え？』」

セカンドと明久が同時に唾然とした表情をする。  
そりゃそうだろう。ゼロワンのいうとおりなら毎日何十件もメールが送られているという事なのだから。  
相当な量になるだろう。

『あの子・・・・・・・・』

「そのフォースって子」

『わかってくれ』

『「本当にやんちゃだねえ」』

『貴様らは圏外だ!!』

「そのフォースには俺からも注意してやるからしばらく我慢してくれ。とりあえず近々メンテだな」

珍しく涙？を流しながらゼロワンはケータイへと姿を変えて蓮司の掌に収まる。

「よし、全員いるな！来週から始まる強化合宿のことでいくつか連絡がある」

西村先生がやってきたため、二人は会話を中断して席に戻る。

「今回行なわれる強化合宿は他校と合同で行なうこととなった。どこの学校かはまだ言えん」

「何故ですかあ？」

「余計な騒ぎを起こしたくないためだ。お前たちは色々ややこしいことを起こしかねないから」

詳しい事はしおりに書いてあるといい授業を行なおうとする。

強化合宿かあ・・・何も無いといいけどなあと蓮司と明久の二人は思っていた。

久々の普通の生活くらいゆっくり満喫したい。

「ああ、そうだ。集合場所は現地だからな」

『迎えもないのかよ！？』

訂正、普通の生活かどうか怪しい。

薄暗い夜。獲物を求めて“それ”は動き出す。

元々はこの力を試したいそれだけのものだったが、今はどうでもいい。

ただこの力で引き裂いてやりたいーを。

そして、獲物を見つけた。

仲良く赤い車で夜景を眺めている獲物を。

ゆっくりと近づいていーいーいーするよ。

「……」

獲物が何か叫ぶ。

偉そうにいつて黒い道具を突きつけてくるが関係ない。

すべて効果がないのだから。

不適に笑いながら邪魔するものを切り落としていく。

そうすると地面に赤い血だまりが大量に出来上がりました

EPISODE 32 (後書き)

この作品はアンチが混じっていくので嫌な人は退場する事をおススメします。

「ここが事件の現場ですか・・・」

「ってか、何で俺達がここに来ないといけないんだよ？」

葉山進と関根健二の二人は周囲を青いビニールシートで覆われた現場へと足を運ぶ。

周囲には自衛隊員が立ち入ろうとするものを追い払っている。

本来ならば警官の仕事なのだが、今回の事件から特生自衛隊が事件を担当する事になったのだ。

「昨日、ここで警察の大規模の連続殺人犯逮捕劇が行なわれたそうよ」

「家城・・・」

「逮捕劇って・・・あの最近世間で騒がれている例の連続殺人事件か？」

「ここ数日発生している女性だけを狙った連続殺人事件、今回。警察はおとりとして男女の捜査員二名を人気の少ないところで待機させ。獲物がかかるのを待った」

隊長の富樫が現れる。

「その結果、現場の捜査員すべてが惨殺された状態で発見された」

「ぎょ、惨殺!？」

「警官隊は拳銃を所持していたのに殺されたのですか？」

「そうだ。しかも一撃で頸動脈をズバリらしい。相手は中々に強敵だ。それに拳銃の弾丸も効かない。何より」

富樫が言葉を区切り、述べる。

「病院に運び込まれた警官の最後の一言がバッタの怪物ということらしい」

「ということは、謎の生物がこの町に潜んでいるという事ですよね?」

関根の言葉にそうだ、と富樫は答える。

「しばらくは私服で町の巡回を行なう! いいか、くれぐれも警官と揉め事は起こすな。ややこしい事になるうえ町がパニックになる可能性がある」

富樫の言葉に三人は頷く。

「え……強化合宿なんてあった？」

桜ヶ丘女子高等学校軽音部部室。

そこではいつものように紅茶やケーキを食べながらまったりと楽しい話をしている軽音部の面々がいて。

漣は驚きの表情をして律に尋ねる。

「今日、先生がいつていたんだよ。山の方にある学校なんだって」

「勉強合宿なんてだるいよね」

「でも、みんなと合宿できるなんて嬉しいわ」

「唯先輩……勉強をしないと卒業できませんよ」

「あずにゃんのいけずっ」

強化合宿について話し合っていくみんなを見ながら漣は考えていた。そういえば、蓮司も合宿じゃなかっただろうか、と。

ここ最近、彼と一緒に行動をする事が多くなっている。

まるで昔のように戻ったみたいで嬉しいけれど、どこか物足りない。

そう、物足りない。

昔のように話せることはとても嬉しい。一緒に歩ける事も嬉しい。

けれど、物足りない。

何故？と自身に問いかけても答えは胸の激しい動悸。

「一体……どうしたんだろうか？」

「漣？」

「漣先輩」

「え……あ……な、なに？」

「どうかしたの？ボーっとしていたけれど？」

「いや、そんなことは」

ムギの言葉に、漣は否定する。

「もしかして、レン君のこと考えていたの？」

唯の言葉に漣はボンと顔を赤くした。

もう、軽音部の面々は既に漣の態度でだいたいのことを予測できていて。

今回の漣の反応を。彼女達は

『可愛いなあコイツう〜〜』という態度をしていた。

放課後、蓮司はストーカー対策として秋山澪と一緒に帰っていた。ストーカーが何かしようとするのを防ぐために、出きるなら嫉妬の対象が自分になればいいという考えも含まれているが、彼女にはこのことを話していない。話せば心配されるし、なにより一人で抱え込んでしまいそうだから。ありきたりな話をしていた。

「というわけで、文月学園が合宿で何があっても俺が動く事はできない。だから、これを渡しておこうと思う」

そういつて、あるものを澪に渡す。

「これは？」

「フォンブレイバーが様々な事に対処できるように開発された補助パーツ“ブーストフォン”だ」

「ブーストフォン？」

「ああ……そういえば、フォースはどうだ？」

「最初は戸惑ったけれど。今は大切なば、バディだ」

「恥ずかしいならいわなくてもいいぞ？」

「い、いや！れ、蓮司がやっていることだ・・・で、できるなら一  
緒の事を体験したい」

「・・・・・・・・」

『そうよ！その通りよ。バディ』

どこか、きよとんとした表情をしている蓮司の耳元に声が響く。

その声の主を探していると溼の制服のポケットからフォンブレイバ  
ー・フォースが顔を覗かせていた。

『初めまして、春風さん。私がフォンブレイバーフォースです』

「あ・・・・・・・・ああ・・・・・・・・」

『ところで、ゼロワン兄様はどこにいるんですか。話をしたいん  
ですけど』

「あー、ゼロワンは・・・調べモノがあるからここにはいない」

『はあ~~~~。お話したかったのに』

テンションの高いフォースにたじたじになる。

知っているフォンブレイバーの中で一番テンションが高いのではな  
いだろうか？とさえ思うほどにフォースのテンションは高い。

ゼロワンが来るのを死ぬほど拒んだ理由というのはこれが、と納得した。

「あれ……秋山さん？」

「？」

道を歩いていると、誰かが漣の名前を呼ぶ。

声のほうを見ると、一人の男子生徒が立っていた。

青いブレザーを着たその男は、顔立ちは整っていていわゆるイケメンというタイプで性格は優しくそうな雰囲気を出している。

誰だ？こいつ。と蓮司が思っていると、漣がその人物を名前を言う。

「は、早瀬君」

「漣、知り合いか？」

「うん、軽音部のみんなで以前いったライブハウスで話をした人……」

「へえ」

「初めまして、早瀬といいます。えつと……」

「春風蓮司だ」

淡々と蓮司は答える。

初対面の相手にはどこかクールに。悪く言えば冷酷に対応してしまう。

「えっと……秋山さんの彼氏とか？」

早瀬の言葉に漣はぼん！と顔を真っ赤にして戸惑う。  
どうやら今の発言は漣にとって爆弾の導火線に火をつける言葉だったらしい。

「か、か、彼氏とか、そ、そういうのじゃ……」

「友達だ。そういうあんたは？」

「僕は顔見知りという程度だ」

「ふうん、悪いが先を急ぐ。漣」

「え、あ……ごめん。早瀬君」

ぺこりと早瀬に頭を下げて彼の横を通り過ぎて蓮司と漣は歩いていく。

「あれが……春風蓮司ねえ」

「蓮司、あんな態度はないんじゃないか？」

「初対面にはああなってしまうんだ。すまん」

通学路を歩きながら漣は先を歩いている蓮司にくどくどと説教をしている。

いつもは蓮司が話して漣が頬を赤くして答えるという状況なのに、今回は異なっていて、漣が蓮司に母親のように説教をして、蓮司がぶいっとそっぽを向いているという。何気に面白そう。

「……………」

漣は自身の胸に手を置く。

蓮司の隣に居るだけで激しい音を立てている。

「漣？どうかしたのか？」

「え……………ああ……………いや」

顔をそらして漣は答えた。

「よし、行くぞ」

食器を“家族全員”で片付けた後、四人は出かける準備をする。数日後に控えている強化合宿にそなえて必要な道具を買いに行くだけなのだが。

蓮司は着ている服の上からジャケットを羽織り、大切にしているソフト帽。

星は白いワンピースと、お嬢様みたいな格好。光は体を動かす事に重点を置いているラフな格好。そして。

「……………おい、夜はそれでいいのか？」

「ああ、問題ない、周りの視線を気にする必要など我にはないからな」

「そういうものなのか？」

目の前にいる夜は黒いゴシックを身に纏っている。

「それに……………お前の視線だけあれば問題ない」

「さあ、レン。行きましょうー！」

「楽しみだなあ！」

「お、おい…………腕を引っ張るな」

「む、貴様らあー！」

夜の叫び声を後ろに聞きながら蓮司は二人に手を引かれて歩いていく。

「ねえねえー、これなんてどうかなあ？」

「そうですね、こっちなんでどうでしょうか？」

「いや、これがいいのではないか？」

「……はあ」

蓮司は手に持っている荷物を近くのベンチの横においてそのまま空いているベンチに座り込む。

今、彼らがいるショッピングモールは街の中でかなりの規模で、多くの人達が利用している。

星達は服を楽しげに選んでいた。

「……あ、いないんだ」

蓮司は明久に預けたゼロワンの事を思い出してポケットに入れようとした手を引っ込める。

幸せそうな彼女達を見ていると、蓮司も幸せな気分になっていく。

「俺も……変わったな」

昔の俺は自分を育ててくれた人以外には懐く事も手を差し伸べるよ

うな事もしなかった。

ただ、今ある時間を大事にしているだけ。  
あの日がくるまでは……。

「中々に楽しい所だね。ここは」

背後から聞こえた声に蓮司の表情は険しくなり振り返る。

「あなた……」

「やあ、また会えたね」

男はにこにこといやらしい笑みを浮かべてこちらをみていた。

EPISODE 33 (後書き)

次回から新しい話へと移動になると思う・・・どうしようかなあ？

次回から合宿編になりつつ・・・ある話に移ります。

男が全てを手に入れたいと望んだのはいつからだろうか？

少なくとも子ども時はただ純真に何かを得ようと必死になっていたら割と最近なのかもしれない。

『最後まで愛せなくて、ごめんね………幸せな人と出会って』

今でも脳裏に残っている、そして自分を縛り付けている呪いの言葉。

母親はあの屑を愛していたのだと思う。

思うというのは俺はあの屑が嫌いだからだ。

母を何度も蹴り飛ばして、首を絞めたりということを繰り返す。

母が出かけようとしただけで俺を見捨てるのかとすがりつく。

見ているだけでおぞましかった。

好きになった人に一方通行な愛を与えるなんてことはしない。

そう、胸に誓った。

そして、その思いを拒否したヤツを。

した。

俺と明久は開いた口が塞がらなかった。

何度も互いの頬をつねったり、お互い夢なんじゃないかと言いつたり。

けれど、これは夢ではない現実の話。

「なんで律達がいるんだ!？」

今日から文月学園の強化合宿で俺達はローカル列車に揺られながら目的地の場所にたどり着いたのだが、

どういうわけか、バスから降りて来る女の子達・・・というか、桜ヶ丘女子高等学校の人達が下りてきていてそこには律達が出た。

ちなみにFクラス以外のクラスは既に荷物を各部屋へと置くために移動していた。

「なにをしている。春風たち。さっさと荷物を部屋において来い」

「西村先生、どうして桜ヶ丘女子の生徒達がこちらに?もしかして、合宿で合宿するのは」

「その通りだ。この後発表するつもりだったのだが、学園長同士が知り合いらしくな。いっておくが発表するまでは内密にしているんだぞ」

「わかりました。鉄人」

「西村先生だ」

明久にゲンコツを叩き込みながら俺達の部屋を言い渡して去って行く。

ちなみに部屋割りのメンバーだが、俺、明久、秀吉、雄二、ムッツリーニ。須川は別部屋だった。

「まあ、後で会えるだろ」

そういつて須川は部屋へと向かう。

「それじゃ、俺達も各自好きに動くか」

「そうだね」

蓮司が宿を歩いているとさらに驚くべき人達と遭遇した。

「レンジー！」

「クリス？ということとは765プロの人達もいるのか？」

「ああ、こここの近くで行なわれるライブに参加するためにね。何人かは部屋で休んでいる」

「お前はなにをしているんだ？」

「パパラッチとかがこの付近に多いという話を聞いたから変な人が

いないのか確認をしているんだ」

「へえ、立派なガードマンだな」

「そうかもね」

そういつて二人は他愛のない会話を始める。

「吉井君〜」

「あれ、天海さん！どうしてここに？」

「私も驚いたよ〜。偶然ってあるんだね〜」

「うん、天海さんは仕事でここに？」

「そうなの！」

明久と天海は仕事の話や文月学園の合宿の事を話し合った。

「あ、蓮司。聞いてよ。さっき天海さんと会ってさ」

「俺もクリスと会ったぞ。どうやら知り合いが沢山いるみたいだな」

そんな他愛のない会話をしながら蓮司と明久は部屋に入り込む。

部屋に入って二人を出迎えたのは、女子によって隔離された秀吉。

翔子によって関節技をかけられている雄二と尋問を受けている土屋の姿だった。

「アキいいい！」

「うわっ！」

明久の姿を見つけて襲い掛かってきた島田を慌てて避けながら明久は距離を置く。

「これはなんの騒ぎだ？」

「とぼけないで！盗撮犯」

「盗撮？俺達か？」

蓮司の言葉にそうよ！とCクラス代表の小山が叫ぶ。

小山が語るには女子の入浴室に盗聴用のカメラが隠されていた。

盗撮といえばFクラスの生徒が関わっているかもしれないと判断してここに押しかけてきたとのこと。

「アホくさ」

「なっ！？」

「どづいづことよー！」

「ただか盗撮カメラがあったからFクラスの人間の仕業かもしれないと判断してここに突撃それでもCクラスの代表か？浅ましいにも程がある」

「なん」

「やらにー！」

会話を遮って蓮司の説明は続く。

「盗撮っていうのは見つからないから盗撮っていうんだよ。それなのにただの“何の知識もない”一般人がそんなものを見つけられると思うか？それはフェイクだぞ」

「なっ！」

「でも、あんたが用意してないっていう証拠じゃないわよ」

うるさい島田が叫ぶ。

「悪いが俺と明久は到着してから知り合いにあって話し込んでいた。それに入浴中以外はずっと鍵がかけている場所にいつて仕掛けられるわけないだろ？それでも疑うっていうんなら勝手にしろ。但し、俺はそいつらを軽蔑するがな」

「あの、明久君たちは本当にやっていないんですよね？」

「信じる信じないはそっちの勝手だ」

「なんの騒ぎだ！」

その時、ドアを開けて西村先生がやってくる。

「先生！男子が覗きをしたんです！」

小山は先ほどの状況を事細かに説明した。  
話を聞いた西村先生は先ほどの蓮司と同じことを述べる。  
それを聞いた小山達は絶望的な表情をした。

「そんな……」

「しかし」

「西村先生、それ以上はここでいう事を控えた方がよろしいかと」

「む……そうだな。すまん」

蓮司は西村に次の言葉をいうことを控えるように言う。  
一体、いつの間にこんなものを設置したのだろうか。

その後、坂本、土屋達はFクラスを巻き込んで覗きを決行する事を決める。

EPISODE 34 (後書き)

やばい、スランプじゃ・

夕方、学園長の長いお話も終わって蓮司と明久はFクラスの面々と少し距離をあけた所で夕食を食べている。

メニューはハンバーグ。サラダ、ご飯、味噌汁といったもの。

「んで？」

須川の言葉が合図となって蓮司が口を開く。

「女子風呂を覗き込んだ犯人を捕まえる」

「捕まえるって、坂本達は覗く気満々だぞ。この状況で捕まえるって、身内売るようなもんじゃないのか？」

「須川君の言うとおりだよ。どうするの？蓮司」

「覗きをしたヤツの前提が男になっていないか？お前ら」

蓮司はいつもと変わらない表情をして答える。

それに対して明久と須川は目が点の状態となった。

「まさか・・・春風。覗きの犯人は女性だと思っているのか？」

顔を近づけてひそひそ声になる須川。

実際の所、覗きというものは異性に対して行なうものであり、同性に対して行なうなんていうことはまずありえない。

「忘れたのか、この文月学園には堂々と自分は同性愛者だというヤツがいるだろ？」

「「「あ」「」」

同時にドリルのような頭をしたツインテールを思い出す。

「でも、証拠とかないよ？それがどうしてあの人だってわかるの？」

「西村先生に教えてもらったんだが、女子の入浴時間まで浴室は鍵をかけられているらしく誰も入室できないし。入口の所には監視カメラが設置されていてゼロワンに調べてもらった限り死角はない」

「そうか・・・、部屋に最初に入るのは女子。覗き騒ぎが起こったのは最初に入った女子達が見つけたカメラ」

「そう。女子がカメラを見つけた・・・その前に設置したのが女子なら納得がいく」

「そっか・・・でも、どうやって犯人だという証拠を見つけるの？僕達だけじゃ正直無理だよ」

「だから、ここに姫路がいて、話を聞いてもらっているんだ」

「あ、成る程」

「え、あ、はい！」

三人はそこで真剣に話を聞いている姫路瑞希へ視線を向ける。実は先ほどから彼女には話を聞いてもらっていた。

どうしてかというところ、彼女は本気で明久達がやっていないと信じていて、何か協力できないかと訴えてくれた。人と接してきていたのと、様々な経験から蓮司は本心からだとは判断して彼女に頼む事にしたのである。

「でも、姫路さんだけで大丈夫かな？他にも」

「今俺達が覗きの犯人として疑われている状況下で本気で心配してくれている子は文月学園内だけではつきりいって少ないぞ。島田にいたつては本気で疑っているからな。彼氏がいる子はちゃんと話を聞いて納得するだろうが、状況が悪い・・・と、話が逸れたな。姫路にやつてもらいたい事は簡単だ。入浴時間中に証拠を探してほしい」

そういつて、蓮司はゼロワンに録音してあつた音声を流す。音声はムツツリーニからもらつたものをコピーしたものなのだが、どうやら犯人はお尻に尻型の痣があるらしい。

「痣を確認すればいいんですか・・・？」

「ああ、証人。しかも女子が居れば確実に捕まえる事ができる。ただ、このことは他の面子に知られる事無くやつてほしい」

「なんでだ？」

「どこのどいつがどんな状況で何を喋るかわからないからな。俺達が疑っているというのがばれたらどんな手を打たれるかわからない。最悪。俺達が覗きの犯人に仕立て上げられてしまう可能性があるからな」

「成る程ね」

「まあ、姫路さんだからなんとかかなんだろー。そんなじゃ、俺達はどうすんだ？」

「・・・覗きをしようとしている奴らの情報を密かに相手に流す」

「それってつまり」

「妨害だよな？」

「女子に情報を流す事で信頼を得るつもり・・・ですか？」

「まあな。壊滅的な信頼を少しでも繋ぎとめておく。最悪な事態を避けるためにも」

「最悪な事態って・・・？」

「まだ確定していたわけじゃないから何もいえない。とりあえず須川は坂本達に感づかれないように情報を集めてくれ」

「おう」

「姫路、かなり重大で場合によっては厄介な事になるけど。本当にいいんだな？」

「はい・・・このままなんて嫌ですから」

「そうか・・・」

「ごめんね。姫路さん」

「大丈夫です。明久君」

「補佐として星達もいる。密かにやってくれよ」

「はい！」

その日起こった男子による覗き騒動は完璧に鎮圧された。

「え……あっちにいるのは文月学園なのか？」

夕方の入浴時間も終わり部屋に戻った澁は唯達から聞いた話を聞いて目を見開く。

「ああ、なんでも文月学園と合同勉強できるらしいぞ。でも、部屋は隔離されているからみんな行く気しないんだけどな」

「一人だけ言ったら寂しいものね」

「ムギ、それは少し違うと思う。でも、蓮司いるのか」

しばらく蓮司に会えないと思ってショックを受けていたというのに、すぐ近くにいると聞いては会いたいなあと思ってしまうのが当然のこと。

そして。

「レンに会いに行くのはいいけど、戻ったら百パー皆から質問攻めに会つと思つぞっ」

「うっ！」

「あっ、そっかー。そしたら澪ちゃん、ばれちゃうねえ」  
「な・・・なにを」

全員の視線を浴びながら澪は戸惑ったような表情をしつつ尋ねてしまった。

聞かなければよかったものを。

「澪ちゃんがレン君のことを大好きだったこと」

「うっ！！！！！！！！！！」

唯の指摘に澪の顔はどうしようもないくらい真っ赤になる。

あれからなんやかんやと坂本は他のクラスメイト達を巻き込んでの覗き騒動を展開していたが、すべて叩き潰されていた。

「それにしても、覗き騒動が起こっているとは知らなかった」

「また、潰されて説教受けているみたいだね」

「まあ、俺達のはのんびりしておけばいいさ。姫路から連絡がきたが、証拠もつかめた。これ以上何かあるなら証拠を突きつけてツミにすればいいしな」

「そういえば、今日の夕方は肝試しやるんだっけ？」

「ああ、他校の女子達や宿泊客も来る一般的なものらしい」

蓮司、明久、須川、久保、姫路という組み合わせで話をしていた。他のメンバーはほとんどが女子で構成されていて男子は鉄人たち教師によって説教を受けている。

「まあ、今日はその肝試しとかいうのを楽しむとするか・・・」

「そうだね。でも、姫路さんは参加しない方がいいんじゃない？」

「う・・・そうですね」

姫路瑞希はお化けといったものが大の苦手で、最悪気絶してしまう可能性もある。

だから、明久は参加しないほうがいいという。彼女は少し悔しそうな表情をしていた。

「久保君や須川君はどうするの？」

「僕は勉強の息抜きに参加するよ」

「右に同じく。てか、残っていたら最悪覗きの騒動に巻き込まれる可能性あるからな。めんどくさいけど」

夜。

ホテルの従業員さんに案内されてホテルの裏にある肝試し会場の入口に集まっていた。

「桜ヶ丘の人達も来ているみたいだね」

「そうみたいだな。こんな大人数でどうやって肝試しをするんだろ  
ーな？」

蓮司の言葉と同時に従業員が説明をする。

「今日はお越しくださってありがとうございます。肝試しの説明を  
始めようと思います。肝試しはこの裏山にある廃寺にあるカードを  
取りにいつてもらいます。ちなみに肝試しはペアで行ないます。ペ  
アの選別はくじ引きで行ないます。同じ番号同士の人が相方です。  
それではくじを引いてください」

従業員の言葉で蓮司達はくじを引く。

「明久、何番だ？」

「僕は16番だね。蓮司は？」

「13番・・・須川や久保は？」

「僕は15番」

「俺は14番・・・って、順番続いてんな」

「それじゃ、ペアを探しに行こうか」

「そうだな」

明久の言葉でそれぞれペアを探しに向かう。

秋山漣は震える手でペアの番号を見る。

「どうして……」

彼女は肝試しに参加するつもりはなかった。怖いのは嫌いだから。

しかし、律と話をしている時にお化けなんか怖くない。と啖呵をきってしまったがために参加する事となった。

「13番って……不吉すぎるじゃないか……」

「漣？」

びくう!?!と背後から名前を呼ばれて彼女はおそるおそる後ろを振り返る。

「なにやっているんだ？怖いのか苦手だったろ？」

「れ、蓮司……な、何番だ!？」

どうしてここにいるんだ？と尋ねようとした漣だったが、恐怖心が変に先走って番号を尋ねるといふ失態をしてしまう。

「13番」

持っている紙を見せる。

そのときの漣の表情は説明するには難しいものだった。

まさか漕とペアになると思っていなかったため最初はかなり驚いてしまったけれど、今はペアになれてよかったと思っている。  
合宿前の買い物で蓮司の前に現れたあの早瀬という人物の言葉が頭から離れないでいたから。

「キミは秋山さんのことをどう思っているの？」

「大切な友達」

「即答だね……でも、それは本当かな？」

「何がいいたい？」

早瀬は笑みを浮かべているが笑みにはどこか不気味だと、蓮司は感じていた。

当人は何を思っているのかわからないが。

「キミは本心を隠そうとしている」

「本心？」

「キミは彼女の事を愛している」

「……?」

「彼女の事を愛しているのに認めないっていうのは卑怯だよ?」

それだけいって早瀬は去っていく。

彼のいう事は間違いである。

蓮司は本心から彼女の事を大切な友達だと思っている。それに、

「（愛つて……なんなんだ？）」

蓮司は愛というものがわからない。

家族としての好きというものなら理解できる。

だが、彼は他人同士が愛し合うというものを理解できない。好きは理解できるのに、愛はわからない。

それが春風蓮司の欠点であり欠陥といえる部分。

「（漣といたら……わかるかな？）」

とりあえず肝試しを楽しもうと蓮司は思考を切り替える。

「（どうしよう!? 蓮司とペア!? 嬉しい! 嬉しい……けど……もし、気絶しちゃったらどうしよう!?）」

漣は蓮司がペアなことで舞い上がっていたが肝試しのことでストンと胃に何かが落ちたような不安がやってきた。

もし、彼の前で気絶してしまったらと考えただけで……。

「漣? どうかしたのか」

「あ、いや! な、なんでもない」

「やっぱり怖いのか?」

「こ、怖いけどやめるつもりはないぞ!」

「そうか」

このやり取りもこれで十回くらい繰り返している。  
先ほど、次のペアが裏山へ向かった。  
次のペアが向かったら次は自分たちの番になる。

「どうやら僕たちの番みたいだ」

「そ、そうですね」

クリス・ラミエルと萩原雪歩の二人は裏山に入っていく。

765プロ達のアイドルは仕事の一環としてこの肝試しに参加して  
感想を教えてもらうという事になっていて、彼女の他に、春香、真、  
響の三人が参加している。

真と雪歩の二人は肝試しと知った伊織が電話でこわい話をしたの  
でがくがくと震えていた。

もし、裏山にトイレがあったらどうしよう。

そこから顔がぬおーと現れでもしたら。

「大丈夫・・・かい？」

「え・・・あ・・・はい」

クリスに言われて雪歩は正気に戻る。  
どうやら怖い妄想をしていたようだ。

「大丈夫だよ。何かあったら僕がついている！」

「あ……はい」

不思議と、クリスの言葉は心の奥に染み渡っていく。  
クリス・ラミエル。765プロが雇っている探偵さんの知り合いらしく頼りになるという太鼓判を押されてボディガードとなっている。

男の人が苦手な雪歩なのに、どういつ訳かこの人と触れているのに怖いとか苦手とかそういう感情がなく、むしろ安心感があった。  
何故だろう？

「じゃあ、行こうか」

「はい、クリスさん」

頷いて二人は入っていく。

EPISODE 35 (後書き)

あれですね。最近素でカップリングに悩んでいる私が居ます。

そして、このままいくと年末に鬱話が年明けに暗い話になりそうなドラゴンナイトが目の前にある……。

こついう場合はファイズを更新するかブレイドを投稿するかのどちらかか！

ところで、原作はある程度重視した方がいいですかね？ISを書く場合。

どうも、原作重視しすぎると堅苦しくなってしまうんですね。僕の場合。

ま、好きなように書けばいいかあ！

EPISODE 36 (前書き)

新年初投稿がこんなんでいいのか!?!?と思いつつ投稿しております。  
楽しんでください。

裏山は木々が茂っていて、星空が見えない。

そして、時々風が吹いているので不気味な音が聞こえる。

よくこんな場所があるなあ。と蓮司は肝試しの場所にうつつけすぎて感心してしまう。

「・・・・・・・・・・！」

今にも気絶するんじゃないかと漣がすっかり自分の腕にしがみついているのに急がないのに。と蓮司は思っていた。

まあ、漣は気絶しないように必死になっているから仕方のないことなんだけど。これじゃ話す事もできないだろうか？

「な・・・なあ、蓮司」

「ん？」

「蓮司って・・・・・・・・」

漣は何か言おうとして鳥の鳴き声を聞いてびくっ！と震える。

「大丈夫だ。ただの鳥だ」

「う・・・うん」

回りを確認して蓮司は行こうと促す。

「（どうしよう・・・聞きたくても聞けない）」

漣はさつきから蓮司に聞きたくて聞けないことがある。自分のことをどう思っているのか？

昔、同じことを聞いたことがある。

その時は『わからない』といわれた。

どうして、と尋ね返すと蓮司は真顔で。

『俺はみんなが当たり前のように知っている感情が欠落している・・・だからわからない』

家族として育ててくれた人は大切に思っている。

けれど、大切ってなんだ？と深く考えると“わからない”いつもその答えが返ってくる。蓮司は答えていた。

あれから色々あったみたいで昔のような無表情のまま話すという事はないけれど、時々わからなくなってしまう。

蓮司は自分のことをどう思ってくれているのか・・・きつと、それを聞いても蓮司はわからない、という表情をするだろう。

でも、自分が思っているだけで蓮司がどう答えるのかはわからない。蓮司は・・・。

ガサツ！

「な・・・なに？」

「・・・漣、後ろへ」

蓮司はいつもより真剣な表情で近くの茂みを睨んでいる。

「(なんだ……この気配……?)」

近くの茂みから放たれる殺気に身構えているのだが、どういふ訳か敵意を持つ仮面ライダー……いや、それ以上の気配を感じる。例えば、星達を狙った騒動の時に現われたあの男のような。

「(ここには鏡がないから安全な所に移動する術がない……とにかく、刺激しないように安全な所に避難しよう)」

すぐに変身できるようにポケットの中にあるアドベントデッキに手を入れておいて蓮司はじりじりと茂みの相手に刺激しないようにしてゆっくりと離れていこうとする。

ガサガサッ！

「グオオオ！」

「っ！伏せる！」

「きゃっ！」

“何か”が凄い勢いで蓮司達の頭上を通過して背後にあつた木を切り裂いた。

切り裂かれた木はボロボロと破片を撒き散らして大きな音を立てて後ろに崩れ落ちる。

たつた一撃。

たつた一撃で木を破壊した事に蓮司は驚く。

そんな相手を変身せずに戦うとかなり厄介だ。

師匠などは軽い身のこなしで攻撃などをかわすこともできるだろう。

だが、後ろには怯えている澪がいる。

彼女を守る事が最優先と考えて蓮司は澪の腕を掴んで動き出す。

「行くぞ！」

「う、うん！」

澪は戸惑いながら蓮司の後を続いていく。

“何か”は不気味な唸り声を上げて後を追いかけてくる。

「くそっ……最悪すぎる」

「れ、蓮司……なにが……」

「っ！澪！」

「えっ!?!」

蓮司は澪を抱き寄せる。直後、澪がいた場所をソレは切り裂いた。

「なんだ……こいつは」

現れたソレを見て蓮司は戸惑ってしまう。

何故なら現れたソレはドーパントでも、仮面ライダーでもましてやゼビアクスの使役するモンスターではない。現れたソレは全身が飛蝗のような姿をしていた。

いや、正確には人の形をした飛蝗というのが正しいだろう。

口は様々なものを噛み砕けれそうな牙が並び、額の触覚は相手を探すためか動いている。

そして、白い瞳は殺意を秘めて蓮司を睨んでいた。

「(なんだこいつ……ドーパント……ましてやモンスターじゃない……)」

正しい言葉を使うなら怪人。というのが正しいかもしれない。

「グオオオオオオオオオオオオ！」

怪人は唸り声を上げて腕を振り下ろす。

腕の側面には鋭い歯のようなものが並び触れるだけで蓮司の体を切り裂いてしまいそうだ。

「っ！」

漣を抱きしめて体を回すようにして攻撃を避ける。

「すまん！」

「え……きゃあああああ！」

悲鳴を上げる漣に謝罪しながら蓮司は彼女を抱きかかえて走り出す。怪人は唸り声を上げて木々を飛びながら追跡してくる。

飛蝗のように飛んで近づいてくる怪人と段々と距離が縮まってきていた。

このままではヤバイ。

ポケットの中にあるデッキを取り出そうとした時。

『SHOOTVENT』

ドガン！

頭上を砲弾が通過して怪人の体を撃ち抜く。

「・・・すまん！」

攻撃してきた人物が誰なのかわかり蓮司は感謝の言葉を告げる。

そのまま裏山を駆け下りていく。

彼女を安全な場所へ連れて行くために。

「なんだこいつ・・・モンスターでもドーパントという存在とも違う。それに」

「グオオオオオオ」

砲弾を肉体に受けたモンスターはある程度のダメージを受けているはずなのに、どういいうわけか目の前にいる怪人は。

「まるで効いていないとは・・・それほど堅い肉体ということなのか？」

トルクはマグナバイザーを構えて目の前の怪人の動きを伺う。

突如、目の前に怪人の腕が振り下ろされた。

「がっ!？」

一瞬で間合いを詰められて攻撃をされた事に戸惑うトルクに追い討ちをかけるかのように足を払い、地面に倒して手の爪で殴り続ける。バチバチッとアーマーに火花が散った。

「（モンスターとは比べられないほどの威力だ！なんなんだこいつは一体！？）」

戸惑いながらも腹部にマグナバイザーの光弾を叩き込むが怪人はダメージを気にしていないのか仰け反る事が無い。

このままではマズイ。

仮面ライダーがベントされるにはライダーの必殺技を受けるか、一定量のダメージを受けるの二つだ。

そして、トルクは後者の状況に陥りつつある。

『FINAL EVENT』

「グオオオオオオ！？」

音声が響いてエビルダイバーに乗ったステイングの必殺技“ハイドベノン”が怪人に炸裂して怪人は離れた木にぶつかった。

「大丈夫かい？」

「助かった・・・すまない」

ステイングに助けられて起き上がるトルク。

「それにしてもあの怪物は一体・・・」

「っ、いない！？」

ステイングとトルクの二人が怪人の吹っ飛んだ方へ向かってみると、そこには血が数滴、木についているだけで、何もなかった。

「失格だな」

「仕方ない。非常事態という名の逃走だから」

肝試しは結果的に途中退場となったので、景品などそういうものはなし。

（ちなみに、久保とクリスについてはパートナーが気絶したので退場したのである）

残念賞みたいなもので白い布をかぶったような可愛いお化けのぬいぐるみがついたストラップをもらった。

二人は宿へ戻るための道を歩いている。

ちなみに二人つきりであった。

「なあ・・・」

「なんだ？」

「蓮司に聞きたいことがあるんだ」

「・・・ん？」

立ち止まって蓮司は溲を見る。

???SIDE

「ふうむ、順調に進化しているみたいだけど、やっぱりあそこの弄り具合が悪かったみたいだ。あれは近々処分しないとイケないね」

「そうなるか」

「うん。脳の大半が野生に戻りつつあるし、こりゃ近いうち大きな動きを起こすね。その時に消滅させよう」

「ヤツに気づかれるような事はないだろうな？」

「それはないよ。虫の息の人間に何かできるとか思えるかい？」

「ならいい・・・」

SIDE OUT

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5042w/>

---

新訳・仮面ライダードラゴンナイト

2012年1月2日10時51分発行